

人間文化研究機構における共同利用・共同研究

——ファクトブック（2010-2015 年度）——

刊行のことは

大学共同利用機関とは、各研究分野における我が国の中核的研究拠点として、個別の大学では維持が困難な大規模な施設・設備や膨大な資料・情報などを国内外の大学や研究機関などの研究者に提供し、それを通じて効果的な共同研究を実施する研究機関です。

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構（人文機構）は、2004 年 4 月 1 日に設立され、当初は、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所および国立民族学博物館の 5 つの大学共同利用機関で構成されていました。2009 年 10 月 1 日には、新たに国立国語研究所が加わり、現在は人間文化にかかわる 6 つの大学共同利用機関によって構成されています。人文機構は、これら 6 機関が、それぞれ設立目的を果たしながら基盤研究を進めるとともに、学問的伝統の枠を越えて組織的に結びつき、自然環境をも視野に入れた人間文化に関する研究組織として、大学共同利用の総合的研究拠点を形成するものです。

これまで、人文機構 6 機関は、それぞれの研究者コミュニティに支えられながら運営され、共同利用・共同研究を推進してきました。今後はさらに、研究者コミュニティを越えて広く、全国の大学や研究機関などの研究者にご利用いただくため、ここに『人間文化研究機構における共同利用・共同研究——ファクトブック（2010-2015 年度）——』を作成いたしました。6 機関がそれぞれ保有する資料や施設とその利用状況、ならびに共同研究の体制、実施状況、研究成果について、データ集として示すものです。毎年度、6 機関は要覧や年報などを作成し、周知に努めてまいりましたが、このたび新たに、6 機関全体にわたる共同利用・共同研究に関するデータに基づき、人文機構の活動をご紹介します次第です。

人間文化研究機構

機構長 立本 成文

目 次

刊行のことば	i
--------	---

1. 共同利用体制 1

1-1. 国立歴史民俗博物館	1
1-2. 国文学研究資料館	5
1-3. 国立国語研究所	8
1-4. 国際日本文化研究センター	11
1-5. 総合地球環境学研究所	15
1-6. 国立民族学博物館	17

2. 共同利用の実績 23

2-1. 国立歴史民俗博物館	23
2-2. 国文学研究資料館	23
2-3. 国立国語研究所	24
2-4. 国際日本文化研究センター	24
2-5. 総合地球環境学研究所	25
2-6. 国立民族学博物館	25

3. 共同研究体制 27

3-1. 国立歴史民俗博物館	27
3-2. 国文学研究資料館	28
3-3. 国立国語研究所	28
3-4. 国際日本文化研究センター	29
3-5. 総合地球環境学研究所	29
3-6. 国立民族学博物館	30

4. 共同研究の実施 31

4-1. 国立歴史民俗博物館	31
4-2. 国文学研究資料館	33
4-3. 国立国語研究所	35
4-4. 国際日本文化研究センター	37
4-5. 総合地球環境学研究所	40
4-6. 国立民族学博物館	45

5. 共同研究の成果 50

5-1. 国立歴史民俗博物館	50
5-2. 国文学研究資料館	61
5-3. 国立国語研究所	67
5-4. 国際日本文化研究センター	74
5-5. 総合地球環境学研究所	79
5-6. 国立民族学博物館	87

6. 各機関の共同利用・共同研究窓口 98

6-1. 国立歴史民俗博物館	98
6-2. 国文学研究資料館	98
6-3. 国立国語研究所	99
6-4. 国際日本文化研究センター	99
6-5. 総合地球環境学研究所	100
6-6. 国立民族学博物館	100

あとがき	102
------	-----

1. 共同利用体制

人間文化研究機構（人文機構）の6機関は、それぞれの研究者コミュニティの要請に基づき、学術資料を調査収集し、整理のための作業や、分析のための共同研究を行っています。その成果は、データベース、コーパス、展示など、それぞれの資料の性格に応じて、多様な姿で、体系的に公開し、共同利用に供しています。

また、各機関をまたいで、多様なデータベースを統合して検索できる「統合検索システム」も構築してきました。「研究資源共有化システム」と総称しています。「統合検索システム（nihuINT）」とは、6機関の各データベースと機構が運用する地域研究拠点のデータベース nDP（nihu Data Provider）に加え、国立国会図書館、京都大学地域研究統合情報センター（現京都大学東南アジア地域研究研究所）と連携して、性格の異なる多くの人文系データベースを横断的に検索するシステムです。2008年4月から公開し、2012年5月、2017年3月にリニューアルしました。2017年3月現在で172のデータベースを一元的に検索することができます。

これらのデータベースに納められた人文学研究資源について、時代や地域を指標に検索することのできる「時空間解析ツール（GT-Map/Time）」も備えています。時間情報および空間情報に基づいて検索し、その結果をタイムラインやGoogle Maps上に表示することもできます。

詳しくは、人文機構ウェブサイトの「出版・データベース検索」の「高度連携システム」をご覧ください。なお、この人文機構ウェブサイトの「出版・データベース検索」のもとには、人文機構6機関に所属する研究者の「研究者データベース」があります。さらに、各機関のリポジトリを掲げています（「機構リポジトリ」と総称）。同リポジトリでは、各機関がその研究活動の成果をダウンロードできるよう整備しています。人文機構のもつ研究資源・研究者・研究成果を発信する、「統合検索システム（nihuINT）」、「研究者データベース」、「機構リポジトリ」は、お互いを検索やリンクで結ぶなど、効率よく利用できるよう工夫しています。

1-1. 国立歴史民俗博物館

国立歴史民俗博物館（歴博）は、日本の歴史や文化に関して、文献史学、考古学、民俗学のみならず、自然科学を含む関連諸学による学際的研究を推進するための大学共同利用機関です。千葉県佐倉市にあり、「れきはく」の愛称で親しまれています。博物館を有する強みに基づき、日本の歴史や文化に関する資料を収集、整理、保存しながら、調査、分析を進め、その成果を展示に反映させるという研究スタイルを構築し、「博物館型研究統合」と呼んでいます。

学術資料としては、図書、定期刊行物のほか、館蔵資料や映像資料などがある点が特徴です。

図書は33万6,000点余（2015年度末現在）あり、とりわけ国内の都道府県史や市町村史などの自治体史、発掘調査報告書、民俗調査報告書を網羅的に収集しています。また、展示図録類についても、日本の歴史や民俗に関するものを重点的に収集しています。定期刊行物は日本の歴史学、考古学、民俗学を中心に5,954タイトル（2015年度末現在）あり、英語、中国語、韓国語等の学術誌も備えています。こうした書籍については、歴博ウェブサイトの「歴博図書目録データベース」のなかで検索することができます。

日本の歴史・考古・民俗に係るモノ資料について、歴博では「館蔵資料」と呼んでいます。実物のほか、模型や複製も含まれ、23万6,800点余（2015年度末現在）を保管しています。代表的なものとして、国宝の宋版史記、重要文化財の洛中洛外図屏風などがあげられます。一部の資料については、写真原板やマイクロフィルム、高精細の写真画像で提供することができます。また、民俗研究のために歴博が制作した映像資料や収集したDVDなど、5,789点の映像資料も所蔵しています。これら資料の目録については、歴博ウェブサイトの「館蔵資料データベース」等で検索することができ、特別利用の申請をしていただくことにより、調査・研究・教育等にご活用いただくことが可能です。このほか、入館者へのサービスとして約

7,000 点の図書を開架しています。

データベースとしては、所蔵資料の情報を広く公開し研究利用に資することを目的とした「館蔵資料データベース」、共同研究等による調査研究の成果や諸研究分野の文献目録をまとめた「研究成果・論文目録データベース」、並びに記録類を中心とした「記録類全文データベース」が 50 件（2015 年度末現在）あり、このうち 6 件は利用に際し年度ごとの事前登録が必要で、4 件は事前登録のうえ来館での利用となります。

歴博が所蔵する資料に関するデータベースとしては、上述の館蔵資料データベース、歴博図書目録データベースの他、所蔵する錦絵資料に、名称、画工名、主題や分類等の詳細なデータを付して画像とともに収録した「館蔵錦絵データベース」や、所蔵する中世文書について日付、書出、書止など詳細項目と文書の全ての画像を収録した「館蔵中世古文書データベース」等の 13 件があります。詳しくは、歴博ウェブサイトの「データベースれきはく」をご覧ください。

設備としては、歴史資料分析のための「高分解能マルチコレクタ ICP 質量分析装置」があります。これは、高周波誘導統合プラズマイオン源、二重収束型質量分析計、マルチコレクタ検出器から構成されており、超微量元素の同位体比を世界最高水準の精度で分析できる性能を有しているものです。同種装置としては国内で唯一、歴史資料の自然科学分析に利用されています。例えば、青銅などの金属資料や鉛ガラス、鉛釉、石製品、有機物資料の原料の産地を推定したり、古代人の家族関係を推定したりすることができます。

1-1-A：資料収蔵点数

収集資料	236,884 点
含：	
国宝	5 点
重要文化財	85 点
重要美術品	27 点
映像資料	5,789 点
計	242,673 点

蔵書冊数	計 336,165 冊
和漢書	322,500 冊
洋書	13,665 冊

1-1-B：データベース（計 50 種）

データベース名	蓄積情報の概要	データ件数等 (2015 年 3 月現在)	公開方法
館蔵資料データベース	本館が所蔵する資料の基礎データを収録しています。	280,975 件	一般公開
館蔵中世古文書データベース	本館が所蔵する「田中本」、「越前島津家文書」などの中世文書全体を収録しています。	1,925 件	一般公開
館蔵近世・近代古文書データベース	本館が所蔵する「水木家資料」、「伊能家資料」などの近世・近代の古文書を収録しています。	8,002 件	一般公開
館蔵紀州徳川家伝来楽器データベース	本館資料図録 3「紀州徳川家伝来楽器コレクション」に基づく館蔵資料を収録しています。	214 件	一般公開
館蔵武器武具データベース	甲冑類・古式銃砲類、鉄砲の実物資料と砲術秘伝書類と西洋軍事技術に関する文献を各コレクションより収録しています。	4,024 件	一般公開
館蔵錦絵データベース	館蔵の錦絵に画像および詳細な書誌データを付して収録しています。	2,340 件	一般公開
館蔵『懷溜諸屑』データベース	全 28 冊になる貼交帳『懷溜諸屑』について、そこに添付された資料一点ずつの画像に詳細な書誌データを付したものを収録しています。	3,515 件	一般公開

館蔵染色用型紙データベース	本館に所蔵されている 4,000 枚を超す染色用の型紙一点ごとを基礎的データとし、画像を加えて収録しています。	100 件	一般公開
館蔵野村正治郎衣裳コレクションデータベース	本館が所蔵する野村正治郎の服飾・装身具・染織物品の資料 1 点ごとの基礎的データを、画像とともに収録しています。	111 件	一般公開
館蔵縄文時代遺物データベース	本館が所蔵する 32 のコレクションにおける縄文時代遺物について基礎的なデータに写真・実測図・拓本図を付して収録しています。	7,263 件	一般公開
館蔵装身具データベース	本館が所蔵する髪飾具（櫛・かんざし・簪）・袋物（たばこ入れ・紙入れ・筥迫・守袋）・印籠など装身具関係資料の基礎的データを収録しています。	360 件	一般公開
館蔵高松家伝来禁裏本データベース	旧有栖川宮家・高松宮家に伝来し、文化庁を経て本館に移管された蔵書群 1,671 点および同じ経路で移管された資料 8 点に関する書誌情報を収録しています。	1,981 件	一般公開
歴博図書目録データベース	本館の研究用図書室に所蔵された図書資料の目録データベースです。	319,730 件	一般公開
旧高旧領取調帳データベース	江戸時代の国・郡ごとに村名、旧領名、旧高、旧県名を収録した文献データを収録しています。	97,359 件	一般公開
日本荘園データベース	中世の荘園ごとの所在、荘園領主・資料出典などの主要な情報を収録しています。	8,975 件	一般公開
荘園関係文献目録データベース	荘園に関する主要な論文・文献類を「日本荘園データベース」と関連して収録しています。	4,611 件	一般公開
陶磁器出土遺跡データベース	日本国内の貿易陶磁器を出土した遺跡の文献目録と遺跡地名表を収録しています。	7,992 件	一般公開
兼顕卿記データベース	本館で所蔵している室町時代中期の貴族広橋兼顕の日記を収録しています。	686 件	一般公開
土偶データベース	縄文時代の土偶の製作時期や地域ごとの特徴、形態の変遷などを収録しています。	10,641 件	一般公開
近世窯業遺跡データベース	近世窯業に関する基礎データを収録しています。	1,317 件	一般公開
近世窯業関係主要文献目録データベース	近世窯業の基本文献を基に窯跡地名表・文献目録を収録しています。	1,904 件	一般公開
日本民俗学文献目録データベース	民俗学および関連する諸分野の論文、報告、資料などを収録しています。	60,118 件	一般公開
城館城下発掘データベース	西日本は 1990 年まで、東日本は 1991 年までに発掘調査された城館と城下遺跡の情報を収録しています。	3,348 件	一般公開
弥生石器遺跡データベース	縄文時代後期から古墳時代初頭までの石器の基礎データと関連情報を収録しています。	3,966 件	一般公開
自由民権運動研究文献目録データベース	1870 年代から 80 年代にかけて展開された自由民権運動の研究成果と文献目録です。	5,333 件	一般公開
棟札データベース	国宝・重文に指定されている社寺建造物の棟札における未収録の棟札および報告書に収録された棟札の基礎データです。	1,060 件	一般公開
古代・中世都市生活史（物価）データベース	日本の古代・中世における都市生活、消費の動向を検討するためおおむね 8 世紀から 16 世紀の価格関係の史料を収録しています。	37,253 件	一般公開
地域蘭学者門人帳データベース	近世蘭学者が記載されている門人帳から、人名・出身地・師匠等の記載をデータ化し収録しています。	9,262 件	一般公開
江戸商人・職人データベース	近世都市江戸の商人・職人の名鑑や株帳等から、居所、職業、所持株などの情報を収録しています（今後更新予定あり）。	2,617 件	一般公開
中世制札データベース	文治元年から、慶長 6 年までの制札の基礎的な情報、状態をできる限り掲載し収録しています。	203 件	一般公開

中世地方都市データベース	どこにどのような都市があったのかを検討するために、中世の地方都市の所在情報を集成したデータベースです。	1,713 件	一般公開
東国板碑データベース	関東・東北・北海道に分布する約7万件の板碑に関して、個々の板碑情報、所在地（遺跡）情報、文献情報を関連づけたデータを収録しています。	65,757 件	一般公開
俗信データベース	予兆・ト占・禁忌・呪術に関する言い伝え（俗信）を収録したデータベースです。動物と植物に関する俗信約3万件のうち、2009 年度は動物のみを収録しています。	48,005 件	一般公開
民俗語彙データベース	口頭で伝承されてきた方言的な語彙を収録したデータベースです。柳田國男の指導のもとに収集された総合日本民俗語彙に収録されている民俗語彙他を収録しています。	35,239 件	一般公開
縄文・弥生集落遺跡	基盤研究「縄文・弥生集落遺跡の集成的研究」において収集した報告書抄録データを収録したデータベースです。	25,544 件	一般公開
文化財材料知識	文化財ごとに色味や色材の推定構造などの文献調査を行い収録したデータベースです。	1,546 件	一般公開
東大寺文書目録データベース	奈良・東大寺に伝わる文書を奈良文化財研究所が調査・編纂し、昭和 54 年から 59 年にかけて発行した目録を収録しています。	12,099 件	利用者申請
左経記データベース	『左経記』は平安時代中期の貴族源経頼の日記で、摂関期の政治や儀式の詳細をまとめたものです。	1,989 件	利用者申請
天文日記データベース	戦国時代の本願寺十代の法主である証如の日記を収録しています。	4,171 件	利用者申請
兵範記データベース	平信範の日記、増補史料大成『兵範記』一～五をもとに京都大学電子図書館 貴重資料画像 重要文化財 兵範記等の関係資料の写真・画像を用いて校合・補訂し、データベース化しました。	2,631 件	利用者申請
山槐記データベース	本文と除目部類の2部構成で、藤原（中山）忠親の日記を収録しています。	2,193 件	利用者申請
渋沢栄一滞仏日記	日本史籍協会編・日本史籍協会叢書 126『渋沢栄一滞仏日記』（1928 年初版、1967 年復刻、東京大学出版会）を底本とした全文検索データベースです。	928 件	利用者申請
吾妻鏡データベース	鎌倉幕府で編修された鎌倉時代の編年体の歴史書を収録しています。	6,684 件	施設内限定
玉葉データベース	鎌倉時代初期の貴族九条（藤原）兼実の日記を収録しています。	7,463 件	施設内限定
大乘院寺社雑事記データベース	室町時代中期の奈良・興福寺大乘院門跡 27 代尋尊大僧正の日記を収録しています。	59,609 件	施設内限定
日本民謡データベース	全国の都道府県で行われた「民謡緊急調査」の成果の一つである『民謡緊急調査報告書』を基本としたデータベースです。	65,600 件	施設内限定
春記データベース	藤原資房（1107-57）の日記の全文データベース。この日記は、『野房記』、『次戸記』などとも呼ばれています。	1,128 件	一般公開
日本の遺跡出土大型植物遺体データベース	遺跡や堆積物中から見つかる過去の植物の種実や葉、枝などの肉眼で観察できる組織の遺存体の情報をデータベース化したものです。	62,951 件	一般公開
シーボルト父子関係資料データベース	ドイツ人の医師・博物学者フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトやその長男・次男が収集した日本の自然や生活文化に関わる資料を調査しデータベース化したものです。	10,721 件	一般公開
日系アメリカ移民データベース	日系アメリカ人に関わる写真・文書・モノ資料を対象とし、所蔵先の図書館・コレクションの性格を表すような資料を織り込んで作成したデータベースです。	410 件	一般公開

1-2. 国文学研究資料館

国文学研究資料館（国文研）は、日本各地にある古典籍や文献史料の収集等を通じて、国文学研究やアーカイブズ研究を推進するための大学共同利用機関です。1972年に日本で最初の人文系の大学共同利用機関として東京都品川区戸越に創設され、2008年に現在の東京都立川市に移転しました。2014年には人文系初の大規模学術フロンティア促進事業として「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」が採択され、グローバル化とオープンサイエンス化に取り組んでいます。

学術資料としては、図書、逐次刊行物（定期刊行物に加えて、やや不定期な刊行物を含む。）のほか、マイクロフィルム、紙焼写真、写本・版本、歴史アーカイブズ関係資料などがあります。

図書は18万3,000点余（2015年度末現在）あり、日本文学とその関連領域に関する専門的研究図書を収集しています。逐次刊行物は8,909タイトル（2015年度末現在）あり、図書同様、日本文学とその関連領域の学術誌を中心に日本語のもの、さらに、英語、中国語、韓国語等の学術誌も備えています。こうした書籍については、国文研ウェブサイトの「図書・雑誌所蔵目録」で検索することができます。

国文研では、全国各地の図書館、文庫、社寺等に散在する古典籍を撮影したマイクロフィルム約4万2,200点余および紙焼写真本約7万5,100点余（2015年度末現在）を共同利用に供しています。また、重要文化財である『春日懷紙』、『山鹿素行著述稿本類』や『伊勢物語』とその関連書コレクション（鉄心斎文庫）など、貴重書202点を含む古典籍原本資料を所蔵しています。国文研ウェブサイトの「館蔵和古書目録データベース」で検索できます。利用については、学術情報課が対応しています。

歴史アーカイブズ関係資料とは、1951年に開館された文部省史料館とそれを継承した国立史料館、国文学研究資料館によって収集、保管されてきた近世、近現代の古文書や記録類、モノ資料からなるアーカイブズです。『尾張国名古屋元材木町犬山屋神戸家文書』、『信濃国松代真田家文書』など、約52万点が含まれています。また、2015年度には、長年交流のあった鉄心斎文庫から、世界最大級の『伊勢物語』コレクション（総数1,088点、総評価額8億円余）の寄贈を受けました。これは、大学共同利用機関として長年に渡って貴重な学術資料の保存・収集を実施し、大学等研究機関の研究者が利活用できる基盤を整備することで我が国の国文学の発展に寄与してきた実績と長年の取組で培われた組織的な信頼によるものです。

データベースとしては、上述の目録類のほか、他機関が所蔵する古典籍についても検索することができる「日本古典籍総合目録データベース」など28件（2015年度末現在）にまとめて、「電子図書館」として公開しています。詳しくは、国文研ウェブサイトをご覧ください。

また、大規模フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」のもと、国内の拠点大学における画像作成のほか、当館所蔵のマイクロフィルムからの画像作成、当館所蔵古典籍の画像作成内製化実証試験によるブックスキャナでの撮影などにより、古典籍資料のデジタル画像化を進めています（2015年度末現在で約7万2,000点）。作成したデジタル画像は、「電子図書館」の「日本古典籍総合目録データベース」をご参照ください（2017年4月からは、日本語の歴史典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画のウェブサイトから、「新日本古典籍総合データベース」を試験公開しています。）

「電子図書館」ではこれらのほか「画像ギャラリー」として、歴史的人物の画像を各種資料から抽出するサービスも行っています。ぜひ、ご利用ください。

1-2-A：所蔵資料

資料種別			点数等	冊数等
収集マイクロ資料	マイクロフィルム	日本文学	192,096 点	42,254 リール
		歴史	202 件	6,308 リール
	マイクロフィッシュ	日本文学	16,667 点	57,358 枚
	紙焼写真本	日本文学	—	75,122 冊
		歴史	—	11,196 冊
図書	写本・版本		17,538 点	58,709 冊
	活字本・影印本等		—	183,862 冊
	逐次刊行物		8,909 誌	—
所蔵史料			487 件	約 520,000 点
寄託資料・寄託史料	日本文学		9 件	9,440 冊
	歴史		18 件	7,230 点

1-2-B：データベース

国文学論文目録データベース	国文学関係論文（1888（明治 21）年-2016（平成 28）年）の目録データベースです。	約 554,500 件
日本古典籍総合目録データベース	日本の古典籍の書誌・所在についての情報を、典拠情報（著作・著者についての情報）とともに提供する総合目録データベースです。『国書総目録』所載の所在・翻刻複製情報（写本、版本、活字・複製・謄写本）を併せて表示しています。書誌情報には、同館所蔵和古書とマイクロ／デジタル資料（国内外の古典籍を撮影収集した資料）も含んでいます。本館収集のマイクロ資料中の和刻本の序跋刊記情報と所蔵和刻本の画像なども提供しています（現在、序跋刊記情報のみ）。	著作約 474,900 件、 著者約 69,500 件、 書誌約 542,800 件
館蔵和古書目録データベース	館蔵和古書の目録データベースです。検索結果から、古典資料調査データおよび原本、館蔵貴重書・和古書のデジタル画像へリンクがあります（一部）。	約 21,200 件
古典選集本文データベース	『二十一代集』、『絵入源氏物語』、『吾妻鏡』、『歴史物語』、『奈良絵本』など、古典作品原本の全文検索が可能です。収録対象は当館蔵書底本で、泣き別れ検索にも対応しています。歴史物語は、栄花物語、大鏡、今鏡、水鏡、増鏡により構成しています。また、奈良絵本は、本館所蔵の 8 本を掲載しています。	二十一代集約 280,000 件、 絵入源氏約 18,300 件、 吾妻鏡約 273,000 件、 歴史物語約 50,000 件
所蔵機関との連携による日本古典籍デジタル画像データベース	高い資料的価値を認められながら、様々な事情で実見の難しい時期が続いていた広島大学附属図書館蔵の 200 点を超える「読本（よみほん）」コレクションをデジタル画像として公開して古典籍資料の共有化に貢献しています。	43 点分
日本古典資料調査データベース	本館が 30 年にわたり調査してきた国内外の大学・図書館・文庫等所蔵の写本・版本等の「文献資料調査カード」から主要な書誌情報を抽出したデータベースです（調査カード画像も参照可能）。	約 177,200 件
近代書誌・近代画像データベース	明治期以降の国文学を中心とした文献資料の調査・収集の成果を公開しています。	書誌約 39,400 件、 画像約 4,700 件
収蔵歴史アーカイブ・データベース	史料館旧蔵の資料群を中心とした本館収蔵歴史資料（アーカイブズ）の概要データベースおよび資料目録データベースです。	約 275,800 件
コーニツキー・欧州所在日本古書総合目録データベース	欧州各国の図書館・美術館・博物館等所蔵の「日本の和装本」の書誌・所在情報データベースです。一部原本画像も公開しています。	約 14,300 件

明治期出版広告データベース	近代日本の出版事情を探ることを目的として、明治前期の新聞・雑誌等に掲載された出版物の広告を集成したものです。書名・書肆検索や広告本文の全文検索機能も備えています。	約 77,800 件
歴史人物画像データベース	国書古典籍中の絵入り叢伝から古典キャラクターの人物画像を集めたデータベースです。おもに明治以前のものから挿絵の古典キャラクター画像のみを切り出し、各人物がどのように描かれてきたかを比較対照できます。	古典キャラクター画像 約 3,100 名・4,700 件
連歌・演能・雅楽データベース	寄託データベースである連歌データベースと演能データベースを連結し、新規作成の雅楽データベースを添えてセットにしたデータベースです。	約 50,000 件
新奈良絵本データベース	本館所蔵の奈良絵本（19 本）の原本画像データベース（翻刻付）です。	19 本
古事類苑データベース	『古事類苑』大正版洋装本のデータベースです。テキスト版では、『天部』など 4 部（7 部に拡大予定）のテキストが閲覧可能です。全文・抜粋検索版では、『天部』など 4 部の全文テキスト、『神祇部』など 23 部の抜粋テキストに対して、キーワード検索が可能です。	約 6,400 頁
古典学統合データベース（地下家伝・芳賀人名辞典）	日本の古典研究に関わる人物情報のデータベースです。現在、芳賀矢一（1867-1927）編『日本人名辞典』（1914）と三上景文著；正宗敦夫（1881-1958）編纂校訂『地下家伝』（日本古典全集刊行会、1937.9-1938.8）6 冊のデータを収録しています。	約 51,000 件
古筆切所収情報データベース	『古筆切提要』以後に影印刊行された古筆切類の所収情報データベースです。約 23,000 件収録しています。	約 23,000 件
日本文学国際共同研究データベース	海外の研究論文目録や論文画像のデータベースや翻訳作品データベース等のデータ・アーカイブ化です。文部科学省科学研究費（基盤研究（S））「国際コラボレーションによる日本文学研究資料情報の組織化と発信」の取り組みとして構築しました。	約 7,000 件
蔵書印データベース	本館所蔵の古典籍を中心に原本から採取した蔵書印情報を、印影とともに一覧するデータベースシステムです。他館の画像データベースを参照した蔵書印情報や『近代蔵書印譜（初編～五編）』をはじめ数点の蔵書印譜からも印影等を収載しています。採録対象は、いわゆる蔵書印に加え、仕入れ印や貸本屋印を含む書肆印、蔵書票・書肆票の類、また、写本等で作成に関わった人物の印記や書画などの落款に及びます。	蔵書印レコード数約 33,200 件、印影数約 26,800 点
アーカイブズ学文献データベース	アーカイブズ学に関する国内研究文献のデータベースです。個々の文献で章立てがあるものは「内容」に全て採録しています。	約 18,800 件
史料情報共有化データベース	国内外で公開されている資料群（アーカイブズ）情報のデータベースです。歴史資料を公開する各収蔵機関が共同構築しました。	約 13,000 件
日本実業史博物館コレクションデータベース	日本実業史博物館準備室旧蔵資料のうち、絵画・器物・広告・文書・書籍の資料情報 6,936 件と 13,643 件の画像を公開しています。	資料情報約 6,900 件、 画像約 13,600 件
館蔵社寺明細帳データベース	本館所蔵の戦前期における全国の神社明細帳に関する神社名・所在地・社格に関するデータベースです。内務省管轄の公簿として作成された原本は当館において閲覧提供しています。	約 43,100 件
伊豆韮山江川家文書データベース	財団法人江川文庫が所蔵する古文書・文芸関係の目録情報を同文庫との協業により公開しています。	約 60,000 件
史料所在情報データベース	国内各地に伝来する資料群の所在概要情報データベースです（詳細版は利用登録制）。	簡易版約 50,000 件、 詳細版約 48,000 件
増田太次郎広告コレクションデータベース	増田太次郎氏（1905-1990、戦後雑誌『宣伝』を主宰、宣伝広告のコンサルタントとして活躍、1965 年から広告史研究に没頭、1975 年から㈱オリコミサービス顧問）が収集した広告類約 2 万点を 2009 年に㈱オリコミサービスから寄託を受けました。その主要部分を占める約 8,700 点の第一次公開分書誌・画像データベースです。二次利用については所蔵者である㈱オリコミサービスの許可が必要です。	約 8,700 点

在外日本古典籍所蔵機関ディレクトリ	日本の古典籍を所蔵する北米など日本国外の各機関について、住所、連絡先、所蔵規模、コレクション概略、閲覧や複写の可否、目録の有無などの情報を英語で提供しているほか、一部機関については日本語でも情報提供しています。東アジア図書館協議会（CEAL）日本資料委員会の元に組織された日本古典籍小委員会が情報を取りまとめ、本館がデータベースとして公開しています。	91 件
大系本文（断本）データベース	東京堂出版刊行の「断本大系」の作品について、全文検索とテキスト閲覧ができます。	329 作品
大系本文（日本古典文学）データベース	岩波書店刊行の旧版「日本古典文学大系」の作品について、全文検索ができます（大学・短大以上の高等教育機関などに対して公開）。	556 作品

1-2-C：文献・図書資料

図書・雑誌所蔵目録データベース（OPAC）

1-3. 国立国語研究所

国立国語研究所（国語研）は、日本語について、多様な言語資料を収集し、整備するとともに、言語学的研究を推進するための大学共同利用機関です。1948年に設立され、2005年に東京都立川市へ移転し、2009年から大学共同利用機関となりました。

学術資料としては、図書、定期刊行物があるほか、コーパスやデータベースをはじめとする言語資源を整備している点が特徴的です。

研究図書室の所蔵する図書は15万1,102点（2015年度末現在）あり、全国で唯一の日本語に関する専門図書館として、日本語学、言語学、日本語教育、および関連分野の文献資料を収集しています。なかでも、『古今文字讀』は、国内で保有しているのは4機関しかなく、抄録本ながら上中下三巻がそろっているという点で、貴重な資料です。一般利用者への来館貸出はできませんが、閲覧・複写が可能です。また、定期刊行物は5,844タイトルあり、図書同様、日本語学とその関連領域の学術誌を中心に日本語のもの5,316タイトル、外国語によるもの528タイトルを備えています。研究図書室の蔵書については、国語研ウェブサイトの「研究図書室」に掲げた所蔵目録で検索することができるほか、図書館間相互貸借システムを通じて貸出できます。

国語研では、日本語の言語資料・音声資料を収集し、コーパスやデータベースとして整備し、「研究目的別」、「データ種別」に分けて公開しています。「研究目的別」では、「現代日本語」、「日本語教育・日本語学習」、「方言と言語の多様性」、「日本語史」などに分かれます。「データ種別」としては「コーパス」、「オンライン辞書」、「言語地図」などがあります。このうち「コーパス」としてはさらに、「日本語話し言葉コーパス」や「日本語歴史コーパス」、「アイヌ語コーパス」など10件をオンラインで提供しています。国語研ウェブサイトの「コーパス・データベース」をご覧ください。

1-3-A：蔵書冊数

図書 151,102 冊

雑誌 5,844 種

1-3-B：コーパス

現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）	現代日本語の書き言葉の多様性を把握するために構築したコーパスで、書籍、雑誌、新聞、白書、ウェブサイト、法律などから無作為に抽出した約1億430万語のテキストに形態論情報、文書構造タグを付与し、オンラインおよびDVDで公開しています。	約1億430万語
日本語話し言葉コーパス（CSJ）	日本語の自発音声を大量に集めて多くの研究用情報を付加した話し言葉研究用のデータベースで、国語研、情報通信研究機構（旧通信総合研究所）、東京工業大学が共同開発した、質・量ともに世界最高水準の話し言葉データベースです。本コーパスは、音声言語情報処理、自然言語処理、日本語学、言語学、音声学、心理学、社会学、日本語教育、辞書編纂など幅広い領域で利用されています。	661時間 （約700万語）
日本語歴史コーパス（CHJ）	日本語の歴史を研究するための資料を集めたコーパスです。将来的に上代から近代までをカバーする通時コーパスとすることを目標に開発が進められており、現在は構築済みの部分を公開中です。	平安時代編、鎌倉時代編、室町時代編、明治・大正編 （約328万語）
中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス（C-JAS）	日本で日本語を第二言語として学んでいる学習者の発話を収録し、形態素タグと誤用タグを付与したシステム検索可能なコーパスです。	46.5時間
アイヌ語口承文芸コーパス — 音声・グロスつき —	木村きみさん（1900-1988、沙流川上流域のペナコリ出身）がアイヌ語で語った物語10編（ウエベケレ（散文説話）8編、カムイユカラ（神謡）2編）約3時間分の音声に、日本語と英語による訳とグロスや注解を付けた初めてのアイヌ口承文芸デジタル集成です。	約3時間（ウエベケレ（散文説話）8編、カムイユカラ（神謡）2編）
日本語学習者による、日本語・母語対照データベース	「作文対訳データベース」および「発話対照データベース」の2つからなるデータベースです。いずれも日本語学習者が同一の課題に基づき、日本語および自分の母語によって行った言語表現を対照可能な形でデータベース化したものです。	作文対訳データベース：1,754件 発話対照データベース：247名分

コーパス検索	BCCWJ 全文検索サイト「少納言」	国語研で開発したウェブアプリケーションで、初心者でも簡単に BCCWJ 内の文字列を検索することができます。【登録不要】
	コーパス検索アプリケーション「中納言」	国語研で開発したコーパスを検索することができるウェブアプリケーションで、短単位・長単位・文字列の3つの方法によってコーパスに付与された形態論情報を組み合わせた高度な検索を行うことができます。【要登録】
	NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ）を検索するために、国語研と Lago 言語研究所が共同開発したオンライン検索システムです。【登録不要】

1-3-C：オンライン辞書

基本動詞ハンドブック	日本語学習者・日本語教師が基本動詞の理解を深めることができるように、基本動詞の多義的な意味の広がりを図解なども用いて分かりやすく解説したオンラインツールです。例文、コロケーションなどの執筆には、大規模日本語コーパスを積極的に活用し、他のレファレンスには見られない生きた情報を提供しています。	65 見出し
複合動詞レキシコン (国際版)	「押し上げる」、「晴れ渡る」など、日常よく使われる日本語複合動詞 (2,700 語以上) に意味や用法の情報を付与した言語研究および日本語学習用のオンライン辞書で、英語・中国語・韓国語翻訳付きです。研究教育目的での元データのダウンロードも可能です。	2,700 見出し
トピック別 アイヌ語 会話辞典	1898 年に刊行された『アイヌ語會話字典』を底本とし、口語訳や音声・ビデオ・写真などのデータを付与したオンライン辞典です。	4,000 見出し
寺村誤用例集データベース	日本語教育研究の礎を築いた故寺村秀夫氏による、諸外国からの留学生が書いた作文に見られる日本語の誤用を収集・分類したデータベースです。	6,300 件
Web データに基づく 用例データベース	複合動詞、形容詞、サ変動詞の用例のデータベースです。用例は、語ごとに構築した専用のウェブコーパスから収録し、構築に際しては、(1)語ごとに一定量以上の用例を収集できること、(2)収集用例の偏りの軽減、に配慮しています。	複合動詞 3,700 見出し サ変動詞 5,600 見出し 形容詞 2,300 見出し

1-3-D：言語地図

使役交替言語地図	世界の言語の、形態的関連のある有対動詞を収集した地理類型論的なデータベースです。日本語を含む諸言語の有対自他動詞の類型論的な情報を、世界地図およびチャート (表) 上で可視化し、有対自他動詞を類型論的な視点から分析できるウェブアプリケーションです。	30 動詞 × 82 言語
「日本言語地図」・ 「方言文法全国地図」	「日本言語地図」所載の地図の画像 (全 300 図)、「方言文法全国地図」所載の地図の画像 (全 350 図) のデータをウェブ上で公開しています。全国の方言の地理的分布を一望することが可能な、方言研究における基礎資料です。	・日本言語地図：300 図 (全 6 集、各 50 図) ・方言文法全国地図：350 図 (全 6 集、第 1 集：60 図、第 2 集：45 図、第 3 集：45 図、第 4 集：55 図、第 5 集：65 図、第 6 集：80 図)

1-3-E：画像・PDF

日本語史研究資料 (国立国語研究所蔵)	国語研究図書室の蔵書のうち、日本語史資料として著名なものや、歴史コーパスの原材料として利用できるものを選定し、デジタル画像や翻字本文を順次公開しています。	42 作品
米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文・画像	米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』(全 54 冊、LC Control No. : 2008427768) の翻字本文 (電子テキスト) および「桐壺」・「須磨」・「柏木」の原本画像を公開しています。文字列検索や原本画像と翻字本文の対照表示も可能です。	本文 54 巻 画像 3 巻
雑誌『国語学』全文データベース	日本語学会の (旧) 機関誌『国語学』全巻の全文テキストデータベースです。誌面の PDF ファイルも公開しています。	全 219 号

1-3-F: ツール

形態素解析ツール Web 茶まめ	各種の UniDic を使って形態素解析を行うためのツールです。形態素解析に必要な一連の作業をウェブサイト上でわかりやすいインターフェースによって行うことができます。
(方言研究の部屋) データとプログラム	『方言文法全国地図』全データ (1～6 集)、最新版 PDF 『方言文法全国地図』(1～6 集)、方言文法全国地図作成の機械化 (イラストレータ用プラグイン・白地図・記号)、準備調査 (調査票と地図・データ)、言語地図データベースの公開ページです。
全文検索システム 「ひまわり」	コーパス、用例集、辞書といった言語資料を全文検索するために開発されたソフトウェアです。XML で記述された言語資料を全文検索し、検索文字列に対する前後文脈や付与情報 (書誌情報など) を表示することができます。
形態素解析辞書 UniDic	日本語テキストに形態論情報を付与するための電子化辞書です。現代語用のほか、中古和文、近代文語用なども公開しています。

1-3-G: カタログ

日本語研究・日本語教育 文献データベース	学術雑誌や論文集などに掲載された日本語関係の論文等のデータベースです。データは定期的に追加され、ウェブ上で 19 万件以上のデータから文献を検索することが可能です。	約 19 万件
国立国語研究所学術情報 リポジトリ	「国立国語研究所学術情報リポジトリ」では、国語研における学術研究・教育活動の成果および国語研が所蔵する学術資料を電子的形態で収集・保存し、ウェブサイト上で公開しています。	256 件

1-3-H: その他データ

『分類語彙表 増補改訂版』 研究用データ	分類語彙表とは、「語を意味によって分類・整理したシソーラス (類義語集)」です。データベース版は、書籍版の『分類語彙表 — 増補改訂版 —』の元となったデータを加工したもので、データベースソフトに取り込めるよう CSV 形式になっています。レコード総数は、101,070 件です。
現代雑誌 200 万字言語 調査語彙表	2001 年から 2004 年にかけて行われた「現代雑誌の語彙調査 — 1994 年発行 70 誌 —」の調査結果の語彙表 (59,000 語) です。
「学校の中の敬語」ア ンケート調査データ	国語研が 1989 年から 1990 年にかけて中学生 (東京 2,456 名、山形 339 名)・高校生 (東京 2,222 名、大阪 1,004 名) を対象に実施した敬語使用と敬語意識に関するアンケート調査で得られたデータ (合計 6,021 名分) です。
岡崎敬語調査データベ ース	国語研が中心となって、愛知県岡崎市で行った敬語調査のデータベース (合計 1,400 名の回答データ) です。岡崎敬語調査 (OSH) は、1953 (昭和 28) 年、1972 (昭和 47) 年、2008 (平成 20) 年に行われ、戦後の 55 年という長いタイムスパンの実時間の変化が分かります。
沖縄語辞典データ集	国立国語研究所資料集 5『沖縄語辞典』の本文篇、索引篇、地名一覧表のデータ (14,500 見出し) です。
『日本語教育のための 基本語彙調査』データ	「国立国語研究所報告 78『日本語教育のための基本語彙調査』(1984) の「基本語彙 五十音順表」(6,100 語)、「意味分類体語彙表」(6,900 語)、「分類項目一覧表」を電子化したものです。
『幼児・児童の連想語 彙表』データ	国立国語研究所報告 69『幼児・児童の連想語彙表』(1981) の「全連想語彙調査表」(22,000 語) および「頭音連想語彙調査表」(12,500 語) を電子化したものです。

1-4. 国際日本文化研究センター

国際日本文化研究センター (日文研) は、日本の文化や歴史について研究する海外の研究者を支援しながら、国際的な共同研究を推進するための大学共同利用機関です。京都市西京区の桂にあり、「日文研」の愛称で親しまれています。

図書は52万9,500点余（2015年度末現在）あり、日本研究に必要な基本図書や文献目録の網羅的な収集に努めております。図書のうち、外国語で書かれた日本研究図書および訳書を「外書」と呼んでおり、2015年度末現在で63,579点にのぼります。海外からの日本へのまなざしを分析するための基礎文献が集積されています。

定期刊行物は8,515タイトル（2015年度末現在）あり、図書同様、日本研究とその関連領域の学術誌を中心に日本語のもの7,059タイトル、*Japan Forum*、*The Journal of Japanese Studies*、*Japanese Studies*など外国語によるもの1,456タイトルを備えています。

こうした書籍について、日文研ウェブサイトの「図書館」から検索することができます。事前にご申請いただくことにより、閲覧ができます。また、図書館を通じた貸出（図書館間相互貸借）ができます。閲覧や貸出は、所属機関の図書館を通してお申し込みください。

日文研では、書庫等を整備し、映像音響資料などの収集にも力を入れています。日本映画や伝統芸能、歌舞伎、アニメなどの映像資料5,181点（2015年度末現在）、伝統芸能や浪曲レコードなど音響資料7,414点（2015年度末現在）、古写真、ガラス写真など写真資料17万4,146点（2015年度末現在）があります。

データベースとして、上述の古写真など、日文研が所蔵する資料についてはオンラインで59件、計212万点余を公開しています（所内利用限定を含む）。そのうち一般公開しているものは48件、利用申請が必要なものは4件、所内限定公開は7件となっています。

1-4-A：国際日本文化研究センター所蔵 稀本・資料データベース

井上哲次郎宛書簡	1882（明治15）年から1883（昭和16）年の間に大学・学会関係者や知識人から井上哲次郎に送られた書簡類のデータベースです。
WebGIS 日本全図	ウェブサイトから閲覧できる都道府県地図です。
絵巻物	日文研が所蔵している絵巻物の高精度画像データベースです。
艶本資料	日文研が蒐集してきた近世の艶本の基本的な書誌データと、全ページの高精度画像データベースです。
外像	日文研が収集した、世界各国で出版された日本文化資料から抽出した写真や挿し絵などの画像・書誌情報データベースです。
貴重書	日文研が所蔵する貴重書（主として開国期以前に出版された外国語図書）を画像化し、テキスト情報として書誌情報、目次、図版キャプションを付記したデータベースです。
近世畸人伝（正・続）	『近世畸人伝（正・続）』の全文と図版を収録したデータベースです。記事の収録に際しては、原本で使用されている旧字を新字に置き換え、JISコードに登録されていない文字については同音・同義のJISコード文字を採用しています。
古写真	日文研が所蔵する江戸末期から明治初期の手彩色写真の画像・書誌情報です。
在外日本美術	ロシアのプーシキン、エルミタージュ、ハンガリーのフェレンツ・ホップ美術館が所蔵する日本美術品（絵画、版画、根付、陶磁器、漆器、彫刻、金工など）の画像・書誌情報データベースです。
所蔵地図	近世の都市地図を中心に、地図資料の所在情報を収録したデータベースです。日文研所蔵地図については、画像データもあわせて公開しています。
図録 米欧回覧実記	1878（明治11）年刊行の久米邦武編『特命全権大使米欧回覧実記』に掲載された図版と、図版に関連する本文記事を収録したデータベースです。
西洋医学史古典文献（野間文庫）	財団法人野間科学医学研究資料館（2003（平成15）年に閉館）から寄贈された蔵書のデータベースです。
宗田文庫図版資料	宗田文庫は、医学史学者の故宗田一氏が収集された、医学史・薬学史に関する書籍、図版資料などを中心とする日本医療文化史のコレクションです。このデータベースでは、主として同文庫の図版資料を収録しています。
ちりめん本	日文研所蔵のちりめん本（各国語で書かれた昔話）の高精度画像データベースです。

鯰絵コレクション	日文研が所蔵する鯰絵（地底に住む大鯰が地震を起こすという伝説をテーマに描かれた錦絵）コレクションのデータベースです。
日中歴史研究センター旧蔵書目録	日中歴史研究センター旧蔵書を「欧文図書」、「中文図書」、「日文図書」、「地図資料」に分類した目録情報データベースです。
日本関係欧文図書目録	日文研が所蔵する1900年以前に出版された欧文図書のうち、日本に関する記述のある図書（外書）の冊子目録（3冊本＋索引）を電子情報化した画像・書誌情報データベースです。
風俗図会	日文研が所蔵する絵双紙（絵草子・絵草紙）の高精度画像データベースです。
平安京都名所図会	日文研が所蔵する江戸から明治期にかけての平安・京都を描いた「名所図会」の高精細画像データベースです。近代以前の平安・京都の風俗を、主に絵図を通して研究するために制作しました。
平安人物志	日文研が所蔵する『平安人物志』（1768-1867）の画像・全文・索引情報データベースです。
平安人物志短冊帖	日文研が所蔵する『平安人物志』（1768-1867）に掲載された諸家の短冊の画像・全文・書誌情報データベースです。
平治物語絵巻「六波羅合戦の巻」デジタル復元図	東京国立博物館が所蔵する平治物語絵巻「六波羅合戦の巻」の白描模本をベースに、現存する武者絵の彩色と模本に書きこまれた色指定に基づきデジタル処理によって原画を復元し、制作したデータベースです。
都年中行事画帖	平安京都の祭りなどの風俗を描いた『都年中行事画帖』（詞書：江馬務、画：中島莊陽、日文研所蔵）の絵と詞書を収録したデータベースです。

1-4-B：研究支援データベース

於竹大日如来縁起絵巻	於竹大日如来縁起絵巻は、羽黒山修験道根本道場としての羽黒山荒沢寺正善院に伝わる三巻からなる絵巻で、同院境内に祀られているお竹大日堂の由来を説いています。正善院の全面的な協力のもと、上記の絵巻と同院所蔵の於竹関係資料に基づいて制作したデータベースです。
怪異・妖怪絵姿	日文研所蔵の妖怪絵巻を高精細画像でデジタル化したデータベースです。
怪異・妖怪画像	絵画資料に描かれた怪異・妖怪に関する画像を集めたデータベースです。
怪異・妖怪伝承	民俗学の調査などをとおして報告された怪異・妖怪の事例についての書誌情報データベースです。
海外邦字新聞	このデータベースは、多様な海外邦字新聞をデジタル化し、さらにフリーワード・データベース化する計画のもと、現在は、海外最大の日系コミュニティを有するブラジルの戦前期の邦字新聞を公開しています。
家族史・人口史文献	日本に関する家族史分野および、日本における人口史および歴史人口学分野の研究文献を収録したデータベースです。
季語検索	35,000以上の季語を収録したデータベースです。和歌、連歌、俳諧データベースの検索補助機能として構築していますが、季語検索単独でも利用可能です。
考古学 GIS	考古学 GIS は、地理情報システム GIS（Geographical Information System）を活用して空間情報の研究を進める考古学の新しい分野です。このデータベースでは、平安京・京都遺跡、地震痕跡遺跡、佐賀弥生遺跡の考古学 GIS データを収録しています。
古事類苑全文	国文学研究資料館等と共同して、総ページ数 67,000 ページ以上、見出し数 40,000 項目以上におよぶ大百科事典『古事類苑』の全文をテキストデータ化し、順次公開を進めているデータベースです。
古事類苑ページ検索システム	『古事類苑』を国内外の日本研究者により広くかつ容易に利用してもらうことを目的として、大正版の洋装本（51 巻）を基にして簡便な検索機能を付与したものです。
摂関期古記録	平安時代中期、摂関期の古記録の訓読文をデータベース化して公開し、ウェブサイト上で検索できるようにしたものです。
中世禅籍テキスト	中世禅宗関係文献を全文テキスト化して公開することを目的とするデータベースです。現在は日文研所蔵の義堂周信（1325-1388）の日記『空華老師日用工夫略集』の全文テキストを公開していますが、今後は未翻刻の語録・詩文集を中心に、順次増補していく予定です。

長崎古地図	長崎市立博物館所蔵の長崎古地図のうち、日文研が撮影したカラー画像 221 点についてデジタル化し、長崎市立博物館編『長崎市立博物館資料目録：図書・地図・写真資料編』掲載の関連目録データをあわせてデータベース化しました。
錦絵観音霊験記の世界	およそ 160 年前、「観音霊験記」という、日本各地に散在する百観音霊場を題材にした浮世絵（錦絵）が制作され、流行しました。これを鮮明な画像で紹介するのみならず、霊験記の本文を翻刻し、あわせて各札所や衣装などの解説を付加したデータベースです。
日本語語彙研究文献	19 世紀半ば以降日本で形成された新しい語彙、概念や意味について研究した文献を調査し作成したデータベースです。
俳諧	芭蕉、蕪村をはじめ、主要な俳諧作品を収録したデータベースです。データはすべて勢田勝郭氏（奈良工業高等専門学校教授）が自ら多年にわたって入力・蓄積したもので、日本研究に役立てて欲しいと日文研に一括寄託されました。
民事判決原本	1868（明治元）年から 1890（明治 23）年までの民事判決原本全文の画像データベースです。
ラージマップ-高精細空中写真 WebGIS-	ラージマップは、高精細空中写真（解像度約 25cm）をベースマップとして用いた Web GIS です。このデータベースでは現在、高精細空中写真は京都・奈良・滋賀県の一部、コンテンツは報告書抄録データベース、平安京条坊図を運用しています。
連歌	永禄以前（連歌師宗養の没年まで）の連歌作品のすべてと、永禄以後幕末までの主要な連歌作品を収録したデータベースです。データはすべて勢田勝郭氏（奈良工業高等専門学校教授）が自ら多年にわたって入力・蓄積したもので、日本研究に役立てて欲しいと日文研に一括寄託されました。
連歌連想語彙	日文研の連歌データベースに収録されている連歌から、前句と付句にあらわれる語彙のパターンを連想語彙として抽出し、それらの順引きと逆引きを可能にしたデータベースです。山田奨治・岩井茂樹編『連歌の発想——連想語彙用例辞典と、そのネットワーク解析』（日文研叢書 38）に収録した「連想語彙用例辞典」を電子化しリンク付けして作成しました。
和歌	勅撰集 21 種すべて、万葉集をはじめ「夫木和歌集」などの私撰集と主要な私家集の和歌を収録しています。データはすべて勢田勝郭氏（奈良工業高等専門学校教授）が自ら多年にわたって入力・蓄積したもので、日本研究に役立てて欲しいと日文研に一括寄託されました。

1-4-C：機関連携データベース

浮世絵芸術	国際浮世絵学会（旧日本浮世絵学会）が発行してきた『浮世絵芸術』の既刊誌を、「世界の日本研究者への研究協力」を目的とする日文研の事業の一環として、同学会と日文研が連携協力してデータベース化しました。
米国議会図書館所蔵浮世絵	米国議会図書館が所蔵する浮世絵の画像および解説文のデータベースです。
米国議会図書館所蔵承応版源氏物語	米国議会図書館が所蔵する完本『承応版源氏物語』（本文 54 冊、注釈書 6 冊）の全ページ画像のデータベースです。
米国議会図書館所蔵奈良絵本	米国議会図書館が所蔵する奈良絵本の画像および解説文のデータベースです。

1-4-D：海外における日本研究機関データベース

日本研究機関	日本研究を行っている世界各地の研究機関情報のデータベースです。
--------	---------------------------------

1-4-E：日文研において研究者が利用できるデータベース

CD-ROM サーバシステム	雑誌記事検索や朝日新聞見出しなどの検索ができます。
高精細地図情報	古地図、国土地理院地図等の高精細情報をネットワーク経由でセンター内の研究者に提供しています。

在外日本美術	イギリスの大英博物館、ヴィクトリア・アルバート博物館、アメリカのメトロポリタン美術館など、47 の美術館等が所蔵する日本美術品（絵画、版画、根付、陶磁器、漆器、彫刻、金工等）の画像・書誌情報です。
歴史法令	江戸幕末発布の法令である「御触書」の全文情報および文字情報を提供するデータベースです。
テレビコマーシャル	ACC（株全日本シーエム放送連盟）賞受賞作品を対象に、1961-1997 年にかけて制作されたコマーシャルフィルムのデータベースです。
所蔵古写真カタログ	日文研が所蔵する江戸末期から明治初期の手彩色写真の画像・書誌情報です。
百鬼夜行図集成	日文研の事業の一つ「怪異・妖怪文化資料データベース・プロジェクト」の一環として研究用に収集した、日文研内外（在外を含む）のさまざまな百鬼夜行絵巻のデータベースです。

1-4-F：文献・図書資料

図書雑誌所蔵目録データベース（WebOPAC）

1-4-G：日文研活動データベース

専任教員執筆一覧	日文研の教員が執筆した図書・論文等の書誌情報のデータベースです。
研究集会	日文研で開催しているセミナー、フォーラム、講演会等の開催情報のデータベースです。

1-5. 総合地球環境学研究所

総合地球環境学研究所（地球研）は、自然科学・人文学・社会科学の文理融合による学際研究に加え、社会との連携により、地球環境問題の根本的な解決をめざした研究を推進する大学共同利用機関です。2001 年に設立され、2006 年に現在の京都市北区上賀茂に移転し、「地球研」の愛称で親しまれています。

学術資料としては、図書、定期刊行物、映像資料、アーカイブズ資料があります。

図書は 2 万 8,000 点近く（2015 年度末現在）あり、地球環境研究に関する重要な文献資料を所蔵しています。利用者の方が所属する図書館を通じた貸出（図書館間相互貸借システム）のほか、図書館等を通じた事前照会により閲覧していただくことができます。定期刊行物は 519 タイトル（2015 年度末現在）あり、図書と同様、地球環境研究に関する重要な学術誌を中心に日本語のもの 259 タイトル、外国語のもの 260 タイトルを備えています。映像資料はビデオ・CD など 435 点（2015 年度末現在）があります。こうした図書室の資料には、国内では地球研のみが所蔵している約 1 千点のものも含まれており、地球研ウェブサイトの「図書室」で検索できます。

また、研究成果を統合し、地球環境学の理解と普及をはかるため、『地球研アーカイブズ』として学術資料を蓄積しています。地球研で行われた共同研究・共同利用に関わる各種出版物、研究会などの資料や映像といった冊子体やテープなどの資料（約 6,800 件）があり、そのうち研究データや報告書などの電子版（約 3,200 件）が登録されています。これらのアーカイブズ資料は、必要な手続きを経て利用できますので、詳細は地球研ウェブサイトの「アーカイブズ・データベース」をご覧ください。

さらに、地球研は、学術資料に加え、地球環境研究に必要な先端的な実験施設を共同利用に供しています。組織的な研究支援体制として研究基盤国際センターに計測・分析部門を設け、実験施設の維持管理および共同利用の促進をはかるほか、地球環境研究における安定同位体研究の活用に向けて、新たな分析装置の導入・分析手法の開発等を推進しています。現在、所外の方も利用できる 15 台の分析装置があり、代表的なものには、高純度に精製した金属元素の安定同位体比を高精度に測定する「表面電離型質量分析装置」、生元素

の安定同位体比を高精度に測定する「安定同位体比質量分析装置」、高精度に精製した金属元素をプラズマでイオン化し、短時間で高精度に安定同位体比を測定する「高分解能マルチコレクタ ICP 質量分析装置」があり、いずれも世界最高性能を有する設備です。これらの分析装置は、ストロンチウム、ネオジウム、鉛の安定同位体を用いた汚染物質の移動および起源の追跡、考古学試料および農産物の産地同定、鉄、亜鉛の安定同位体比を用いた海洋の物質循環の解明などに利用されています。

実験施設の利用については、地球研ウェブサイトの「実験施設」をご確認ください。

1-5-A：図書・学術誌

図書 …………… 約 2 万 8,000 点（2015 年度末現在）

学術誌 …………… 519 タイトル（日本語学術誌：259 タイトル、外国語学術誌：260 タイトル）

※所内閲覧のみ（事前にご連絡ください。）

1-5-B：施設・設備

〈実験施設〉

- クリーンルーム
- 試料保管室
- 恒温室
- 生物実験室
- 同位体分析室
- 多目的実験室
- 顕微鏡室
- 化学分析室 など 18 実験室

〈設備〉

- 表面電離型質量分析装置
- 軽元素安定同位体比質量分析装置
- マルチコレクター ICP-MS
- γ 線スペクトロメーター
- 誘導結合プラズマ質量分析装置
- イオンクロマトグラフィー
- 水同位体分析装置
- ICP 発光分光分析装置

※地球研外の大学・研究機関が実験施設を利用するには、「地球研の研究者との共同研究事業」又は「同位体環境学共同研究事業（申請資格：大学の常勤教員、研究機関の研究者）」に参加していただく必要があります。詳しくは、地球研ウェブサイトの「実験施設」をご覧ください。

1-5-C: データベース

• 研究所関連データベース

地球研アーカイブズ・データベース	研究プロジェクトの出版物などの研究成果、研究会・シンポジウム・市民向けセミナーに関する資料、および、研究所の設立に関する資料や広報資料などが登録されているアーカイブズ・データベースです（約 6,800 件）。一部の資料は、PDF など本文を直接参照することができます。また、観測データ、地図情報など、所内外の研究活動に利用できる研究資源も含まれています。
年報データベース	地球研の研究プロジェクトの刊行物などを閲覧できるデータベースです。
映像資料データベース	地球研の研究活動の中で収集された写真や映像が収録されているデータベースです。（約 3,700 点）

• 研究プロジェクトデータベース

西表文献データベース	地球研の研究プロジェクト「亜熱帯島嶼における自然環境と人間社会システムの相互作用」において収集された西表島に関する文献のデータベースです。（約 9,200 件）
生態史プロジェクトデータベース	地球研研究プロジェクト「アジアの熱帯モンスーン地域における地域生態史の総合的研究：1945-2005」に関する写真、文献のデータベースです。（約 1,600 件）

1-5-D: 文献・図書資料

図書雑誌所蔵目録データベース（OPAC）

1-6. 国立民族学博物館

国立民族学博物館（民博）は、世界の諸地域、諸民族の生活文化に関する資料を収集、保存するとともに、それらが用いられている地域社会ひいては人類社会全体について民族学・文化人類学を中心に学際的研究を推進するための大学共同利用機関です。1970 年に大阪府吹田市で開催された日本万国博覧会（「大阪万博」、「EXPO'70's」）の跡地を利用して 1974 年に創設され、1977 年に開館しました。「みんぱく」の愛称で親しまれています。

学術資料としては、標本資料のほか、映像資料、音響資料、文献図書資料、研究アーカイブズ資料などがあります。

文献図書資料として、文化人類学・民族学のさまざまな研究テーマに関連した図書、雑誌、マイクロ資料を収集しています。図書は 66 万 5,400 点余（2015 年度末現在）あり、その約 60% が外国語資料です。定期刊行物は 1 万 7,015 タイトル（2015 年度末現在）あり、図書同様、文化人類学・民族学とその関連領域の学術誌を中心に日本語のもの 1 万 141 タイトル、外国語によるもの 6,874 タイトルを備えています。これらの図書については、民博ウェブサイトの「図書室」から検索することができます。また、一部の貴重書を除き、閲覧および貸出ができます。このほか、民博の図書室には HRAF（Human Relations Area File）と呼ばれる、世界の諸地域、諸民族に関する文献を項目ごとに専門家が分類整理したカードファイルがあります。例えば、出産に関する世界中の比較や、太平洋の島々における食事文化など、目的に応じて情報を収集することができます。

標本資料とは、世界の諸地域、諸民族の生活文化に関するモノ資料を指します。およそ 34 万点を収蔵しており、そのうち海外から収集、寄贈された資料が 17 万 8,000 点余（2015 年度末現在）、国内資料が 16 万 3,000 点余（2015 年度末現在）です。これら資料の中には、本館の礎となった基幹コレクションであるアチック・ミュージアムコレクション（アチック・ミュージアムとは、渋沢敬三が自邸につくったプライベ

ト・ミュージアムのこと）や旧東京大学理学部人類学教室資料をはじめ、旧日本万国博覧会協会資料、ジョージ・ブラウン・コレクション等、大小様々なコレクションを含み、共同利用に活用しています。

映像資料として、本館展示場で提供している「ビデオテーク番組」（民博制作番組含む）740点のほか、「エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ（EC）」（映像百科）と呼ばれるコレクションなど約8,000点（2015年度末現在）を共同利用に供しています。

また、音響資料として、日本昔話資料や戦前の東アジア金属原盤資料など、6万2,000点余（2015年度末現在）を共同利用に供しています。

研究アーカイブズ資料としては、民族学者の残した研究ノートなどを整理、保管し、2005年から「民族学研究アーカイブズ」を構築しています。「泉靖一アーカイブ」、「梅棹忠夫アーカイブズ」など12種（2015年度末現在）あり、各アーカイブの目録を民博ウェブサイトの「民族学研究アーカイブズ」で公開しています。

これらの資料の利用については、民族学資料共同利用窓口で対応しています。詳しくは民博ウェブサイトの「共同利用」の欄をご覧ください。

データベースとしては、上述の標本資料や図書に関する目録など37件を整備しています。例えば、日本人の衣服に関する長期的な共同研究の成果は『服飾文献目録』（1994-2001年刊）や『日本人の姿と暮らし』（2016年刊）にまとめ、その基礎資料は衣服関係の一連のデータベースとして公開しています。詳しくは民博ウェブサイトの「データベース」をご覧ください。

また民博では、小中学校などでの学習に活用していただくため、民族資料をスーツケースに詰めて学習キットとして貸出しています。「みんぱっく」と呼んでいます。「アンデスの玉手箱」、「ジャワ島の装い」など14種23パック（2015年度末現在）を用意しています。利用方法については、民博ウェブサイトの「みんぱっく」でご確認ください。

1-6-A：資料別点数／件数

図書	66万5,400点余（一部の貴重書を除き、閲覧および貸出可）
定期刊行物	1万7,015タイトル（日本語のもの：10,141タイトル、外国語によるもの：6,874タイトル）
HRAF（Human Relations Area File）	地域（民族集団）ファイル：385ファイル、原典（テキスト）：7,141冊
標本資料	約34万点収蔵
映像資料	約8,000点（「ビデオテーク番組」740点、「エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ（EC）」（映像百科）と呼ばれるコレクションなど）
音響資料	6万2,000点余

1-6-B：民族学研究アーカイブズ資料（12件）

青木文教（あおきぶんきょう）アーカイブ	初期入蔵者のひとりである青木文教師のもたらした、国立民族学博物館蔵・青木文教師アーカイブ「チベット資料」です。889点の資料の目録を公開しています。
泉 靖一（いずみせいいち）アーカイブ	泉靖一氏（1915-1970）は、戦後の文化人類学を牽引し、石田英一郎氏とともに東京大学に文化人類学コースを創設した研究者です。本館所蔵資料は、泉氏がアンデス研究以前に関心を寄せたテーマに関するものが主体となっています。1,129点の資料の目録を公開しています。
岩本公夫（いわもときみお）アーカイブ	岩本公夫氏（1937-）が北京語言文化大学に留学していた際に撮影を行った「門礪（メンドン）」の写真などにより構成されます。6,236点の資料の目録を公開しています。
梅棹忠夫（うめさおただお）アーカイブズ	このアーカイブズには、フィールドノート、スケッチ、写真など、梅棹忠夫氏（1920-2010）の現地調査で生成された一次資料だけでなく、さまざまな発想、原稿のアイデアや梗概を記したカード、原稿、著作物、それに対する書評など、個人としての知的生産活動に関わる二次、三次資料のほか、学術調査・探検や学会の組織活動、学術行政、文化行政、国際交流、日本万国博覧会をはじめとした各博覧会への関与、民博創設・運営に関わる会議録など、梅棹氏の生涯を通じた活動に関わる資料のほとんどすべてが含まれています。2011年4月以降、民博ではこれらの膨大な資料の整理保存を開始し、目録情報の作成とともに、劣化のはげしい資料から各ページのデジタル画像化を進め、順次公開していきます。
大内青琥（おおうちせいこ）アーカイブ	このアーカイブは、画家・大内青琥（本名：大内兆、1939-2005）氏旧蔵の、ヤップ島から小笠原までを航海したカヌー「ベサウ号」の建造および航海に関わる紙資料（日記・建造記録等）61点及び写真資料363点で構成されており、紙資料の目録を公開しています。
桂米之助（かつらよねのすけ）アーカイブ	このアーカイブは、落語家3代目桂米之助（本名：矢倉悦夫、1928-1999）氏旧蔵の資料です。アーカイブは大きく二つにわかれ、日露戦争の戦況を報道する新聞号外を中心に明治・大正期の在阪新聞の号外・付録等約900点と米穀商関係資料で構成されていて、その目録を公開しています。平成12年、大阪府立上方演芸資料館にて桂米朝氏（桂米之助氏とは兄弟弟子）と石毛直道館長（当時）の対談が開催された折、同資料館より寄贈の申し出を受け民博に移管されました。その他、蔵書50点があります。
鹿野忠雄（かのただお）アーカイブ	このアーカイブには、鹿野忠雄氏（1906-1945 消息不明）のパンフレット、地図、新聞、さらに、2009年に東京大学から寄贈された土器、動物剥製など1,582点が含まれていて、その目録を公開しています。東京大学理学部人類学教室から1975年に寄託された資料群は本館創設時に核となった資料の一つですが、その中にも鹿野氏が台湾や東南アジアで収集した標本資料が含まれています。このアーカイブに含まれる資料は、これら標本資料以外のものとなります。
菊沢季生（きくざわすえお）アーカイブ	このアーカイブは、国語学の研究者であった菊沢季生氏（1900-1985）の日記、研究ノート、草稿など922点で構成されていて、その目録を公開しています。菊沢氏の没後に夫人から、日本ローマ字会を介して、同じ日本ローマ字会会員である縁で菊沢氏の遺稿をまとめた『菊沢季生国語学論集（全5巻）』に序文を寄せた梅棹忠夫氏が当時館長を務めていた民博へ寄贈されました。これら科学的な日本語学研究的資料は、言語人類学の資料としても貴重なものです。
杉浦健一（すぎうらけんいち）アーカイブ	このアーカイブは、杉浦健一氏（1905-1954）がミクロネシア諸島を調査した際に記したフィールドノート、メモ、草稿、地図など、東京大学理学部人類学教室に残されていた杉浦氏の資料1,151点で構成されていて、その目録を公開しています。民博の創設後間もない1975年8月に同教室から移管されたもので、オセアニア研究にとって貴重な資料が含まれています。
土方久功（ひじかたひさかつ）アーカイブ	このアーカイブは、土方久功氏（1900-1977）の、通算10年以上に及ぶパラオ滞在を含む1922年7月から1977年1月までの日記122冊、草稿やノート類など288点で構成されていて、その目録を公開しています。1986年に土方氏のご遺族から民博に寄贈されました。土方氏は、若い頃から世界の民族文化に関心を寄せ、東京美術学校で彫刻を学びました。1929年に、当時日本の委任統治領であったパラオ諸島に渡り、島々を巡りながら昔話や工芸作品の収集、民族調査などを進め、『パラオの神話伝説』、『流木』などを著して民族学界から注目を集めました。特に日記には、スケッチも含むパラオの詳細な調査記録が収められており、ミクロネシア研究者にとって極めて貴重な資料です。

馬淵東一（まぶちとういち）アーカイブ	日本における東南アジア島嶼部民族学の開拓者の一人である馬淵東一氏（1909-1988）の100冊余のフィールドノート、抜刷、原稿、写真などで構成されています。写真以外の資料についての整理がほぼ終わり、その131点の目録を公開しています。没後1989年に、馬淵氏の蔵書とともに民博が購入しました。蔵書約3,300点は「馬淵文庫」として収蔵されており、図書室で閲覧可能です。
「日本文化の地域類型研究会」アーカイブ	1960年代初頭に行われた「日本文化の地域類型研究会」が実施した調査の回答、集計表やアンケート用紙、関連資料など977点で構成されているアーカイブで、目録を公開しています。この資料は研究目的で利用できますが、個人情報など、閲覧できない資料も含まれていることをご確認ください。

1-6-C：データベース（13件）

標本資料目録データベース	このデータベースは、民博が所蔵する標本資料（生業、生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）ほぼ全件についての基本的な情報を収録しています。
標本資料詳細情報データベース	このデータベースは、民博が所蔵する標本資料について、使用に関する情報や製作に関する情報、名称に関する情報、収集に関する情報など、標本目録データベースと比較してより詳しい情報を提供しています。
標本資料記事索引データベース	このデータベースは、民博関連の出版物の中から所蔵する標本資料を解説した部分を抽出し、書誌情報や記載されている標本番号、標本名などを収録したものです。
映像資料目録データベース	このデータベースは、民博が所蔵する映像資料の目録情報です。本館が取材・製作したものや、購入したもの、または寄贈を受けた映像資料について、題名や規格、製作や付属資料などの情報を収録しています。
ビデオテークデータベース	民博の展示場にあるビデオテークは、世界のさまざまな地域で暮らす人びとの生活や儀礼、芸能について映像やマルチメディアで紹介するシステムです。このデータベースを使うと、館外からも番組をさがすことができますが、残念ながら、映像は著作権上の理由でご覧いただけません。館内のビデオテークブースや多機能端末室でご覧ください。
音響資料目録データベース	このデータベースは、民博が所蔵するレコードやテープ、CDなどの音響資料について、タイトル、シリーズ名、製作者、規格、付属資料など、メディア単位の情報を収録しています。ほとんどのデータに「音響資料曲目データベース」へのリンクがあります。なお、市販CDの一部には図書資料として所蔵されているものもあります。ご不便をおかけしますが、図書・雑誌所蔵目録データベース（OPAC）も検索してみてください。
音響資料曲目データベース	このデータベースは、民博が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位の情報や昔話の一話単位の情報を収録しています。タイトルや演者、作者、再生時間、それを収録しているメディアの規格やタイトルなどの項目を設けています。各データには「音響資料目録データベース」へのリンクがあります。
韓国生活財	このデータベースは、特別展「2002年ソウルスタイル」で協力いただいた李さん一家の生活財を網羅するデータベース（7,827件、資料数1万8点）です。特別展の会場で公開されていた生活財データベース（2000年10月～12月の調査にもとづいて制作された）をもとに、全資料の収集、整理作業をへて、データベースの構成を全面的に見直しました。2002年の時点で、ソウルに暮らす一家族がアパートのなかに保有するすべての物について、その配置と入手方法などの基本情報のほか、物にまつわる家族の思い出を記録してあります。
ジョージ・ブラウン・コレクション	このデータベースは、民博が所蔵するジョージ・ブラウン・コレクション約3,000点に関するものです。宣教師であり神学博士でもあるジョージ・ブラウンが、南太平洋諸島におけるメソジスト教会の伝道活動のかたわら、半世紀にわたって独力で収集した、歴史的・文化的に重要なものです。1985-86年にジョージ・ブラウン・コレクションを英国ニューキャッスル大学より民族資料として購入しました。
音楽・芸能の映像	このデータベースは、民博が取材したビデオ映像の中から音楽・芸能に関する部分の情報を収録したものです。取材地はユーラシアを中心として世界各地におよび、収録映像は多様なジャンル、上演形態、様式、楽器を含みます。国名などは撮影時のものを使用しています。なお、ビデオ映像は著作権や肖像権上の理由で、現時点では館外からはご覧いただけません。

ネパール写真	このデータベースは、1958 年の「西北ネパール学術探検隊」（隊長：川喜田二郎氏）に参加した京都文教大学元教授の高山龍三氏と隊員が撮影した写真（3,584 点）、および同隊がネパールで収集し、現在、民博に収蔵されている標本資料（295 点）の写真から成ります。探検隊が撮影したネパール西北部ドルパ地方の写真は、1959 年のチベット動乱以前の姿を記録している点で世界的にも珍しく、極めて貴重なものです。
松尾三憲蔵絵葉書コレクション	このデータベースは、松尾三憲（みのり）氏が、1919（大正 8）年から 1923（大正 12）年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求められた絵葉書 189 枚のうち 170 枚を公開するものです。ご子息の松尾茂雄氏によって民博へ寄贈されました。この絵葉書群に見られる風物・キャプションなどには、植民地も含めた外地に対して当時の日本人が持っていた見方やまなざしを探るうえで歴史的価値があると考え、研究資料として公開するものです。そのため、属性情報には、元の文言をそのまま生かしていますが、現在では不適切と考えられる表現も含まれていることをご了解ください。
京都大学学術調査隊写真コレクション	このデータベースは、京都大学による学術調査隊のうち、国立民族学博物館初代館長梅棹忠夫と第 3 代館長石毛直道がとくに深くかわった調査隊についての写真資料のうち本館が収蔵している資料の一部を収録したものです。京都大学学術調査隊についての写真および動画資料は、京都大学を拠点とした一連の学術調査隊の活動の軌跡をしめすものであり、日本の民族学・文化人類学の形成史を裏づける重要な学史的資料であるとともに、調査対象となった各地域のかつての姿を記録した重要な歴史資料でもあります。このデータベースでは、民族名・地域名などの語用について、調査当時のものをそのまま生かしているため、現在では不適切と考えられる表現も含まれることをご了承ください。

1-6-D：言語資料

中西コレクション——世界の文字資料——	中西コレクションは、中西印刷株式会社の先代社長である中西亮氏が、世界各地を廻って集めた資料で、世界の様々な文字 95 種が載っている貴重な資料です。これらの資料は、1994 年、中西氏のご遺族から民博に寄贈され、その後、多くの研究者の協力を得ながら資料分析を行い、民博でデータベースを構築しました（図書資料 1,256 点、新聞資料 13 地域（1,171 紙）、標本資料 296 点）。
吉川シュメール語辞書	「吉川シュメール語辞書データベース」は、広島大学文学部名誉教授吉川守先生が四十年ほどの年月をかけて完成したシュメール語をよみ、研究するためのファイルをデータベース化したものです。シュメール語は世界でもっともはやくから文字をもった言語で、中近東の研究だけでなく、世界の文明史、民族学の研究には欠かせないことばです。（PDF ファイル 4 万 596 枚、検索キーワード 3 万 3,450 語（2005 年 1 月現在））
Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok（ボントック語音声画像辞書）【英語】	Lawrence A. Reid ハワイ大学名誉教授が編集した、フィリピンのルソン島北部で話されるボントック語のギナアン方言の辞書です。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書です。（見出し語：7,637 語）
日本昔話資料：稲田浩二コレクション	「日本昔話資料：稲田浩二コレクション」は稲田浩二氏を中心としたグループが日本各地に語り手を訪ね、現地で収録した 446 本のテープ合計 190 時間におよぶ昔話のコレクションです。稲田氏を通じて 1982 年 3 月に本館へ寄贈されました。
rGyalrongic Languages（ギャロン語系諸語）【英語、中国語】	長野泰彦国立民族学博物館名誉教授と Prince 博士が編集した、中国・四川省の西北部で話されているギャロン語系諸語のデータベースです。81 の方言ないし言語について、425 または 1,200 の語彙項目と 200 の文例を音声とともに収録しています。

1-6-E：服装・身装文化資料

衣服・アクセサリ	このデータベースには、本館収蔵庫に収蔵されている衣服標本資料とアクセサリ標本資料の詳細分析情報、および各地域のフィールド写真を収録しています。このデータベースは、民博・大丸弘研究室（1995年度まで）、民博・久保正敏研究室（2015年度まで）、大阪樟蔭女子大学・高橋晴子研究室（2014年度まで）が中心となって作成したものです。2016年度より、MCDプロジェクトとして、引きつづき作成に当たっています。現在、画像を含めた総データ件数は、約16万件です。
身装文献	このデータベースは、1）服装関連日本語雑誌記事（カレント）、2）服装関連日本語雑誌記事（戦前編）、3）服装関連外国語雑誌記事、4）服装関連日本語図書、5）服装関連外国語民族誌で構成されています。このデータベースは、民博・大丸弘研究室（1995年度まで）、民博・久保正敏研究室（2015年度まで）、大阪樟蔭女子大学・高橋晴子研究室（2014年度まで）が中心となって作成したものです。2016年度より、MCDプロジェクトとして、引きつづき作成に当たっています。現在、文献の総データ件数は、約17万3,000件です。
近代日本の身装電子年表	本年表では、洋装がまだ日本人の日常の衣生活として定着していない期間を近代とし、1868（明治元）年から1945（昭和20）年の第二次大戦終結までを対象としています。本年表の第一の目的は、その時代時代に生きた人々の身装（身体と装い）の再現・確認のための手がかりを提供することです。当該期間の事柄を、「事件」、「現況」と各年の画像、「回顧」に分けて記述しています。このデータベースは、民博・大丸弘研究室（1995年度まで）、民博・久保正敏研究室（2015年度まで）、大阪樟蔭女子大学・高橋晴子研究室（2014年度まで）が中心となって作成したものです。2016年度より、MCDプロジェクトとして、引きつづき作成に当たっています。現在、画像を含めた総データ件数は、約1万1,500件です。

1-6-F：文献図書資料

図書・雑誌所蔵目録データベース（OPAC）

梅棹忠夫著作目録（1934～）

1-6-G：みんぱっく：14種23パック

- ① 極北を生きる——カナダ・イヌイットのアノラックとダッフルコート
- ② アンデスの玉手箱——ペルー南高地の祭りと生活
- ③ ジャワ島の装い——宗教と伝統
- ④ イスラム教とアラブ世界のくらし
- ⑤ ブータンの学校生活
- ⑥ ソウルスタイル——こどもの一日
- ⑦ ソウルのこども時間
- ⑧ インドのサリーとクルター
- ⑨ プリコラージュ
- ⑩ アラビアンナイトの世界
- ⑪ アイヌ文化にであう
- ⑫ アイヌ文化にであう2——樹皮からつくる着物
- ⑬ モンゴル——草原のかおりをたのしむ
- ⑭ あるく、ウメサオタダオ展

2. 共同利用の実績

本機構の第2期業務実績報告書において、学術資料や施設・整備に関する共同利用の実績を明示しています。ここでは、それらについての概要を紹介します。いずれの機関も、学術資料の保存とともに、できる限り、研究者コミュニティのみならず、オンライン公開などを通じてより広い共同利用の実現に努めています。

2-1. 国立歴史民俗博物館

歴博が所蔵する図書は、毎年度約4,500冊を貸出しています。これは蔵書の1.3%に相当します。また、定期刊行物は、毎年度約1,000冊を貸出しています。すべての貸出のうち、23%が館外利用者によるものです。

館蔵資料の共同利用については、簡易な手続きで閲覧が可能な「即日閲覧」、調査・研究のための「熟覧・撮影」、展示・教育のための「貸出」に分けることができます。「即日閲覧」は毎年度約50～100件（150～250点）程度、「熟覧・撮影」は毎年度約100件（1,000～3,000点）程度、「貸出」は毎年度約50～100件（300～500点）程度で、いずれも近年は漸増傾向にあります。2015年度については、東京大学や大韓民国国立中央博物館を含む延べ219大学・博物館等研究機関が、その活動に本館の館蔵資料を活用しました。また、毎年度約4,000点の資料画像の提供も行っています。

データベースについては、全体で132万件以上のデータを収録しており、年間30万件以上の利用があります。また、年度ごとに利用登録が必要な10件のデータベースについては、大学教員や大学院生等を中心に、毎年度100名前後の国内外の研究者が登録し利用しています。新規データベースの追加および既存データベースのデータ追加・更新を継続して実施しています。

施設・設備のうち、歴史資料分析用の「高分解能マルチコレクタ ICP 質量分析装置」は、2013年度末に設置以来、毎年度15～50件程度の共同利用が行われています。また、共同利用に供していない時間には、歴博が独自に研究対象としている資料の分析を実施しているほか、装置の精度や検出限界、再現性など、歴史資料を対象とする分析手法の改善を図るための工夫を進めており、全体を合わせた稼働率は約75%です。

2016年度の利用者数は229人で、共同研究「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」、「日本近世における彩色の技法と材料の受容と変遷に関する研究」のメンバーのほか、大阪大学、東亜大学、富山大学、山口大学、京都大学総合博物館、奈良文化財研究所、日本銀行貨幣博物館、群馬県埋蔵文化財調査事業団、小田原市教育委員会、喜界町教育委員会、湖西市教育委員会、名古屋市教育委員会などの研究者に利用されています。

2-2. 国文学研究資料館

図書や逐次刊行物のうち、閲覧しかできない写本・版本の貸出は毎年度1%程度ですが、図書館間相互貸借システムを利用できる資料については毎年度2%程度です。

一方、マイクロフィルム資料は6%程度、マイクロ紙焼写真は3%程度です。また複写サービスを向上するために、2014年度から外部委託を取り入れました。

歴史関係アーカイブズ資料については、毎年度平均2万点の閲覧が総資料数の約4%に相当します。

専門性の高いこれらの資料の利用を促進するため、国文研では、電子図書館を整備し、オープンサイエンス化を推進しています。そのため、閲覧や相互貸借そのものは漸減傾向にあります。

データベースのうち、図書や館蔵資料の目録に関する普遍的な利用のほか、国文学論文目録データベース、日本古典籍総合目録データベース、館蔵和古書目録データベース、図書・雑誌所蔵目録（OPAC）など専門的なデータベースも一般公開されており、毎年度平均で200万件以上利用されています。特に国文学論文目録

録データベースは、毎年度平均 80 万件以上の利用が見られ、関連分野の研究における重要な資料となっています。

また、利用申請を必要とする大系本文（日本古典文学）データベースも、毎年度 1 万回以上の利用がみられます。ここでは、『日本古典文学大系』（旧版、岩波書店刊）のテキストが全文検索できます。

2-3. 国立国語研究所

研究図書室の所蔵図書およそ 15 万点は、内部および共同研究員による利用のほか、毎年度約 5,500 件の閲覧・複写・貸出による一般利用があります。

また、出版物等に掲載するためなどの特別利用も貴重図書を中心に毎年度 5～10 件程度あります。『古今文字讀』や『金剛頂一切如来真実摂大乘現証大教王経』などの貴重図書は、日本語史研究上の重要な資料として、ウェブ上で高精細画像や翻字テキストなどの形で 42 点を公開しています。

国語研における共同利用の大きな特徴は、日本語の言語資料（テキスト・音声等）を収集し、コーパスやデータベースなどの言語資源として整備して一般公開している点です。整備点数の増加ばかりでなく、ページビュー数も着実に増加しており、オープンサイエンス化を進めています。

2011 年度に正式公開した「現代日本語書き言葉均衡コーパス」は、日本語書き言葉の全体像を反映するため、書籍、雑誌、新聞、ウェブなど、さまざまなジャンルの言語データを収集し、詳細な検索・分析を可能にした、現時点では日本語における唯一の均衡コーパスです。ウェブ上で一般利用可能な「少納言」のほか、詳細検索可能な「中納言」（要登録）、データそのものを収録した DVD 版（有償）の形で公開しており、登録ユーザ数は 3,500 名以上にのぼります。「日本語歴史コーパス」（登録約 350 ユーザ）、「日本語話し言葉コーパス」（登録約 700 ユーザ）も、公開されているものでは、各ジャンルにおいて最大規模の日本語コーパスであるほか、「アイヌ語口承文芸コーパス」などの貴重な言語資源も共同利用に供しています。

また、国内外の日本語学習者・教育者・研究者にとって有用な「中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス」（登録約 350 ユーザ）、「複合動詞レキシコン（国際版）」（年間約 4 万 5,000PV）、「日本語学習者会話データベース」（年間約 1 万 5,000PV）などのほか、「日本語研究・日本語教育文献データベース」（年間約 9 万 PV）、「雑誌『国語学』全文データベース」（年間約 4 万 5,000PV）などの研究文献情報も重要な研究資源として利用されています。

2-4. 国際日本文化研究センター

日文研は、「外書」という独特の概念により図書資料を収集し、図書館で保管しています。毎年度の平均入館者数は約 2 万 5,000 人であり、そのうち約 800 人がセンター外からの来訪者です。図書館間相互貸借システムを通じて、毎年度 2,000 件程度の複写と 850 件程度の貸出を受け付けてセンター外からの利用に供しています。

なお、所蔵資料の出版物などへの掲載利用は毎年度 200 件以上と定めて多く、近年では年間 400 件近くまで増加しています。例えば、艶本、妖怪絵巻、古地図などが多く掲載利用されています。

日文研の大きな特徴は、図書資料としてさまざまな絵巻、浮世絵などの資料があり、映像音響資料とともに、これらをデータベースとして一般公開し、そこから館蔵資料の展示貸出へとつながっていることです。ウェブサイトにて一般公開しているデータベースへのアクセス数は全体で毎年 10 万件にのぼり、2015 年には「撰関期古記録データベース」は 7,406 件、「和歌データベース」は 5,363 件のアクセスがありました。また、第 2 期を通して「怪異・妖怪伝承データベース」および「怪異・妖怪画像データベース」はそれぞれ約 15 万件のアクセスがありました。

さらに、全国各地の博物館や大学などに「百鬼夜行絵巻」や「名所図会」などを展示用に貸出し、研究者の利用を超えて広く活用されました。2013年には大英博物館に「春画」を提供し、国際的に大きな話題を呼びました。掲載利用が多いことも、このような利用形態を反映しています。

2-5. 総合地球環境学研究所

地球研の図書室は、所内の研究者に加え、地球研の共同研究として実施する「研究プロジェクト」に参加する毎年800から1,000人の所外の共同研究員等が利用することができます。毎年度1万2,000人程度が入室し、500冊程度が貸出されています。また、図書館間相互貸借システムを通じて、毎年度、平均して複写受付50件程度、貸借受付20件程度の利用があります。

地球研アーカイブズは、これまでに実施された、あるいは現在実施中の研究プロジェクトが収集した国内外の地球環境問題に関わるさまざまな研究分野の資料が収録されている点に特徴があり、2015年度1,300件を超える検索がありました。調査地で収集した各地域の歴史文書やオーラルヒストリーの記録といった人文社会学系の研究資料、環境問題に関する自然科学系の各種観測データなどが活用されています。

実験施設および分析装置は、毎年度、全国の国公私立大学等30～50機関、約200人の所内外の研究者に利用されています。特に、安定同位体を用いて地球環境問題の解決に資する研究活動を促進するため、所外に公募を行う同位体環境学共同研究事業を2012年から開始しており、2015年までに延べ204件が採択されています。技術スタッフのサポートや経費的な支援に加え、毎年、8～13の大学等研究機関、10～16人の研究者に参加していただく講習会も行っており、特色ある共同利用を促進しています。

2-6. 国立民族学博物館

図書室への入室者は毎年度1万3,000人程度で、うち1,700人ほどが館外の方々です。一般にも開放しており、専門的知識を必要とする方であれば、大学等の所属を問わず利用することができます。図書については毎年度、約1万1,000冊の貸出があり、これは蔵書の2%に相当します。このうち、18%が館外者によるものです。図書館間相互貸借による複写や貸借では、いずれも館内からの依頼よりも館外からの受け付けが多く、専門的な図書を共同利用に供している状況です。複写は毎年度2,000件、貸借は毎年度900件程度です。上述の来室による貸出冊数と合わせると、毎年度延べ5,000人の来室に相当します。

およそ34万点の標本資料のうち、約1万2,000点が展示場に展示されています。標本資料の共同利用のうち、標本資料を直接調査する熟覧は、館外での共同研究や館外からの依頼により年間3,000点ほどが利用されています。海外の研究者からの依頼も多く、2015年度には、データベースで事前調査のうえ、こけし約500点を熟覧しに来日した研究者もいました。大学生や研究者、一般企業からの原板利用希望は、年間500点ほどの依頼があります。資料の貸出は、巡回展も合わせると毎年1,000～1,500点ほどを貸し出しています。世界各地の民族資料を系統立てて収集し、開館時より保存しながら活用することを目的に維持管理を続けている日本でもトップクラスの博物館施設として、各地の博物館や美術館からの借用依頼があります。一方、大規模な巡回展として、2014年度に開催した「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」があり、国立新美術館および本館での開催を皮切りに、毎年巡回展を開催しています。貸出の中には、チベットの仏画やモンゴルの馬具など、共同研究の成果が情報として発信されることで、貸出に結びつくこともあります。また、貸出を行った施設から本館研究者に、ギャラリートークや講演会、図録や新聞などメディアへの執筆などが依頼されることも多く、貸出や展示が研究成果の社会還元と、新たなネットワークの構築につながっています。これら熟覧や利用、貸出はいずれも近年は漸増傾向にあります。

映像音響資料のうち、ビデオテープ番組については、その一部をパッケージ化し「みんぱく映像民族誌」

DVD シリーズとして 2011 年度から毎年 4 ～ 5 集制作しており、2015 年度末現在で計 21 集です。世界の諸地域、諸民族の生活文化に関する映像資料は、大学の文化人類学等の授業に利用することができますので、事前にアンケートを取り、必要とされている約 600 大学等へ制作したシリーズを毎年無償で配布しています。配布先の機関にはアンケートに協力いただき、引き続き配布を希望されるか確認しています。今まで貸出していた映像資料を各機関で所蔵いただいていることから、映像資料の貸出件数は漸減傾向にあります。

研究アーカイブズ資料は、年間 10 件ほど原資料が閲覧され、複写されています。慎重な取扱いを要する資料なので、利用件数は多くはないですが、民族学研究にとって貴重な情報を提供しています。

データベースのうち、図書や標本資料、映像音響資料の目録に関するものが普遍的に利用されているほか、韓国生活財、ジョージ・ブラウン・コレクション、ネパール写真、ギャロン語系諸語コレクション、身装文献など、専門的なデータベースも毎年度 1 千件以上利用されています。いずれも共同研究の成果により整備されています。韓国生活財、ジョージ・ブラウン・コレクション、ネパール写真は展示による公開もいたしました。また、ジョージ・ブラウン・コレクションやネパール写真、ギャロン語系諸語コレクションについては、多国語で一般公開しています。さらに、世界の文字資料に関する中西コレクションは、毎年度 3 万件以上のアクセスがあります。そのほか、20 世紀の学術調査に関する写真資料については現在、館内での限定公開であるため、来館の際に利用されています。

学習キット「みんぱく」については、数に限りがあるため、貸出数は年間 210 件前後で推移しています。今後の、内容やシステムの改善に向けて、授業での利用について従来の簡単なアンケートに加えて、訪問調査も実施することにしました。

3. 共同研究体制

人文機構の6機関はいずれも諸大学の研究者とともに共同研究を実施することにより、大学における研究力の向上に貢献しています。各機関は、研究分野の特性を反映して、共同研究に関するカテゴリーをそれぞれ独自に設定してきました。また、第3期中期目標期間（第3期）の開始にあたっては、従来のカテゴリーの見直しも行いました。ここでは、第2期中期目標期間（第2期）の体制と、第3期からの主な変更点を説明します。

3-1. 国立歴史民俗博物館

歴博では、共同研究として「基幹研究」、「基盤研究」、「開発型共同研究」、「展示プロジェクト」、「資料調査研究プロジェクト」、「国際交流事業」、「機関関連共同研究」の7つの類型があります。全国の大学等研究機関から多くの研究者にご参加いただき、共同研究を推進しています。

「基幹研究」は、本館の取り組む中心的な研究テーマのもとに学際的な研究をめざすものであり、大テーマのもと2～3のブランチで構成され、多角的な視点で研究が進められています（予算規模：300万円）。「基盤研究」は、本館所蔵資料の整理・分析や、歴史学・考古学・民俗学などの新しい方法論的基盤作りをめざすものであり、ブランチ構成は取らず、「歴史資源開発研究」、「先端博物館構築研究」、「広領域歴史創成研究」、「多元的フィールド解析研究」、「公募型共同研究」などのカテゴリーのもとで研究が進められています（予算規模：250万円）。

「基幹研究」については、公募は行っていません。「基盤研究」については公募型共同研究の枠を設けており、館蔵資料をもとにした共同研究の公募を行っています。

「開発型共同研究」は、本館に採用された若手研究者を対象として新規課題の発掘と人材育成に取り組む共同研究です。

展示準備についても、館外の研究者を含めた各分野の研究者による多角的な共同研究が必要とされます。そのため、展示を構築するプロジェクトを研究の一環に位置付け、館内外の研究者によって構成されるチームがプロジェクト研究の成果に基づいて展示案を作成し、その学問的内容についてもこのチームが責任を負うこととする研究体制として組織されたものが「展示プロジェクト」です。

「資料調査研究プロジェクト」においては、館蔵資料の公開と活用を促進するために、目録情報や画像などの基礎データを調査・整理し、資料目録や資料図録のほか多様な形態での公開をプロジェクト方式で進めています。

「国際交流事業」（国際交流協定に基づく共同研究）は、外国研究機関との間で、研究者の交流、共同研究および研究集会の実施、博物館の展示および教育活動に関する協力、学術的情報および出版物の交流等を推進するものです。

「機関関連共同研究」とは、人文機構が第2期に「連携研究」という枠組みのもとで実施してきた共同研究を指します。第3期に入り、2016年度からは、人文機構に設置された「総合人間文化研究推進センター」において推進される「基幹研究プロジェクト」として実施することとなりました。

第3期においては、さらに以下のような変更を行いました。

大学共同利用機関として、さらに共同利用性を高め、大学等の研究・教育に供するため、共同研究（基幹研究、基盤研究）を館内外に広く公募することとしました。

基盤研究については、基盤研究1（課題設定型）、基盤研究2（館蔵資料型）の2つのタイプを設定し、基盤研究1における研究課題については、本館が取り組む「博物館型研究統合」や、第3期中期計画の中心である「総合資料学の創成」に研究課題が合致していることを必須の条件としました。

このほか、新規に共同利用型共同研究という枠を設けました。主に若手研究者を対象とし、研究期間は1年で、本館の分析機器や資料の活用による研究サポートをしていくこととしました。

また、本館が第3期の機関拠点型基幹研究プロジェクト「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」の推進と大学等研究機関との連携の実質化をはかるために、奨励研究の公募も開始しました。

共同研究の申請書類の審査にあたっては、書面審査の段階で館内教員だけでなく館外研究者にも依頼し（従来は運営会議共同研究委員会によるヒアリングと合議審査）、外部による審査をより重視することとしました。

3-2. 国文学研究資料館

国文研では、共同研究として「基幹研究」、「特定研究」、「国際連携研究」、「研究開発系」の4つの類型がありました。いずれの類型においても、全国の大学等研究機関から多くの研究者にご参加いただいて推進する共同研究です。

「基幹研究」とは館内に所蔵された研究資料等の整理を中心とする基礎的な共同研究です。「特定研究」とは研究者コミュニティの要請に基づき選定された特定の課題を推進します。国際的な活動为目标とする共同研究として「国際連携研究」があります。「研究開発系」とは、オープンサイエンスに向けた取組を実施するために情報学との協業による共同研究です。

2014年度より「大規模学術フロンティア促進事業」として「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」が開始されました。同事業は、日本国内20拠点が所蔵する古典籍のデジタル化を推進し、検索機能を充実することで、異分野からの参入や国際化を推進する大型研究プロジェクトです。そこで、古典籍共同研究事業センターを設置し、新たに「国際共同研究」、「公募型共同研究」、「異分野融合共同研究」、「拠点主導共同研究」、「国文研主導共同研究」、「機構内共同研究」、「研究開発系」という7つの類型に整理しました。

国文学研究の国際化をはかるために、従来の「国際連携研究」は新たな「国際共同研究」の枠組みに収斂されました。国文学研究の学際化あるいは古典籍の異分野融合研究をはかるために、「異分野融合共同研究」を2015年度から開始しました。また、「機構内共同研究」においても、機構内機関を連携させながら異分野融合を推進しています。さらに、日本国内のネットワーク拠点の機能強化をはかるために、各拠点の主催する共同研究が「拠点主導共同研究」です。なお、従来からの取組である「研究開発系」はこの枠組に統合しました。

このような大型事業を推進するための改編を経て、第3期から、一般的な共同研究は「基幹研究」と「特定研究」になります。後者については、積極的に公募を実施しています。公募については、「一般」枠のほかに、「若手」枠と「課題」枠を設けています。「課題」枠とは、研究動向に基づき、包括的なテーマをあらかじめ設定することによって、共同研究の集積的な発展を促進する目的をもつ共同研究です。

3-3. 国立国語研究所

国語研では、大学共同利用機関に移行してから初めての中期目標・中期計画期間であったため、さまざまな共同研究の体制の在り方を探るという観点から、予算規模および研究目的に応じた「基幹型」、「領域指定型」、「独創・発展型」、「萌芽・発掘型」の4つの類型を設定して進めました。いずれの類型も、全国の大学等研究機関からの多くの研究者と連携することで推進した共同研究です。

- 基幹型：国語研における研究活動の根幹となる大規模プロジェクト（計19プロジェクト）
- 領域指定型：国語研が指定したテーマを扱う外部公募型プロジェクト（計8プロジェクト）

- ・独創・発展型：独創性に富む斬新なテーマを扱う中小規模プロジェクト（計8プロジェクト）
- ・萌芽・発掘型：研究系・センターの枠を超えた新たな研究領域の創成が期待されるプロジェクト（計9プロジェクト）

以上のほか、マックスプランク進化人類学研究所（ドイツ）とは、自動詞・他動詞の交替に関して、オックスフォード大学（英国）とは上代日本語のコーパス構築に関して、北京日本学研究中心（中国）とは中国人の日本語習得について、それぞれ国際共同研究を実施しました。

第2期の最終年度には、第3期に向けた準備としてフィージビリティ型共同研究（5件）を実施するとともに、第3期の機関拠点型基幹研究プロジェクトを構築するため、外部有識者からの意見を反映させながら、運営会議の審議を経て6件のプロジェクトを確定しました。その際、第2期で実施した4類型による共同研究体制を見直し、国語研全体として、ひとつの研究テーマに向かって少数（6件）の共同研究が密接に連携して効果的かつ実質的に成果をあげる新たな体制を構築しました。また、第3期には、基幹研究プロジェクトを補完するための「領域指定型」および将来の新たな研究方法を探る「新領域創出型」の共同研究（外部公募）を策定しました。さらに、人間文化研究機構が実施する「広領域連携型」および「ネットワーク型」の共同研究にも参画することにより、国語研の基幹研究プロジェクトを一層充実させる体制を構築しました。

3-4. 国際日本文化研究センター

日文研では、同機関の教授が共同研究を主宰してきました。共同研究では、日本文化の全体像を把握する視座として5つの研究域「動態研究」、「構造研究」、「文化比較」、「文化関係」、「文化情報」を設け、各域に3つの研究軸を設定（原則15件）しています。いずれの領域においても、全国の大学等研究機関から多くの研究者にご参加いただいて推進する共同研究です。

なお、共同研究を主宰する研究者を国内外から一般公募しており、2010年度から2015年度までの6年間で国内5名・国外10名の研究者が多様な共同研究を展開しています。

第3期には、日本研究のグローバル化や研究動向の変化に対応するため共同研究の再編検討を行い、2017年度より新たに「重点共同研究」、「国際共同研究」、「基幹共同研究」の3領域からなる体制へ改革を行いました。

3-5. 総合地球環境学研究所

地球研では、広く科学者コミュニティに対して研究シーズの公募を行い、海外の方を半数以上含む、外部有識者による厳正な審査・評価を通じて、大型の共同研究（研究プロジェクト）を実施しています。複雑な地球環境問題の解決に向け、国内外の自然科学・人文科学・社会科学といった多様な学問領域の研究者の参画による文理融合研究を先駆的に行う国際共同研究です。

「研究プロジェクト」の実施にあたっては、IS（Incubation Studies：インキュベーション研究）、FS（Feasibility Studies：予備研究）、PR（Pre-Research：プレリサーチ）、FR（Full Research：フルリサーチ）という段階を経てプロジェクト形成を推進します。所外のプロジェクト提案者は、FRになると地球研の専任スタッフとなって、プロジェクトリーダーとして研究に専念します。2010-2015年度には、終了したプロジェクトに対して希望に応じて、CR（Completed Research：終了研究）として研究成果の社会発信や次世代プロジェクトの形成など、さらなる研究の展開をはかりました。研究者はこれら各段階での評価とフィードバックを受けながら、研究内容を深化させ、練り上げていくことが可能になっています。

2010-2015年度には、「研究プロジェクト」は、その研究内容に応じて「循環」、「多様性」、「資源」、「文明環境史」、「地球地域学」の5つの「領域プログラム」のもとで実施しました。また、これまでの公募型「研

究プロジェクト」の成果を活かしながら、研究動向を踏まえて課題解決をはかることを目的に、地球研による主導型共同研究として「未来設計プロジェクト」も実施しました。さらに、2014年度には、従来の個人または少人数の研究者グループからの提案による「個別連携プロジェクト」に加え、大学等研究機関との組織的な連携を重視した「機関連携プロジェクト」方式を導入しました。

第3期には、多様な自然、歴史、文化を有するとともに地球環境問題のホットスポットであるアジアを主要な対象地域に定め、地球環境問題に関する中核的な課題に取り組む「プログラム」を設け、その下に複数の研究プロジェクトを実施する「プログラム-プロジェクト制」に移行しました。プログラムには、中核的課題を取り扱う「実践プログラム」と、これを統合する「コアプログラム」があります。

「実践プログラム」は、「環境変動」、「資源」、「生活圏」をキーワードとした3つのプログラムで構成されています。「実践プログラム」には、「個別連携型」と「機関連携型」のプロジェクトがあり、研究アイデアを公募し、プログラムごとに設定された重点課題に沿って研究を実施しています。特に「機関連携型」のプロジェクトでは、クロスアポイントメント制度により、研究者は複数の組織で身分を持ち、柔軟に研究に従事することができます。

「コアプログラム」もまた研究アイデアの公募により、プロジェクトが設置されます。プロジェクトが個別の課題や分野に限定されず、さまざまな地球環境問題に適用が可能であり、総合地球環境学としての基礎と汎用性を持った「社会との協働による地球環境問題解決のために必要な理論・方法論の確立」をめざしていくところに特徴があります。

また、国際的な展開として、持続可能な地球社会をめざす国際的な研究プラットフォームであるフューチャー・アースのアジア地域センター運営を担い、アジアの優先課題の作成やネットワーク構築を進めています。

3-6. 国立民族学博物館

民博では、独自に行っている「共同研究」のほか、機関が主導する「機関研究」および「フォーラム型」共同研究があります。いずれも、全国の大学等研究機関から多くの研究者にご参加いただいて推進する共同研究です。

独自に行っている共同研究は、館内外の研究者個人による公募で共同利用委員会により採択しています。2010年度からは「若手」枠を設けました。

「機関研究」は、現代的課題に取り組む大きなテーマのもとに、館内からの公募により採択しています。2017年度からは、「特別研究」として新たなテーマでの共同研究を開始しました。

「フォーラム型情報ミュージアム」プロジェクトは、民博が所蔵している世界の諸民族や文化に関する資料を研究し、その成果を人類の文化遺産として世界の人びとと共有するための挑戦的な研究プロジェクトです。大学等の研究機関の研究者はもちろんのこと、それらの資料を作りだして実際に利用してきた現地の人びともプロジェクトに参画しています。フォーラム型情報ミュージアムはインターネットを介して世界の人びとに共同利用されることで、新たな知の創生をめざしています。

4. 共同研究の実施

人文機構 6 機関の共同研究に関する実施状況について、機関ごとかつ類型ごとに以下のように表にまとめました。全国の大学等研究機関から多くの研究者による参加を得て共同研究を推進しています。全体として、私立大学からの参加も少なくありません。

4-1. 国立歴史民俗博物館

4-1-A：共同研究者の所属機関の内訳

研究課題 件数	共同 研究者数	共同研究者の所属機関の内訳								
		自機関	国立大学	大学共同 利用機関	公立大学	私立大学	公的機関	民間機関	外国機関	その他
95	1,351	497	239	43	32	263	153	36	47	41

4-1-B：共同研究者所属機関一覧

(国立大学) 53 機関

秋田大学、茨城大学、岩手大学、宇都宮大学、愛媛大学、大阪大学、岡山大学、小樽商科大学、お茶の水女子大学、鹿児島大学、金沢大学、岐阜大学、島根大学、九州大学、京都工芸繊維大学、京都大学、熊本大学、群馬大学、神戸大学、埼玉大学、佐賀大学、静岡大学、上越教育大学、信州大学、総合研究大学院大学、千葉大学、筑波大学、東京学芸大学、東京藝術大学、東京工業大学、東京大学、東京農工大学、東北大学、徳島大学、富山大学、名古屋大学、奈良先端科学技術大学院大学、鳴門教育大学、新潟大学、一橋大学、弘前大学、広島大学、福島大学、北海道教育大学、北海道大学、三重大学、宮崎大学、室蘭工業大学、山形大学、山口大学、横浜国立大学、琉球大学、和歌山大学

(公立大学) 19 機関

愛知県立芸術大学、愛知県立大学、岩手県立大学、大分県立芸術文化短期大学、大阪市立大学、大阪府立大学、沖縄県立芸術大学、金沢美術工芸大学、北九州市立大学、京都府立大学、県立広島大学、埼玉県立大学、札幌医科大学、滋賀県立大学、首都大学東京、都留文科大学、公立はこだて未来大学、兵庫県立大学、山梨県立大学

(私立大学) 88 機関

愛国学園短期大学、愛知学院大学、愛知大学、青山学院女子短期大学、青山学院大学、跡見学園女子大学、梅光学院大学、江戸川大学、桜美林大学、大阪経済大学、大阪工業大学、大手前大学、岡山理科大学、沖縄国際大学、沖縄大学、学習院女子大学、学習院大学、神奈川大学、川崎医療福祉大学、関西学院大学、関西大学、神田外語大学、関東学院大学、北里大学、京都精華大学、京都造形芸術大学、近畿大学、金城学院大学、敬愛大学、慶應義塾大学、甲南大学、國學院大學、國學院大學栃木短期大学、国士舘大学、相模女子大学、札幌大学、産業能率大学、実践女子大学、芝浦工業大学、上智大学、尚美学園大学、上武大学、昭和女子大学、成城大学、西南学院大学、専修大学、大東文化大学、千葉経済大学、中央大学、中部大学、つくば国際大学、都留文科大学、東海大学、東京経済大学、東京情報大学、東京女子大学、東京都市大学、同志社大学、東北学院大学、東北芸術工科大学、東洋大学、長崎純心大学、長野大学、奈良大学、南山大学、二松學舎大学、日本女子大学、日本大学、ノートルダム清心女子大学、花園大学、佛教大学、法政大学、宮城学院女子大学、武蔵大学、武蔵野美術大学、明治学院大学、明治

大学、ものづくり大学、立教大学、立正大学、立命館大学、和光大学、早稲田大学、龍谷大学、恵泉女学園大学、東京理科大学、東洋英和女学院大学、武蔵野音楽大学

（海外学術研究機関）40 機関

〈オーストリア〉ウィーン大学、オーストリア学士院
〈オランダ〉ライデン国立民族学博物館
〈カナダ〉カルトン大学
〈スイス〉チューリッヒ大学
〈ドイツ〉ミュンヘン国立五大陸博物館、ボン大学
〈ネパール〉クオパ工科大学
〈韓国〉ウリ文化財研究院、蔚山大学、韓国国立慶州博物館、韓国国立中央博物館、韓国国立文化財研究所、韓国国立民族博物館、韓国国立民俗博物館、韓神大学校、ソウル清溪川文化館、大韓文化財研究院、東国大学校、東新大学校、東亜細亜文化財研究院、釜山大学校、嶺南大学校博物館、全北大学校、ソウル大学校、中央大学校、木浦大学校
〈台湾〉台北芸術大学、台湾新生医護管理専門学校、台湾大学
〈中国〉華東師範大学、中国社会科学院、中山大学、上海師範大学
〈米国〉イリノイ大学、西ミシガン大学、ハバフォード大学、コロンビア大学、南カリフォルニア大学
〈英国〉ロンドン大学

（政府・自治体）13 機関

宮内庁、宮内庁正倉院事務所、文化庁、青森県、群馬県、長崎県、小田原市、さいたま市、堺市、浜松市、福岡市、藤沢市、関ヶ原町

（小・中・高等学校、高等専門学校、専門学校等）6 校

神奈川県立弥栄高等学校、共立女子第二中学・高等学校、島根県立松江北高等学校、栃木県立学悠館高等学校、ラ・サール中学校・高等学校、東洋美術学校

（博物館・美術館・資料館・図書館等）64 機関

アイヌ民族博物館、青森県立郷土館、秋田県立博物館、浅間縄文ミュージアム、石川県輪島漆芸美術館、岩手県立博物館、浦添市美術館、潁川美術館、江戸東京たてもの園、江戸東京博物館、愛媛県歴史文化博物館、大阪産業労働資料館、大阪城天守閣、大阪歴史博物館、神奈川県立歴史博物館、「技術と社会」資料館、高知県立歴史民俗資料館、江東区江戸深川資料館、江東区芭蕉記念館、神戸市立博物館、国立西洋美術館、さいたま市大宮盆栽美術館、坂戸市立歴史民俗資料館、滋賀県立琵琶湖博物館、静岡市東海道広重美術館、昭和のくらし博物館、瀬戸内海歴史民俗資料館、仙台市博物館、台東区立中央図書館、田中本家博物館、たばこと塩の博物館、千葉県立中央博物館、千代田区立日比谷図書文化館、千代田区立四番町歴史民俗資料館、土浦市立美術館、東京国立博物館、東京都公文書館、東北歴史博物館、徳島県立博物館、栃木県立博物館、長崎原爆資料館、奈良県立橿原考古学研究所、奈良文化財研究所、鳴門市ドイツ館、新潟県立歴史博物館、西陣織物館、根津美術館、東村山ふるさと歴史館、兵庫県立歴史博物館、広島県立歴史博物館、福岡市博物館、福島県立博物館、古河歴史博物館、北海道開拓記念館、北海道博物館、町田市立博物館、松戸市立博物館、松本市立博物館、ミュージアムパーク茨城県自然博物館、山形県立博物館、山梨県立博物館、横浜開港資料館、リアス・アーク美術館、陸前高田市立海と貝のミュージアム

（民間企業・団体）23 団体

イパレット、医療法人社団爽秋会岡部医院、開発設計コンサルタント建築事業部、株式会社鹿島建設、株式会社中日本建築コンサルタント、京都高度技術研究所、国際浮世絵学会、古代の森研究舎、小堀鐸二研究所、産業技術総合研究所、地震予知総合研究振興会、情報通信研究機構電磁波計測研究所、森林総合研究所、世界人権問題研究センター、旅の文化研究所、電力中央研究所、東京都歴史文化財団、東大寺史研究所、日仏美術学会、野田さくらそう会、パレオ・ラボ、文化財保存修復スタジオ、木製彫刻文化財保存修復研究所

（大学共同利用機関）5 機関

国際日本文化研究センター、国文学研究資料館、国立情報学研究所、国立民族学博物館、総合地球環境学研究所

（その他）23 機関

始良市教育委員会、熱海市教育委員会、伊豆の国市観光文化局、大分市教育委員会、神奈川県立金沢文庫、滋賀県文化財保護協会、関市教育委員会、高崎市教育委員会、東京文化財研究所、遠野文化研究センター、土木研究所、富加町教育委員会、農業環境技術研究所、農村工学研究所、防衛大学校、本庄市教育委員会、宮城県多賀城跡調査研究所、宮古島市教育委員会、教育局博物館市史編さん室、甲賀市教育委員会、とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター、日本学術振興会、坂戸市教育委員会

4-2. 国文学研究資料館

4-2-A：共同研究者の所属機関の内訳

研究課題 件数	共同 研究者数	共同研究者の所属機関の内訳								
		自機関	国立大学	大学共同 利用機関	公立大学	私立大学	公的機関	民間機関	外国機関	その他
58	749	178	145	28	20	227	43	28	57	23

4-2-B：共同研究者所属機関一覧

（国立大学）43 機関

茨城大学、愛媛大学、大阪大学、岡山大学、お茶の水女子大学、鹿児島大学、金沢大学、岐阜大学、九州大学、京都大学、熊本大学、神戸大学、埼玉大学、佐賀大学、静岡大学、島根大学、上越教育大学、信州大学、総合研究大学院大学、千葉大学、筑波大学、電気通信大学、東京学芸大学、東京学芸大、東京工業大学、東京大学、東北大学、富山大学、長崎大学、奈良女子大学、新潟大学、一橋大学、弘前大学、広島大学、福岡教育大学、福島大学、北海道教育大学、三重大学、山形大学、山口大学、山梨大学、横浜国立大学、和歌山大学

（公立大学）13 機関

愛知県立大学、大阪市立大学、大阪府立大学、京都府立大学、熊本県立大学、県立広島大学、高知県立大学、高知女子大学（現高知県立大学）、都留文科大学、富山県立大学、公立はこだて未来大学、山口県立大学、尾道市立大学

(私立大学) 103 機関

愛知淑徳大学、青森中央学院大学、青山学院女子短期大学、青山学院大学、茨城キリスト教大学、大阪大谷大学、大妻女子大学、大手前大学、大宮法科大学院大学、学習院大学、学習院女子大学、川村学園女子大学、関西大学、関西学院大学、関東学園大学、北里大学、九州情報大学、京都外国語大学、京都学園大学、京都光華女子大学、京都産業大学、京都女子大学、共立女子短期大学、近畿大学、金城学院大学、久留米大学、慶應義塾大学、皇學館大学、神戸学院大学、神戸松蔭女子学院大学、神戸女子大学、高野山大学、國學院大學、駒澤大学、札幌大谷大学、四国大学、実践女子大学、四天王寺大学、就実大学、聖学院大学、上智大学、上武大学、湘北短期大学、白百合女子大学、成蹊大学、成城大学、聖心女子大学、清泉女子大学、摂南大学、専修大学、相愛大学、大正大学、大東文化大学、中央大学、中京大学、鶴見大学、帝京大学、帝京大学短期大学、帝京平成大学、帝塚山大学、帝塚山学院大学、天理大学、桐蔭法科大学院、東京家政学院大学、東京女子大学、東京成徳短期大学、同志社大学、同朋大学、東洋大学、徳島文理大学、豊橋創造大学、長崎純心大学、名古屋学院大学、奈良大学、新潟国際情報大学、二松學舎大学、新渡戸文化短期大学、日本大学、日本女子大学、ノートルダム清心女子大学、花園大学、比治山大学、兵庫大学、兵庫医科大学、広島国際大学、フェリス女学院大学、佛教大学、法政大学、武蔵大学、武蔵野大学、武蔵野美術大学、明治大学、明星大学、目白大学、森ノ宮医療大学、安田女子大学、四日市大学、立教大学、立正大学、立命館大学、龍谷大学、流通経済大学、早稲田大学

(海外学術研究機関) 51 機関

〈イタリア〉ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学
〈英国〉ケンブリッジ大学、ロンドン大学、大英博物館
〈オランダ〉アムステルダム大学、ライデン国立民族学博物館、ライデン大学
〈カナダ〉ブリティッシュ・コロンビア大学
〈韓国〉明知大学校、高麗大学校、ハンバット国立大学校、世明大学校、又松大学校
〈台湾〉国立成功大学、国立台湾大学、台湾中央研究院
〈中国〉上海圖書館、上海交通大学、西北大学、對外貿易經濟大学、中国美術学院、東華大学、内蒙古師範大学、南京大学、武漢工程大学、復旦大学、北京外国語大学、北京大学、北京中医薬大学
〈ドイツ〉フランクフルト大学、マックス・プランク研究所
〈ニュージーランド〉オークランド大学、オタゴ大学
〈フランス〉コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所、パリ第7大学、フランス国立科学研究センター、フランス国立日本研究センター
〈米国〉カリフォルニア大学、コロラド大学、コロンビア大学、サンタクララ大学、シカゴ美術館、ニューヨーク州立大学、ニューヨーク州立大学ビンガムトン校、ニューヨーク大学アブダビ校、ブランドイス大学、メトロポリタン美術館、ランダー大学
〈ベトナム〉ベトナム社会科学アカデミー
〈ポルトガル〉リスボン新大学
〈マレーシア〉ジョージタウン大学

(政府・自治体) 3 機関

文部科学省、宮内庁、神奈川県藤沢市

(小・中・高等学校、高等専門学校、専門学校等) 18 校

明石工業高等専門学校、有明工業高等専門学校、大分県立芸術緑丘高等学校、開智中学校・高等学校、

神戸市立工業高等専門学校、慶應義塾横浜初等部、駒場東邦中高等学校、静岡学園高等学校、静岡県富士見高等学校、豊田工業高等専門学校、都立中野工業高等学校、都立西高等学校、本郷学園中学高等学校、松江工業高等専門学校、森ノ宮医療学園専門学校、米子工業高等専門学校、立教新座中学校・高等学校、洛星高等学校

（博物館・美術館・資料館・図書館等）20 機関

出光美術館、大分県立先哲史料館、神奈川県立歴史博物館、神奈川県立金沢文庫、京都府立総合資料館、京都府立図書館、五島美術館、埼玉県立文書館、台東区立中央図書館、高岡市万葉歴史館、土浦市立博物館、手銭記念館、富山県立高志の国文学館、長崎歴史文化博物館、広島県立文書館、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館、山口県文書館、大和文華館、陽明文庫、和歌山県立博物館

（民間企業・団体）9 団体

株式会社 PFU、国際浮世絵学会、情報通信研究機構、序跋研究会、凸版印刷株式会社、成田山仏教研究所、人文情報学研究所、本願寺史料研究所、龍泉院

（大学共同利用機関）5 機関

国際日本文化研究センター、国立極地研究所、国立国語研究所、国立情報学研究所、国立歴史民俗博物館

（その他）8 機関

国立文化財機構東京文化財研究所、朝鮮大学校、長野市教育委員会、防衛省防衛研究所、防衛大学校、放送大学、北海道立アイヌ民族文化研究センター、松代文化施設等管理事務所

4-3. 国立国語研究所

4-3-A：共同研究者の所属機関の内訳

研究課題 件数	共同 研究者数	共同研究者の所属機関の内訳								
		自機関	国立大学	大学共同 利用機関	公立大学	私立大学	公的機関	民間機関	外国機関	その他
44	1,071	140	385	26	41	299	24	5	97	54

（国立大学）60 機関

愛知教育大学、秋田大学、茨城大学、岩手大学、宇都宮大学、愛媛大学、大分大学、大阪大学、岡山大学、小樽商科大学、お茶の水女子大学、鹿児島大学、金沢大学、北見工業大学、岐阜大学、九州大学、京都教育大学、京都工芸繊維大学、京都大学、熊本大学、群馬大学、高知大学、神戸大学、埼玉大学、佐賀大学、滋賀大学、静岡大学、信州大学、千葉大学、筑波大学、東京外国語大学、東京海洋大学、東京学芸大学、東京工業大学、東京大学、東北大学、徳島大学、富山大学、名古屋工業大学、名古屋大学、奈良先端科学技術大学院大学、鳴門教育大学、新潟大学、一橋大学、弘前大学、広島大学、福井大学、福岡教育大学、福島大学、北陸先端科学技術大学院大学、北海道教育大学、北海道大学、三重大学、室蘭工業大学、山形大学、山口大学、山梨大学、横浜国立大学、琉球大学、和歌山大学

(公立大学) 20 機関

愛知県立芸術大学、愛知県立大学、会津大学、岩手県立大学、大阪府立大学、尾道市立大学、京都府立大学、熊本県立大学、群馬県立女子大学、県立広島大学、神戸市外国語大学、公立はこだて未来大学、国際教養大学、静岡県立大学、首都大学東京、新潟県立大学、広島市立大学、福岡県立大学、福岡女子大学、大月市立大月短期大学

(私立大学) 113 機関

愛知学院大学、愛知淑徳大学、愛知大学、青山学院大学、跡見学園女子大学、いわき明星大学、宇都宮共和大学、追手門学院大学、桜美林大学、大阪学院大学、大阪女学院大学、大阪保健医療大学、大妻女子大学、沖縄国際大学、沖縄大学、学習院大学、関西外国語大学、関西国際大学、関西大学、関西学院大学、神田外国語大学、九州共立大学、共愛学園前橋国際大学、京都外国語大学、京都光華女子大学、京都産業大学、近畿大学、慶應義塾大学、恵泉女学園大学、甲南女子大学、甲南大学、神戸学院大学、神戸夙川学院大学、神戸松蔭女子学院大学、神戸女学院大学、神戸女子大学、國學院大学、相模女子大学、札幌学院大学、札幌大学、志學館大学、実践女子大学、実践女子短期大学、就実大学、上智大学、湘南工科大学、昭和音楽大学、昭和女子大学、相山女学園大学、成城大学、聖心女子大学、清泉女子大学、聖マリアンナ医科大学、専修大学、大同大学、大東文化大学、拓殖大学、中京大学、津田塾大学、鶴見大学、帝塚山大学、天理大学、東亜大学、東京国際大学、東京女子大学、同志社女子大学、同志社大学、東北工業大学、東北学院大学、東洋学園大学、東洋大学、常葉学園大学、常葉大学、長崎外国語大学、名古屋外国語大学、名古屋学院大学、奈良大学、南山大学、二松學舎大学、日本女子大学、日本大学、ノートルダム清心女子大学、花園大学、姫路獨協大学、弘前学院大学、広島経済大学、広島国際学院大学、広島国際大学、広島修道大学、広島女学院大学、福岡女学院大学、福岡大学、文京学院大学、文教大学、別府大学、法政大学、北星学園大学、北海学園大学、松山大学、松山東雲女子大学、美作大学、武庫川女子大学、明海大学、明治学院大学、明治大学、安田女子大学、立教大学、立正大学、立命館大学、龍谷大学、麗澤大学、和光大学、早稲田大学

(海外学術研究機関) 66 機関

〈イタリア〉ナポリ東洋大学

〈インド〉ハイデラバード英語外国語大学

〈英国〉オックスフォード大学、オックスフォード・ブルックス大学、シェフィールド大学、バーミンガム大学、ランカスター大学

〈オーストラリア〉ニューイングランド大学、メルボルン大学、モナシュ大学

〈カナダ〉トロント大学

〈ケニア〉西アフリカカトリック大学

〈韓国〉延世大学校、慶一大学校、啓明大学校、崇実大学校、聖潔大学校、ソウル大学校

〈キルギス〉キルギス国立民族大学

〈シンガポール〉シンガポール国立大学

〈フィンランド〉ヘルシンキ大学

〈スペイン〉バルセロナ自治大学

〈スロベニア〉リュブリャナ大学

〈タイ〉タマサート大学、チュラロンコーン大学

〈台湾〉国立東華大学、国立台湾大学、国立政治大学

〈中国〉内蒙古大学、延辺大学、華僑大学、天津大学、吉林華僑外国語学院、北京外国語大学、北京日

本学研究センター

- 〈ドイツ〉マックス・プランク進化人類学研究所、ミュンヘン大学、ヨハネス・ゲーテンベルク大学（マインツ大学）
- 〈ニュージーランド〉オークランド大学
- 〈フランス〉パリ第7大学、フランス国立科学研究センター、ボルドー第3大学、リヨン第2大学
- 〈米国〉イースタン・ミシガン大学、インディアナ大学、オハイオ州立大学、カリフォルニア大学、サンフランシスコ州立大学、ジョージア工科大学、ジョージタウン大学、デューク大学、デラウェア大学、ハーバード大学、ハワイ大学、ピッツバーグ大学、プリンストン大学、ペンシルベニア大学、モンタナ大学、ユタ大学、ラトガース大学、ワシントン大学
- 〈ポーランド〉アダム・ミツキエヴィチ大学、ワルシャワ大学
- 〈香港〉香港中文大学
- 〈マカオ〉マカオ大学
- 〈ロシア〉サハリン州立郷土博物館

（政府・自治体）1 機関

文部科学省

（小・中・高等学校、高等専門学校、専門学校等）5 校

岐阜工業高等専門学校、呉工業高等専門学校、神戸市立工業高等専門学校、仙台高等専門学校、中央大学附属高等学校

（博物館・美術館・資料館・図書館等）1 機関

北海道立アイヌ民族文化研究センター

（民間企業・団体）5 機関

NHK 放送文化研究所、株式会社はてな、グーグル株式会社、計量計画研究所、人文情報学研究所

（大学共同利用機関）3 機関

統計数理研究所、国立情報学研究所、国立民族学博物館

（その他）5 機関

科学技術振興機構、国際交流基金、情報通信研究機構、理化学研究所、防衛大学校

4-4. 国際日本文化研究センター

4-4-A：共同研究者の所属機関の内訳

研究課題 件数	共同 研究者数	共同研究者の所属機関の内訳								
		自機関	国立大学	大学共同 利用機関	公立大学	私立大学	公的機関	民間機関	外国機関	その他
48	1,605	337	321	25	58	512	60	88	108	96

4-4-B: 共同研究者所属機関一覧

(国立大学) 52 機関

愛知教育大学、秋田大学、茨城大学、岩手大学、宇都宮大学、愛媛大学、大阪教育大学、大阪大学、岡山大学、お茶の水女子大学、帯広畜産大学、鹿児島大学、岐阜大学、九州工業大学、九州大学、京都大学、京都工芸繊維大学、熊本大学、高知大学、神戸大学、埼玉大学、佐賀大学、静岡大学、信州大学、政策研究大学院大学、総合研究大学院大学、千葉大学、筑波大学、東京大学、東京外国語大学、東京学芸大学、東京芸術大学、東京工業大学、東北大学、徳島大学、富山大学、長崎大学、名古屋大学、奈良女子大学、新潟大学、一橋大学、兵庫教育大学、弘前大学、広島大学、福井大学、北海道大学、宮城教育大学、山形大学、山口大学、横浜国立大学、琉球大学、和歌山大学

(公立大学) 26 機関

愛知県立大学、愛知県立芸術大学、会津大学、大分県立芸術文化短期大学、大阪市立大学、大阪府立大学、金沢美術工芸大学、北九州市立大学、京都市立芸術大学、京都府立大学、群馬県立女子大学、高知県立大学、滋賀県立大学、静岡文化芸術大学、島根県立大学、首都大学東京、都留文科大学、富山県立大学、長岡造形大学、名古屋市立大学、奈良県立大学、福井県立大学、福岡女子大学、宮崎公立大学、前橋工科大学、横浜市立大学

(私立大学) 167 機関

愛知学院大学、愛知大学、青森中央学院大学、青山学院女子短期大学、青山学院大学、秋田看護福祉大学、亜細亜大学、跡見学園女子大学、岩手医科大学、追手門学院大学、桜美林大学、大阪大谷大学、大阪学院大学、大阪観光大学、大阪産業大学、大阪樟蔭女子大学、大谷大学、大妻女子大学、大手前大学、岡崎女子大学、沖縄キリスト教学院大学、学習院女子大学、学習院大学、活水女子大学、神奈川大学、関西大学、関西学院大学、環太平洋大学、関東学院大学、関東学園大学、畿央大学、岐阜女子大学、九州産業大学、京都外国語大学、京都学園大学、京都産業大学、京都女子大学、京都精華大学、京都造形芸術大学、京都橘大学、京都西山短期大学、京都美術工芸大学、京都文教大学、共立女子大学、杏林大学、近畿大学、金城学院大学、国立音楽大学、熊本学園大学、敬愛大学、慶應義塾大学、皇學館大学、甲南女子大学、甲南大学、神戸学院大学、神戸芸術工科大学、神戸国際大学、神戸松蔭女子学院大学、神戸女学院大学、神戸女子大学、高野山大学、國學院大學、国際基督教大学、国際武道大学、国士舘大学、駒澤女子大学、駒沢女子大学、駒澤大学、佐賀女子短期大学、札幌大谷大学、就実大学、秀明大学、十文字学園女子大学、淑徳大学、尚絅大学、城西国際大学、上智大学、女子美術大学、白百合女子大学、仁愛大学、相山女学園大学、鈴鹿短期大学、成安造形大学、聖学院大学、成蹊大学、成城大学、清泉女子大学、西南学院大学、聖マリアンナ医科大学、摂南大学、専修大学、崇城大学、大正大学、大東文化大学、玉川大学、多摩大学、多摩美術大学、千葉工業大学、中央学院大学、中央大学、中京大学、中部大学、津田塾大学、帝京大学、帝塚山学院大学、帝塚山大学、天理大学、東海大学、東京医療保健大学、東京経済大学、東京女子医科大学、東京女子大学、東京福祉大学、東京理科大学、同志社女子大学、同志社大学、桐朋学園芸術短期大学、東北公益文科大学、東洋大学、長崎外国語大学、長崎純心大学、長野大学、名古屋学院大学、名古屋文化短期大学、奈良大学、南山大学、新潟国際情報大学、二松學舎大学、日本映画大学、日本女子大学、日本大学、日本文理大学、ノートルダム清心女子大学、羽衣国際大学、花園大学、阪南大学、フェリス女学院大学、福岡女学院大学、福岡大学、福山大学、藤女子大学、富士常葉大学、佛教大学、文教大学、別府大学、法政大学、北海学園大学、宮城学院女子大学、明星大学、武庫川女子大学、武蔵大学、武蔵野大学、明海大学、明治学院大学、明治大学、名城大学、目白大学、桃山学院大学、盛岡大学、山梨学院大学、立教大学、立命館大学、龍谷大学、ルーテル学院大学、

麗澤大学、和光大学、早稲田大学

(海外学術研究機関) 97 機関

〈イタリア〉イタリア国立東方学研究所、ヴェネチア大学

〈インドネシア〉東アジア・ASEAN 経済研究センター

〈英国〉ロンドン大学

〈オランダ〉ライデン大学

〈カナダ〉カルトン大学、カルガリー大学、コンコルディア大学、ビクトリア大学

〈シンガポール〉シンガポール国立大学

〈タイ〉スアンスナント・ラチャパット大学、チュラロンコーン大学

〈ドイツ〉ヴェルツブルク大学、ケルン大学、テュービンゲン大学、ハイデルベルク大学、ハノーヴァー哲学研究所、ハンブルグ大学、ハンブルク大学人文学部アジア・アフリカ研究所

〈ニュージーランド〉オタゴ大学、ワイカト大学

〈ブラジル〉サンパウロ人文科学研究所、サンパウロ大学、ブラジリア大学

〈フランス〉ディドロ大学、パリ・ラヴィレット国立高等建築学校、パリ国立建築大学ラヴィレット校、パリ第七大学、フランス外務省・国立科学研究センター、フランス極東学院、フランス国立科学研究センター、フランス国立高等研究院、フランス国立日本研究センター、リール国立高等建築学校

〈ベトナム〉フエ外国語大学、ベトナム社会科学院漢喃研究所

〈ポルトガル〉リスボン大学

〈韓国〉ソウル国立大学環境大学院、ソウル市立大学校、ソウル市立大学校ソウル学研究所、ソウル大学校、ソウル大学校奎章閣韓国学研究院、蔚山大学校、延世大学校、釜山大学校、韓国外国語大学校、韓国学中央研究院、韓国教員大学校、慶北大学校、慶熙大学校、高麗大学重細亜問題研究所、高麗大学校、国民大学校、仁済大学校、成均館大学校、檀国大学校、中央大学校、東亜大学校、嶺南大学校

〈香港〉香港城市大学、香港理工大学

〈台湾〉国立成功大学、国立台湾師範大学、国立臺北教育大学台湾文化研究所、清雲科技大学、台湾大学、台湾中央研究院台湾史研究所、中央研究院

〈中国〉華東師範大学、清華大学、中国広西桂林電子科技大学外国語学院、中国上海華東師範大学、中山大學、天津大学、東北師範大学、同済大学、南京大学、武漢大学、復旦大学、北京外国語大学、北京師範大学、北京大学

〈米国〉ヴァンダービルト大学、ウィリアム・バターソン大学、カリフォルニア州立大学、グアム大学、コーネル大学、コロンビア大学、スタンフォード大学、テンプル大学、ハーバード大学、バックネル大学、ハワイ大学、フェアフィールド大学、ペンシルバニア大学、メリーランド大学

(政府・自治体) 10 機関

環境省、経済産業省、財務省、水産庁、総務省、内閣府、中小企業庁、平戸市、防衛省、北海道財務局

(小・中・高等学校、高等専門学校、専門学校等) 11 校

灘高校、武蔵高等学校・中学校、大阪府立工業高等専門学校、沖縄工業高等専門学校、高知工業高等専門学校、淳心学院中学・高等学校、苫小牧工業高等専門学校、大阪医療福祉専門学校、奈良県病院協会看護専門学校、舞鶴工業高等専門学校、大阪府立豊中支援学校

（博物館・美術館・資料館・図書館等）26 団体

アジア歴史資料センター、石川県立歴史博物館、大阪歴史博物館、大原美術館、外務省外交史料館、京都国立博物館、高麗博物館、国立公文書館、国立国会図書館、静岡県立美術館、吹田市立博物館、戦没画学生慰霊美術館「無言館」、国立近代美術館、東京国立博物館、那覇市歴史博物館、奈良県立万葉文化館、日南町美術館、姫路市立美術館、兵庫県立歴史博物館、福井県文書館、松浦史料博物館／平戸オランダ商館、万葉古代学研究所、宮沢賢治記念館、陽明文庫、吉野作造記念館、冷泉家時雨亭文庫

（民間企業・団体）69 団体

ICS カレッジオブアーツ、JSR 株式会社、NPO ものづくり生命文明機構、NPO 市民文化財ネットワーク鳥取、NPO 法人なにわ創生塾、NPO 法人睡眠文化研究会、NTT コミュニケーション科学基礎研究所、PHP 研究所、SD、edition 螺旋社新社、あの津技研、えとせとらレコード、ぴあ、ものづくり生命文明機構、アグリポピュレーションジャパン、アマタホールディングス株式会社、イービーエス産興株式会社、エミリオ森口クリニック、オフィスゼンリユウ、クリエイティブ・ワイズ、トシ・コミュニケーションズ、バードライフ・インターナショナル・アジア・ディビジョン、ヘルスクリック、ホーム社、マキノ技術部、モリエコロジー、ユニバーサルデザイン総合研究所、ロータスブルーム、中国研究所、中村元東方研究所、乃村工藝社、京都新聞社、京都新聞総合研究所、京都芸術センター、会宝産業、古代学協会、国際リサイクル教育センター、国際貿易投資研究所、孫中山記念会、建築研究協会、後藤・安田記念東京都市研究所、徳間書店アニメ・コミック編集局、新日本製鐵株式会社、日仏会館フランス事務所、日刊工業新聞社、日本エネルギー経済研究所、日本商品委託者保護基金、日独文化研究所、旭リサーチセンター、明光義塾田原教室、明治神宮国際神道文化研究所、東京市政調査会、東方研究会、東洋哲学研究所、毎日新聞、泉鏡花研究会、特定非営利活動法人地域文化資源ネットワーク、王子製紙、真和総合法律事務所、秩父今宮神社、積水インテグレートドリサーチ、第一三共、経団連自然保護協議会、読売新聞、読売日本テレビ文化センター、資源・環境戦略設計事務所、軍事史学会、阪急文化財団、電通

（大学共同利用機関）7 機関

情報・システム研究機構、国立情報学研究所、国立遺伝学研究所、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館

（その他）13 機関

愛媛県警察本部、大阪市博物館協会、科学技術振興機構、国立精神・神経医療研究センター、国立文化財機構、新エネルギー・産業技術総合開発機構、森林総合研究所、東京都中央区教育委員会、奈良文化財研究所、物質・材料研究機構、防衛省防衛研究所、防衛大学校、放送大学

4-5. 総合地球環境学研究所

4-5-A：共同研究者の所属機関の内訳

研究課題 件数	共同 研究者数	共同研究者の所属機関の内訳								
		自機関	国立大学	大学共同 利用機関	公立大学	私立大学	公的機関	民間機関	外国機関	その他
46	2,741	240	1,081	39	86	340	195	91	619	50

4-5-B：共同研究者所属機関一覧

（国立大学）68 機関

愛知教育大学、秋田大学、茨城大学、岩手大学、宇都宮大学、愛媛大学、大分大学、大阪教育大学、大阪大学、岡山大学、お茶の水女子大学、帯広畜産大学、香川大学、鹿児島大学、金沢大学、北見工業大学、岐阜大学、九州大学、京都教育大学、京都工芸繊維大学、京都大学、熊本大学、群馬大学、高知大学、神戸大学、佐賀大学、滋賀大学、静岡大学、島根大学、信州大学、政策研究大学院大学、総合研究大学院大学、千葉大学、筑波大学、東京外国語大学、東京海洋大学、東京学芸大学、東京工業大学、東京大学、東京農工大学、東北大学、徳島大学、鳥取大学、富山大学、長崎大学、名古屋工業大学、名古屋大学、奈良教育大学、奈良女子大学、鳴門教育大学、新潟大学、一橋大学、弘前大学、広島大学、福井大学、福島大学、北陸先端科学技術大学院大学、北海道教育大学、北海道大学、三重大学、宮城教育大学、宮崎大学、山形大学、山口大学、山梨大学、横浜国立大学、琉球大学、和歌山大学

（公立大学）29 機関

愛知県立大学、青森県立保健大学、秋田県立大学、秋田公立美術大学、石川県立大学、大阪市立大学、大阪府立大学、北九州市立大学、京都府立大学、高知県立大学、神戸市外国語大学、国際教養大学、公立鳥取環境大学、滋賀県立大学、島根県立大学、下関市立大学、首都大学東京、都留文科大学、兵庫県立大学、福井県立大学、富山県立大学、横浜市立大学、名古屋市立大学、名寄市立大学、福島県立医科大学、宮城大学、宮崎公立大学、名桜大学、山口県立大学

（私立大学）128 機関

愛知医科大学、愛知大学、青山学院女子短期大学、青山学院大学、亜細亜大学、石巻専修大学、江戸川大学、奥羽大学、桜美林大学、大阪医科大学、大阪大谷大学、大阪学院大学、大阪経済法科大学、大阪樟蔭女子大学、大手前大学、岡山理科大学、沖縄国際大学、沖縄大学、学習院大学、鹿児島国際大学、神奈川大学、金沢工業大学、鎌倉女子大学、関西大学、関西学院大学、関東学院大学、岐阜経済大学、共愛学園前橋国際大学、共栄大学、京都外国語大学、京都学園大学、京都精華大学、京都造形芸術大学、京都橘大学、近畿大学、熊本学園大学、敬愛大学、慶應義塾大学、工学院大学、皇學館大学、甲子園大学、甲南女子大学、神戸夙川学院大学、神戸女子大学、高野山大学、國學院大学、国際基督教大学、国士舘大学、駒澤大学、サイバー大学（株式会社立）、札幌大谷大学、札幌大学、四国学院大学、秀明大学、上智大学、昭和女子大学、成蹊大学、星槎大学、成城大学、西南学院大学、専修大学、仙台白百合女子大学、創価大学、玉川大学、中央学院大学、中央大学、中京大学、中部大学、筑波学院大学、敦賀短期大学、帝京大学、天理大学、東海大学、東京医療保健大学、東京経済大学、東京情報大学、東京女子医科大学、東京農業大学、東京理科大学、同志社女子大学、同志社大学、東邦大学、東北学院大学、東北芸術工科大学、東北公益文科大学、東北文化学園大学、東洋大学、常磐大学、常葉大学、長野大学、名古屋芸術大学、名古屋産業大学、名古屋文理大学、奈良大学、南山大学、新潟医療福祉大学、西九州大学、日本赤十字広島看護大学、日本大学、日本福祉大学、人間環境大学、阪南大学、兵庫医科大学、兵庫医療大学、広島女学院大学、福岡大学、福山大学、藤女子大学、藤田保健衛生大学、富士常葉大学、平安女学院大学、別府大学、法政大学、放送大学、北星学園大学、北海学園大学、宮城学院女子大学、明治学院大学、明治大学、名城大学、四日市大学、酪農学園大学、立教大学、立正大学、立命館大学、龍谷大学、流通科学大学、早稲田大学

（海外学術研究機関）253 機関

〈アラブ首長国連邦〉アブダビ大学、シャルジャ大学

〈アルジェリア〉 アドラル大学、アルジェリア科学技術大学、クバ国立高等師範大学、国立生物資源開発センター

〈イスラエル〉 ヘブライ大学

〈イタリア〉 国際連合食糧農業機関水産養殖局、伝統的知識世界銀行

〈インド〉 クマウン大学、サヤジラオ大学、シッキム国立大学、ジャワハルラール・ネルー大学、ダージリン教育・研究・開発協会、タミルナドゥ農業大学、デカン大学、パンジャブ大学、ビルバル・サハニ古植物学研究所、マハラジャ・サヤジラオ大学、ラジャスタン・ヴィディヤपीード大学、ラジャスタン研究所、国際水管理研究所、森林研究所、馬事文化研究所、北ベンガル大学、民俗知研究所、ラーンチー大学

〈インドネシア〉 インドネシア科学院、インドネシア国営電力会社、インドネシア政府、インドネシア大学、インドネシア陸水研究所、ウダヤナ大学、ハサヌディン大学、バンドゥン工科大学、ボゴール農科大学、マトラマツ・チャクラ・チャンギ社、リアウ大学

〈エジプト〉 エジプト環境省、エジプト国立水研究センター

〈エストニア〉 タルトゥ大学

〈オーストラリア〉 オーストラリア国立大学、メルボルン大学、南オーストラリア博物館

〈オーストリア〉 ウィーン工科大学、国際原子力機関

〈オランダ〉 ライデン大学

〈カザフスタン〉 カザフスタン教育科学省歴史・民族学研究所、カザフスタン考古学研究所、カザフスタン動物学研究所、カザフスタン遊牧文化遺産研究所、カザフ土壌・農芸化学研究所

〈カナダ〉 アルバータ大学、エコヘルスコンサルティング、サイモンフレイザー大学、サスカチュワン大学、セント・フランシス・ザビエル大学、テラリング（国際 NGO 団体）、トロント大学、ブリティッシュ・コロンビア大学、ブリティッシュ・コロンビア天然資源事業省、ブリティッシュコロンビア・オイル・ガス委員会、マギル大学

〈韓国〉 ソウル大学校、釜山国立大学校、公州大学校、済州大学校、新羅大学校、全南大学校、木浦大学校、慶北大学校、慶熙大学校、国土研究院

〈ケニア〉 ケニア国立博物館

〈サウジアラビア〉 サウジアラビア野生生物保護委員会

〈ザンビア〉 ザンビア大学、ザンビア農業研究所

〈シンガポール〉 シンガポール国立大学、南洋理工大学

〈スイス〉 チューリッヒ大学

〈スーダン〉 ゲジラ大学、スーダン科学技術大学、スーダン農業研究機構、スーダン農業省、紅海大学

〈スペイン〉 ビーゴ大学、ボンペウ・ファブラ大学

〈スリランカ〉 スリジャヤワルダナプラ大学

〈セネガル〉 セネガル共和国保健予防医学省

〈タイ〉 カセサート大学、タイ王国天然資源・環境省地下水資源局、タイ王国東部水産研究所、タイ王国保険省、タイ水産局東部海域海洋資源研究開発局、タイ東部海洋資源開発センター、タイ農業局、チュラロンコーン大学、東南アジア漁業開発センター、マヒドン大学、メチオ大学

〈台湾〉 国立台湾大学、中央研究院

〈タンザニア〉 ソコイネ農業大学

〈チリ〉 カトリカ大学

〈デンマーク〉 コペンハーゲン大学

〈ドイツ〉 ヴェストファーレン・ヴィルヘルム大学、テュービンゲン大学、ドイツ考古学研究所、ドイツ

持続可能性高等研究所、マックス・プランク気象研究所、レイチェル・カーソン環境社会研究センター

〈トルコ〉 アドゥヤマン大学、カラピナル農業会議所、ハラン大学、国家水利総局、南東アナトリア開発計画庁、ユズンジュユイル大学

〈ノルウェー〉 ベルゲン大学

〈パキスタン〉 カイルプル大学

〈パプアニューギニア〉 パプアニューギニア大学、ブーゲンヴィル自治政府、オーストラリア海外援助プログラム

〈パラオ〉 パラオ国際サンゴ礁センター

〈バングラデシュ〉 アレルギー臨床免疫学研究所、国際下痢症研究所、国立疫学疾病対策研究所

〈フィジー〉 南太平洋大学

〈フィリピン〉 ア克蘭州立大学、漁業・水産養殖開発統合サービス、サントトーマス大学、ソルソゴン州立大学、フィリピン原子力研究所、フィリピン大学、マニラ首都圏上下水道機構、マラボン市、ラグナ湖開発公社、国家水資源評議会、東南アジア漁業開発センター

〈フィンランド〉 ヘルシンキ大学

〈ブラジル〉 トカンティス国立大学

〈フランス〉 ヴェルサイユ・サン・カンタン・アン・イヴリーヌ大学、ソルボンヌ大学、トゥール大学、パリ大学、フランス東洋先史学研究所、ブレーズ・パスカル大学

〈英国〉 アバディーン大学、イーストアングリア大学、オックスフォード大学、海洋気候変動センター、環境・漁業・水産養殖科学センター、ケンブリッジ大学、セインズベリー日本藝術文化研究所、ノッティンガム大学、プラネタリー・バウンダリー・イニシアティブ、ブラッドフォード大学、ヨーク大学、レスター大学、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス、ロンドン大学

〈米国〉 アイダホ大学、アメリカ国立標準技術研究所、アメリカ地質調査所、アメリカ領サモア国立海洋自然保護区、アラスカ大学、アリゾナ州立大学、イェール大学、インディアナ大学、ウィスコンシン大学、エコリテラシーセンター、オハイオ州立大学、カトリック救済サービス、カリフォルニア公共政策研究所、カリフォルニア大学、グローバル・カタストロフィック・リスク・インスティテュート、グローバル・フットプリント・ネットワーク、ケンタッキー大学、サウスカロライナ大学、サンフランシスコ州立大学、ジョージ・メイソン大学、スタンフォード大学、テューレーン大学、ニュージャージー・インスティテュート・オブ・テクノロジー、バージン諸島大学、ハーバード大学、ハワイ大学、フロリダ州立大学、フロリダ大学、保全休耕向上プログラム、ポートランド州立大学、ミシガン州立大学、ミシガン大学、水文化研究所、南カリフォルニア大学、ミネソタ大学、メリーランド大学、モート海洋研究所、モントレー国際大学、ワシントン州立大学、ワシントン大学、ワラワラ郡保全区

〈ベトナム〉 ベトナム国会大学

〈ベネズエラ〉 ベネズエラ科学研究所

〈ベルギー〉 ルーヴァン・カトリック大学

〈香港〉 香港理工大学

〈マラウイ〉 マラウイ大学

〈マレーシア〉 サラワク州森林研究所、サラワク大学、マレーシア科学大学

〈モンゴル〉 モンゴル科学アカデミー、モンゴル国立科学技術大学、モンゴル水文気象局

〈ラオス〉 ラオスサワンナケート県、ラオス国立公衆衛生研究所、ラオス国立大学、ラオス農林省、国際自然保護連合、国立農業・森林管理研究所、国立農林業研究所

〈ロシア〉ゲ・イ・ネベル提督記念国立海洋大学、ヤクーツク大学、ロシア科学アカデミー、ロシア極東連邦大学、北東連邦大学、都市計画と建築歴史の研究所、北方生物圏問題研究所
〈ロシア連邦サハ共和国〉科学アカデミー、科学アカデミー人文科学研究所
〈中国〉雲南社会科学院、雲南省健康と発展研究会、雲南大学、河海大学、華中科学技術大学鄉村治理研究中心、吉林大学、江蘇省農業科学院糧食作物研究所、山西大学、上海交通大学、上海市農業科学院、上海大学、新疆ウイグル自治区文物局、新疆文物考古研究所、中国科学院、中国社会科学院、中国環境保護部科学技術委員会、中国人民大学、中山大学、南京大学、復旦大学、北京協和医科大学、北京師範大学、北京大学、陝西師範大学

（政府・自治体）21 機関

環境省、青森県、大分県、沖縄県、京都府、熊本県、高知県、滋賀県、北海道、西条市、珠洲市、対馬市、白山市、南アルプス市、綾町、奥出雲町、大槌町、日出町、屋久島町、山ノ内町、遊佐町

（小・中・高等学校、高等専門学校、専門学校等）11 校

青森県立八戸東高等学校、青森市立浪岡北小学校、青森市立浪岡小学校、錦城学園高等学校、東京工業高等専門学校、桐朋中学校・高等学校、長野工業高等専門学校、苫小牧工業高等専門学校、福井県立若狭高等学校、明豊高等学校、近畿測量専門学校

（博物館・美術館・資料館・図書館等）21 館

青森県郷土館、天草市立御所浦白亜紀資料館、岩手県立博物館、大阪市立自然史博物館、沖縄県立博物館・美術館、鹿児島県立歴史資料センター黎明館、近畿環境パートナーシップオフィス（きんき環境館）、国立科学博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、静岡県富士市立博物館、吹田市立博物館、東洋文庫、栃木県立文書館、新潟県立環境と人間のふれあい館、新潟県立歴史博物館、函館市縄文文化交流センター、花巻市博物館、福岡県立博物館、ふじのくに地球環境史ミュージアム、北海道開拓記念館、三井文庫

（民間企業・団体）82 団体

IMP、IUCN 日本プロジェクトオフィス、NGO「虹の会」、NPO 使い捨て時代を考える会、NPO 森林再生支援センター、NPO 法人 APAST、NPO 法人 BEPPU PROJECT、NPO 法人 INO、NPO 法人 ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会、NPO 法人九州バイオマスフォーラム、NPO 法人地中熱利用促進協会、NPO 法人日本トルコ交流協会、NPO 法人自然と人間環境研究機構、いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク、やすぎクリニック、アイエムジー、アジア・コンテンツ・センター、アジア保健教育基金、アマモサポーターズ、アースアンドヒューマンコーポレーション、アーツカウンシル東京、イスラーム考古学研究所、コインパス、シーラカンスアンドアソシエーツ、タテヤマスギ研究所、パスコ研究開発センター、ブルーエコロジーリサーチ、プロジェクト「粟」、マングローブ植林行動計画、ミュージックセキュリティーズ、一般社団法人 MIT、体質研究会、八千代エンジニアリング、六角鬼丈計画工房、北方圏古環境研究室、古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク、古環境研究所、国際エメックスセンター、国際耕種株式会社、地球・人間環境フォーラム、奥郷友会、学芸出版、宮城のサル調査会、小倉一夫編集計画研究所、小林写真事務所、島津テクニサーチ、建築商会、損保ジャパン日本興亜リスクマネジメント、新日本環境調査、日本 EIMY 研究所、日本・トルコ協会、日本伝統文化研究所、日本国際民間協力会、日本自然保護協会、日鉄技術情報センター、東方研究会、横須賀市史編さん近代史料調査会、欧亜総合研究所、沖縄県文化振興会、滋賀県文化財保護協会、滋賀県朝日漁業協同組合、火山灰考古学研究所、環境生態工学研究所、環日本海経済研究所、生活クラブ事業連合生活協同組合連

合会、知床財団、福島県有機農業ネットワーク、紀伊國屋書店、自然産業研究所、虹別コロムカいの会、西南日本植物情報研究所、豊生会東苗穂病院、株式会社貞雄、農林中金総合研究所、里山ネットワーク世屋、長尾自然環境財団、電力中央研究所、電通、電通総研、鹿島建設、鹿島建設株式会社技術研究所、里地里山問題研究所

（大学共同利用機関）7 機関

国際日本文化研究センター、国文学研究資料館、国立極地研究所、国立国語研究所、国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館、情報・システム研究機構

（その他）57 団体

愛知県教育・スポーツ振興財団、愛知県埋蔵文化財センター、アジア経済研究所、茨城県霞ヶ浦環境科学センター、大阪府教育委員会、大阪府文化財センター、沖縄県海洋深層水研究所、沖縄県水産業改良普及センター、海洋研究開発機構、加西市教育委員会、神奈川県温泉地学研究所、気象研究所、北上市立埋蔵文化財センター、北見市教育委員会、岐阜県河川環境研究所、京都府埋蔵文化財調査研究センター、久万高原町教育委員会、公益財団法人世界自然保護基金ジャパン、公益財団法人世界自然保護基金ジャパンサンゴ礁保護研究センター、国際協力機構、国際農林水産業研究センター、国際連合大学、国立環境研究所、国立国際医療研究センター、国立社会保障・人口問題研究所、国立文化財機構、国立文化財機構奈良文化財研究所、埼玉県環境科学国際センター、在マレーシア日本国大使館、産業技術総合研究所、滋賀県水産試験場、滋賀県琵琶湖環境科学研究センター、島根県中山間地域研究センター、島根県保健環境科学研究所、森林総合研究所、水産総合研究センター、水産大学校、地球環境戦略研究機関、徳島県立佐那河内いきものふれあいの里、鳥取県教育委員会、土木研究所、内閣府経済社会総合研究所、長野県環境保全研究所、新座市教育委員会、日本原子力研究開発機構、農業・食品産業技術総合研究機構、農業環境技術研究所、農業生物資源研究所、函館市教育委員会、福岡市教育委員会、防衛大学校、防災科学技術研究所、放射線医学総合研究所、北海道教育庁、北海道立総合研究機構、山形県農業総合研究センター、ユネスコ

4-6. 国立民族学博物館

4-6-A：共同研究者の所属機関の内訳

研究課題 件数	共同 研究者数	共同研究者の所属機関の内訳								
		自機関	国立大学	大学共同 利用機関	公立大学	私立大学	公的機関	民間機関	外国機関	その他
111	1,761	344	546	33	73	535	87	31	71	41

4-6-B：共同研究者所属機関一覧

（国立大学）60 機関

愛知教育大学、秋田大学、茨城大学、岩手大学、愛媛大学、大阪大学、岡山大学、小樽商科大学、お茶の水女子大学、香川大学、鹿児島大学、金沢大学、岐阜大学、九州大学、京都教育大学、京都大学、熊本大学、群馬大学、高知大学、神戸大学、埼玉大学、滋賀医科大学、滋賀大学、静岡大学、島根大学、信州大学、総合研究大学院大学、千葉大学、筑波技術大学、筑波大学、東京医科歯科大学、東京外国語大学、東京学芸大学、東京芸術大学、東京工業大学、東京大学、東京農工大学、東北大学、徳島大学、富山大学、長崎大学、名古屋工業大学、名古屋大学、奈良教育大学、奈良女子大学、新潟大学、一橋大

学、広島大学、福岡教育大学、福島大学、北海道大学、北陸先端科学技術大学院大学、三重大学、宮崎大学、山形大学、山口大学、山梨大学、横浜国立大学、琉球大学、和歌山大学

(公立大学) 32 大学

愛知県立大学、青森公立大学、岩手県立大学、大分県立芸術文化短期大学、大阪市立大学、大阪府立大学、岡山県立大学、沖縄県立芸術大学、北九州市立大学、岐阜市立女子短期大学、京都市立芸術大学、群馬県立女子大学、県立広島大学、高知工科大学、神戸市外国語大学、札幌医科大学、滋賀県立大学、静岡県立大学、首都大学東京、高崎経済大学、長崎県立大学、名古屋市立大学、奈良県立大学、兵庫県立大学、県立広島大学、広島市立大学、福井県立大学、福岡女子大学、宮崎県立看護大学、宮崎公立大学、山口県立大学、宮城大学

(私立大学) 179 大学

愛知大学、青森大学、青山学院女子短期大学、青山学院大学、亜細亜大学、芦屋大学、跡見学園女子大学、茨城キリスト教大学、追手門学院大学、桜美林大学、大阪音楽大学、大阪学院大学、大阪薫英女子短期大学、大阪経済大学、大阪経済法科大学、大阪芸術大学、大阪国際大学、大阪工業大学、大阪産業大学、大阪成蹊大学、大谷大学、大妻女子大学、大手前大学、沖縄国際大学、学習院大学、鹿児島純心女子大学、神奈川大学、金沢学院大学、金沢星稜大学、亀田医療大学、川崎医療福祉大学、関西外国語大学、関西外国語大学短期大学部、関西学院大学、関西大学、神田外語大学、関東学院大学、岐阜女子大学、九州栄養福祉大学、京都外国語大学、京都学園大学、京都女子大学、京都精華大学、京都造形芸術大学、京都文教大学、京都文教短期大学、共立女子大学、近畿大学、金城学院大学、姫路大学、久留米大学、敬愛大学、慶應義塾大学、恵泉女学園大学、甲南女子大学、甲南大学、神戸学院大学、神戸国際大学、神戸夙川学院大学、神戸山手大学、國學院大學、国際医療福祉大学、国際基督教大学、国際大学、国士舘大学、駒澤大学、小松短期大学、埼玉工業大学、相模女子大学、札幌大学、四国学院大学、自治医科大学、四天王寺大学、芝浦工業大学、種智院大学、松蔭大学、尚絅学院大学、城西国際大学、上智大学、常磐大学、昭和薬科大学、白百合女子大学、相山女学園大学、鈴鹿医療科学大学、成蹊大学、成城大学、聖心女子大学、清泉女学院大学、清泉女子大学、西南学院大学、摂南大学、専修大学、西南学院大学、園田学園女子大学、太成学院大学、大東文化大学、高千穂大学、拓殖大学、多摩美術大学、筑紫女学園大学、中央大学、中京学院大学、中京大学、中部大学、津田塾大学、帝京科学大学、帝京大学、帝京大学短期大学、帝京短期大学、貞静学園短期大学、帝塚山大学、天使大学、天理大学、東亜大学、東海大学、東京医科大学、東京家政学院大学、東京家政大学、東京経済大学、東京国際大学、東京女学館大学、東京女子大学、東京農業大学、東京福祉大学、東京未来大学、東京理科大学、同志社女子大学、同志社大学、東北学院大学、東北芸術工科大学、東北文化学園大学、東洋英和女学院大学、東洋大学、獨協大学、豊田工業大学、長崎純心大学、名古屋商科大学、奈良大学、南山大学、新潟国際情報大学、二松學舎大學、日本社会事業大学、日本女子大学、日本赤十字北海道看護大学、日本大学、日本福祉大学、東日本国際大学、福岡国際大学、福岡大学、富士常葉大学、佛教大学、文京学院大学、文教大学、別府大学、法政大学、北星学園大学短期大学部、北海学園大学、宮城学院女子大学、明星大学、美作大学、武庫川女子大学、武蔵大学、武蔵野美術大学、明海大学、明治学院大学、明治大学、名城大学、桃山学院大学、盛岡大学、山梨学院短期大学、立教女学院短期大学、立教大学、立正大学、立命館アジア太平洋大学、立命館大学、龍谷大学、ルーテル学院大学、和光大学、早稲田大学

(海外学術研究機関) 187 機関

〈アルゼンチン〉科学技術研究委員会、国立サンマルティン大学

〈インド〉 インド工科大学、インド国立高等研究所、インド視覚芸術大学、デリー大学、ハイデラバード大学、マドラス大学
 〈インドネシア〉 アチェ文化観光局／アチェ津波博物館、インドネシア芸術教育研究所、ベバリ財団、国立インドネシア芸術大学
 〈エジプト〉 大エジプト博物館保存修復センター
 〈エストニア〉 タルト大学
 〈オーストラリア〉 オーストラリア博物館、キャンベルアートセンター、グリフィス大学、シドニー韓人会、メルボルン大学、モナシュ大学、有限会社マイワ・ハンドプリント／マイワ財団、ラトロープ大学・オーストラリア国立ろう文化手話言語学研究所、南オーストラリア州立美術館
 〈オーストリア〉 ウィーン民族学博物館
 〈オランダ〉 アムステルダム大学、デルフト工科大学、トロッペン博物館
 〈カナダ〉 オタワ大学、トロント大学、ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館、マギル大学
 〈グアテマラ〉 カクチケル言語コミュニティ
 〈サモア〉 サモア教育省文化局
 〈ザンビア〉 ルサカ・ナショナル・ミュージアム
 〈ジャマイカ〉 ウェスト・インディーズ大学
 〈シンガポール〉 シンガポール国立大学
 〈スイス〉 ジュネーブ民族誌博物館
 〈スウェーデン〉 ストックホルム東アジア博物館、ストックホルム民族誌博物館、ノルウェー生命科学大学、リンショーピング大学
 〈スペイン〉 パブロ・デ・オラビデ大学
 〈ソロモン諸島〉 ソロモン諸島国立博物館
 〈タイ〉 シリントーン博物館、マハーサラカム大学、マヒドン大学、市民メディア開発研究所／シビックネット・タイランド基金、タンマサート大学
 〈台湾〉 吉貝要文化工作室、故宮博物院、国立交通大学、国立台湾史前文化博物館、国立台湾大学、国立台湾歴史博物館、中央研究院民族学研究所
 〈中国〉 アモイ大学人類学研究院、雲南財經大学、河南大学、吉林大学、玉林師範学院、広東外語外贸大学、黒竜江省民族研究所、上海大学、中央民族大学、中央民族大学中国少数民族研究センター、中国社会科学院、中国社会科学院民族学人類学研究所、中山大学、内蒙古民族大学、北京大学、厦門大学、浙江大学、浙江大学人類学研究所
 〈チリ〉 アドルフォ・イバニェス大学
 〈デンマーク〉 オーフス大学、コペンハーゲン・ビジネススクール、コペンハーゲン王立美術館
 〈ドイツ〉 ビーレフェルト大学、ベルリン国立博物館、ボン大学、マンハイム大学、ミュンスター大学、ロバート・ボッシュ財団医療史研究所
 〈ナイジェリア〉 オバフェミ・アウォロウォ大学
 〈ノルウェー〉 オスロ国際平和研究所
 〈パプアニューギニア〉 パプアニューギニア国立博物館
 〈フィジー〉 フィジー博物館
 〈フィンランド〉 ヘルシンキ大学
 〈ブラジル〉 パラ連邦大学
 〈フランス〉 パリ第5大学、フランス難民及び無国籍者保護局、ボルドー第3大学、レユニオン高等美術学校、国立科学研究センター、社会科学高等研究院、東アジア言語研究センター

〈ブルネイ〉ブルネイ・ダールッサラム大学
 〈ペルー〉ペルー・カトリカ大学、ペルー・カトリック大学、国立サン・マルコス大学
 〈ベルギー〉アントワープ大学、リューベン大学
 〈ボリビア〉ボリビア・カトリカ大学
 〈香港〉香港中文大学
 〈マダガスカル〉アンタナナリヴ大学、アンタナナリヴ大学芸術・考古学博物館
 〈マリ〉マリ共和国文化省
 〈マレーシア〉センター・フォア・オランアスリ・コンサーン
 〈南アフリカ〉ウィットウォーターズ大学
 〈モザンビーク〉モザンビーク聖公会
 〈モンゴル〉ホブド大学、モンゴル国立科学アカデミー、モンゴル国立科学技術大学、モンゴル国立教育大学
 〈ロシア共和国およびロシア連邦加盟国〉サハリン国立総合大学、ロシア科学アカデミー、ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館、ロシア文化研究所、ロシア民族学博物館、国立歴史文学研究所（ロシア連邦アルタイ自治区）、ロシア連邦カルムイック共和国立文化人類学研究所、ロシア連邦トゥヴァ共和国教育文化庁、ロシア連邦トゥヴァ共和国文化遺産保護庁、ロシア連邦トゥヴァ共和国立歴史文学研究所、ロシア連邦ブリヤート共和国立モンゴルチベット仏教研究所、トランスバイカル民族学博物館
 〈英国〉イーストアングリア大学、イーストアングリア大学セインズベリー美術研究所、ウィリアム・アンド・メアリー大学、エジンバラ大学、オープン大学、オックスフォード・ブルックス大学、オックスフォード大学、サセックス大学、スコットランド国立博物館、セントラルランカシャー大学国際手話言語学ろう文化研究所、ダリッジ・ピクチャー・ギャラリー、マイク・エアーズ・デザイン、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス、ロンドン大学、王立美術院、大英博物館
 〈韓国〉ソウル大学校、有限会社アイデアル・エンタテインメント、亜洲大学校、延世大学校、韓国海洋大学校、釜山大学校、韓国学中央研究院、慶尚大学校、江原大学校、国立民俗博物館、仁川大学校、誠信女子大学校、木浦大学校
 〈台湾〉国立中正大学言語学研究所
 〈米国〉アメリカ自然史博物館、アラスカ大学、イエール大学医学大学院、イエール大学、ヴァンダービルト大学、ウィスコンシン大学、オハイオ州立大学、カリフォルニア大学、北テキサス大学、ギャローデット大学、コーネル大学、コロンビア大学、シラキューズ大学、テキサス A&M 大学、デンバー自然科学博物館、ニューヨーク州立大学、ノースウェスタン大学、パーソンズ美術大学、ハーバード大学、パデュー大学、ハワイ大学、ビショップ博物館、ピッツバーグ大学、ヒューストン大学、フォーダム大学、ホピ文化保存局、ルイジアナ州立博物館、国立アフリカ美術館、国立アメリカン・インディアン博物館、東巖文化研究所、北アリゾナ博物館

（政府・自治体）5 機関

外務省、内閣府、文化庁、北海道、宮城県

（小・中・高等学校、高等専門学校、専門学校等）6 校

広島市立阿戸中学校、慶應義塾湘南藤沢中等部、栃木県立学悠館高等学校、都城工業高等専門学校、青森県立盲学校、TECC 語学学校

（博物館・美術館・資料館・図書館等）37 機関

アイヌ民俗博物館、石垣市立八重山博物館、石川県立歴史博物館、伊仙町立歴史民俗資料館、板橋区立郷土資料館、伊丹市昆虫館、今治市大三島美術館、沖縄県立博物館・美術館、帯広百年記念館、北九州市立文学館、京都府立総合資料館、京都文化博物館、原爆の図丸木美術館、高知県立牧野植物園、国立科学博物館、国立西洋美術館、埼玉県立歴史と民俗の博物館、吹田市立博物館、太地町立くじらの博物館、町立萱野茂二風谷アイヌ資料館、東京国立近代美術館、東京都立第五福竜丸展示館、徳之島町文化財保護審議会東北歴史博物館、長崎歴史文化博物館、名古屋市博物館、西陣織物館、兵庫県立歴史博物館、平戸市生月町博物館、広島平和記念資料館、福岡アジア美術館、福島県立博物館、北海道開拓記念館、北海道博物館、北海道立北方民族博物館、三重県立斎宮歴史博物館、美濃加茂市民ミュージアム、野外民族博物館リトルワールド

（民間企業・団体）15 団体

インテック・ジャパン、インフォミーム、エイズ予防財団、M&S システムズ、大阪いずみ市民生活協同組合、大阪市博物館協会大阪文化財研究所東淀川調査事務所、海洋政策研究財団、元興寺文化財研究所、京都服飾文化研究財団、公園財団（公園管理運営研究所）、子ども在宅クリニックあおぞら診療所松戸、コリア NGO センター、生協きたはま診療所、日本鯨類研究所、北海道在宅総合ケア事業団

（大学共同利用機関）5 機関

情報・システム研究機構、国立歴史民俗博物館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所

（その他）39 団体

Plantation、TONIBUNG、アジア女性自立プロジェクト、大阪いずみ市民生活協同組合、大阪府立産業技術総合研究所、群馬県立日本絹の里、国際協力機構、国立感染症研究所、国立文化財機構、国立保健医療科学院、国立文化財機構奈良文化財研究所、在ウズベキスタン日本大使館、滋賀県文化財保護協会、滋賀県立陶芸の森、社会福祉振興・試験センター、千代田区教育委員会、テンプル大学日本校、東京都立松沢病院、東京文化財研究所、東北文化芸術研究所、東洋文庫、名古屋管理職ユニオン、奈良文化財研究所、日本コーヒー文化学会、日本司法支援センター、日本貿易振興機構、日本貿易振興機構アジア経済研究所、農業・食品産業技術総合研究機構、ひょうご震災記念 21 世紀研究機構、平泉文化遺産センター、枚方市文化財研究調査会、フェアトレード・サマサマ事務局、ふくみみラボ、放送大学、北海道立アイヌ民族文化研究センター、ボン教ゾクチェン研究会、三重県教育委員会、ミュージアム・オブ・ドリームズ、和高巧芸

5. 共同研究の成果

5-1. 国立歴史民俗博物館

2010-2015 年度に歴博で実施した各共同研究の成果の一部を次ページ以降の表で紹介しています。共同研究の実施においては博物館型研究統合の理念に基づき、自然科学的な情報に基づく歴史資料の資源化、東アジアを中心とする国際関係を重視した日本の歴史・文化研究、総合展示の新構築を重点課題としたほか、欧州への研究対象の展開や、現代的課題への対応として開始した「震災と博物館活動・歴史叙述に関する総合的研究」（基幹研究）など、多角的に展開し、日本の歴史と文化に関する研究の深化・新展開をはかりました。

社会文化形成の基盤としての漢字に注目した「古代における文字文化形成過程の総合的研究」（基盤研究）では、日中韓の文献史学・考古学・日本語学・日本文学等諸分野の中心的研究者を結集し、学際的研究を実施し、その成果を『国立歴史民俗博物館研究報告』第 194 集（2015 年）として刊行しました。韓国国立中央博物館などとの学術交流協定のもと日韓合同で国際企画展示『文字がつなぐ——古代の日本列島と朝鮮半島——』（2014 年）や国際シンポジウム（2012 年）を開催し、それらを総括して『古代日本と古代朝鮮の文字文化交流』（2014 年）を刊行するなど、古代日韓交流関係資料に基づく研究成果を公開しました。この成果は『史学雑誌』などの学会誌でも高く評価され、NHK などテレビ、新聞でも報道され、日韓文化交流に大きな役割を果たすことができました。

「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19 世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」（機構関連共同研究）は、海外の 2 大学を含む 28 研究機関に所属する 64 名の研究者で構成された大型の共同研究です。日本史・美術史・民俗学・地理学・国文学・鉱物学・文化財学・情報学など多分野の協働によって、19 世紀に収集された日本関連在外資料について、海外 24 機関の協力を得て、大規模な学際的調査を実施しました。ミュンヘンに所在する約 7,000 点におよぶ多種多様な資料について、画像つき詳細目録『シーボルト父子関係データベース』（2016 年）をウェブ公開するとともに、『シーボルトが紹介しなかった日本——欧米における日本関連コレクションを使った日本研究・日本展示を進めるために——』（2015 年）や、『ライデン国立民族学博物館蔵 ブロムホフ蒐集目録——ブロムホフの見せたかった日本』（2016 年）、『五大陸博物館所蔵シーボルト・コレクション関係史料集成』（2016 年）などを刊行しました。また、この研究成果は、ミュンヘン五大陸博物館の協力のもと、企画展示『よみがえれ！シーボルトの日本博物館』（2016 年）というかたちで公開し、NHK の日曜美術館に取り上げられるなど、テレビ、新聞でも大きな反響をよびました。さらに、詳細な資料調査の過程で、シーボルトが持ち帰っていた伊能忠敬の測量による日本地図の実在が明らかになり、歴史学・地理学などの分野における研究の進展に貢献しました。

「歴史・考古資料研究における高精度年代論」（基盤研究）では、名古屋大学などの他機関とも協働して日本列島各地や朝鮮半島などにおけるさまざまな試料の測定を実施して、測定技術の向上と較正曲線を整備しました。これにより年代測定（炭素 14 年代法）の精度を格段に向上させ、歴史的建造物の建築年代の測定へと研究が発展しました。この成果は、『国立歴史民俗博物館研究報告』第 196 集（2015 年）で公開したほか、共同研究を総括したフォーラムを開催し、『築何年？炭素で調べる民家の年代研究最前線』（2015 年）を刊行しました。

また、「農耕社会の成立と展開——弥生時代像の再構築——」（基幹研究）では、水田稲作の急速な発展による増産によって短期間で古墳の成立につながったという従来の弥生時代観から大きく転換して、なかなか水田稲作が広まらず、前半期を中心に低成長であったという新しい弥生時代観を提示し、日本だけでなく韓国の考古学界でも、大きな注目を集めました。この画期的な研究成果は、『弥生文化像の新構築』（2013 年）刊行のほか、企画展示「弥生ってなに?!」（2014 年）の開催、『弥生時代の歴史』（2015 年）や世界考古学会議（2016 年）における発表などの形で積極的に公開され、考古学のみならず文化人類学など他分野の研究にもインパクトを与えました。さらに、これらの研究成果をより広く社会へ知ってもらうために、「国立

歴史民俗博物館研究叢書」の第1冊目として『弥生時代って、どんな時代だったのか?』（2017年）として一般の出版社から刊行しました。

5-1-A：共同研究の主な成果（各3件まで）

通番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
1	基幹研究 (共同研究)	自然と技の生活誌	20～22	16	山本志乃、2014年、「定期市における売り手の技術に関する試論」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第181集、pp. 11-38 松田睦彦、2014年、「絵馬を読む」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第181集、pp. 113-132 安室 知、2014年、「再考、魚名の研究」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第181集、pp. 165-204
2		地域開発における文化の保存と利用	21～23	19	青木隆浩・国立歴史民俗博物館（編）、2013年、『歴博フォーラム 民俗展示の新構築 地域開発と文化資源』、岩田書院、184頁 青木隆浩（編）、2015年、『地域開発における文化の保存と利用』（国立歴史民俗博物館研究報告第193集）、314頁
3		歴史表象の形成と消費文化	22～24	20	岩淵令治・国立歴史民俗博物館（編）、2014年、『歴博フォーラム 民俗展示の新構築「江戸」の発見と商品化—大正期における三越の流行創出と消費文化』、岩田書院、140頁 岩淵令治（編）、2016年、『歴史表象の形成と消費文化』（国立歴史民俗博物館研究報告第197集）、380頁
4		旧石器時代の環境変動と人間生活	21～23	13	西本豊弘・白石浩之・浪形早季子・金 憲夷・住田雅和、2009年、「茨城県花室川の旧石器時代遺物について」、『動物考古学』第26号、pp. 1-19 吉田明弘・鈴木三男・金 憲夷・大井信三・中島 礼・工藤雄一郎・安藤寿男・西本豊弘、2011年、「木材化石からみた最終氷期の環境変遷と絶滅種ヒメハリゲヤキの古生態」、『植生史研究』第20巻第1号、pp. 27-40 白石浩之、2017年、「関東地方における最古級の石器群と狩猟具の展望」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第206集、pp. 1-37
5		農耕社会の成立と展開—弥生時代像の再構築—	21～23	17	藤尾慎一郎、2013年、『弥生文化像の新構築』、吉川弘文館、275頁 藤尾慎一郎（編著）、2014年、『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集、国立歴史民俗博物館、530頁 国立歴史民俗博物館（編）、2014年、展示図録『弥生ってなに?!』、国立歴史民俗博物館、128頁
6		新しい古代国家像のための基礎的研究	21～23	20	広瀬和雄（編）、2013年、『新しい古代国家像のための基礎的研究』（国立歴史民俗博物館研究報告第179集）、490頁 広瀬和雄、2013年、「終末期古墳の歴史的意義」、『新しい古代国家像のための基礎的研究』（国立歴史民俗博物館研究報告第179集）、pp.11-72
7		先史時代における社会複雑化・地域多様化の研究	24～26	19	山田康弘・国立歴史民俗博物館（編）、2017年、『縄文時代その枠組・文化・社会を考える』、吉川弘文館、240頁

通番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
8	基幹研究 (共同研究)	東アジアにおける倭世界の実態	24～26	16	上野祥史、2016年、「鏡の価値」、考古学研究会岡山例会（於：岡山大学、2016年7月9日） Takehiko Matsugi, “Warrior ideology and political authority in Kofun period Japan”, Society for East Asian Archaeology, Boston University, 11 June 2016. 松木武彦、2017年、「列島の視点から城野方形周溝墓を読み解く」、城野石棺移築記念シンポジウム「城野石棺を読み解く～古墳出現前夜の北九州～」(於：北九州市立商工貿易会館、2017年2月4日)
9		古代地域社会の実像	24～26	22	林部 均、2013年、『日本古代における王宮構造の変遷』、『国立歴史民俗博物館研究報告』176、pp. 177-202 仁藤敦史、2014年、「広域行政区画としての大宰総領制」、『国史学』214、pp. 1-35 林部 均、2017年、「福原長者原遺跡と藤原宮・仙台郡山官衙遺跡」、『豊前国府誕生』、pp. 5-8
10		戦時／災害と生活世界の関わりに関する総合的研究	24～27	42	国立歴史民俗博物館、2014年、『(展示図録) 歴史にみる震災』、225頁 原山浩介、2015年、「史料と展示 震災をめぐる想像力の「収斂」に抗するために（3.11からの歴史学（その5）」、『歴史学研究（歴史学研究会編）』929号、pp. 48-51
11		東日本大震災被災地域における生活文化研究の復興と博物館型研究統合	24～27	18	国立歴史民俗博物館、2013年、『東日本大震災と気仙沼の生活文化 図録と活動報告』、国立歴史民俗博物館、89頁 小池淳一・川村清志、2015年、「文化財レスキューと生活文化の再創造—気仙沼小々汐オオイの事例から」、木部暢子（編）、『災害に学ぶ—文化資源の保全と再生』、勉誠出版、pp. 145-174 川村清志・葉山茂（共編）、2017年、『気仙沼尾形家（大家）の年中行事—尾形栄一日記を中心に—』、国立歴史民俗博物館、96頁
12		災害の記録と記憶をめぐる資料論的研究	24～26	9	樋口雄彦、2016年、「近世・近代移行期の治水行政と土木官僚—静岡藩水利路程掛とその周辺」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第203集、pp. 161-293
13		戦いと国家形成の環境的基盤—炭素14年代と酸素同位体による古気候復原と社会統合過程との比較照合—	27～29	16	松木武彦、2017年、「むら、まち、人口」、藤尾慎一郎（編）、『国立歴史民俗博物館研究叢書 1 弥生時代って、どんな時代だったのか』、朝倉書店、pp. 37-58
14	基盤研究 (共同研究)	日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究	20～22	10	齋藤努・藤尾慎一郎、2010年、「日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第158集、pp. 163-288 齋藤努、2012年、「東アジア青銅器と鉛同位体比」、『古墳時代の考古学 8 隣接科学と古墳時代研究』同成社、pp. 101-108 齋藤努・肥塚隆保・高妻洋成・澤田正明・中川寧・増田浩太、2016年、「加茂岩倉遺跡出土銅鐸の化学分析結果について」、『古代文化研究』鳥根県古代文化センター、pp. 1-17
15		中近世における武士と武家の資料論的研究	20～22	19	国立歴史民俗博物館（編）、2010年、『武士とはなにか』、国立民俗博物館、214頁 高橋一樹（編）、2014年、『近世における武士と武家の資料論的研究』（国立歴史民俗博物館研究報告第182集）、207頁

通番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
16	基盤研究 (共同研究)	「地理写真」の資料化と活用	21～23	18	国立歴史民俗博物館(編)、2011年、『風景の記録—写真資料を考える—』、156頁 青山宏夫、2011年、「F. ベアトの江戸パノラマ写真はいつ撮影されたのか」、『風景の記録—写真資料を考える—』、pp. 19-25 安達文夫・青山宏夫・田中紀之・徳永幸生、2015年、「時間と場所の情報を有する大量の写真資料の提示法」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第189集、pp. 41-78
17		歴史・考古資料研究における高精度年代論	21～23	14	坂本稔・今村峯雄・中尾七重、2010年、「AMS-14C法による旧土肥家本家住宅・隠居屋住宅の年代」、『第12回AMSシンポジウム報告集』日本AMS研究協会、pp. 35-36 坂本稔・朽津信明・本多貴之・前原豊、2010年、「群馬県二宮赤城神社石造宝塔の炭素14年代測定」、『日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集(日本文化財学会)』、pp. 270-271 坂本稔(編)、2015年、『国立歴史民俗博物館研究報告』第196集、国立歴史民俗博物館、162頁
18		建築と都市のアジア比較文化史	21～23	16	国立歴史民俗博物館(編)、2011年、『アジアの都市 インド・中国・日本』、国立歴史民俗博物館、250頁 国立歴史民俗博物館・玉井哲雄(編)、2013年、『アジアからみる日本都市史』、山川出版社、336頁
19		洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究	21～23	17	小島道裕(編)、2011年、特集「洛中洛外図」、『歴博』164号、pp. 1-23 人間文化研究機構(編)、2012年、展示図録『都市を描く—京都と江戸—』、人間文化研究機構、240頁 小島道裕(編)、2014年、『国立歴史民俗博物館研究報告』第180集、国立歴史民俗博物館、240頁
20		江戸から明治初期にかけての絵画材料および製作・流通に関する調査研究	22～24	13	Takuzi Suzuki, Misaki Kan'no, Noriko Yata, Yoshitsugu Manabe, 2015, "Detection of Transition of Red Colours on Nishiki-e Printings from Colour-corrected Digital Images", <i>Journal of the International Colour Association</i> , vol.14, pp. 55-66
21		デジタル化された歴史研究情報の高度利用に関する研究	22～24	12	安達文夫・鈴木卓治・仁藤敦史・平野清典・米村俊一・徳永幸生、2013年、「高精細画像を用いた正倉院文書の調査研究 支援自在閲覧システム」、『じんもんこん 2013 論文集』No.4、pp. 217-224 Takuzi Suzuki, Fumio Adachi, Yoshitsugu Manabe, 2014, "Experimentation and Evaluation of a Multimedia Exhibition Information Service Using Visitor-owned Portable Wi-Fi Terminals Suitable for Small-scale Museums", <i>ITE Transactions on Media Technology and Applications</i> , Vol.2 No.3, pp. 256-265 鈴木卓治(編)、2015年、『国立歴史民俗博物館研究報告』第189集、国立歴史民俗博物館、165頁
22		高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する研究—『死・葬送・墓制資料集成』の分析と追跡を中心に—	22～24	12	関沢まゆみ(編)、2015年、『国立歴史民俗博物館研究報告』第191集、国立歴史民俗博物館、577頁 関沢まゆみ・国立歴史民俗博物館(編)、2015年、『盆行事と葬送墓制』、吉川弘文館、251頁 関沢まゆみ(編)、2017年、『民俗学が読み解く葬儀と墓の変化(国立歴史民俗博物館研究叢書2)』、朝倉書店、160頁

通番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
23	基盤研究 (共同研究)	民俗研究映像の制作と研究資源化に関する研究	22～24	27	内田順子、2011年、民俗研究映像「アイヌ文化の伝承平取2010」(40分)および「アイヌ文化の伝承 白老2010」(40分) 松尾恒一、2012年、民俗研究映像「比婆荒神神楽—地域と信仰」(52分) 松田睦彦、2013年、民俗研究映像「石を切る—花崗岩採掘の伝統と革新」(「本編」69分、「技術編」51分、「インタビュー編」59分、「ダイジェスト1」4分、「ダイジェスト2」6分、「ダイジェスト3」11分)
24		中世の技術と職人に関する総合的研究	22～24	17	村木二郎(編)、2013年、展示図録『時代を作った技—中世の生産革命—』国立歴史民俗博物館、236頁 村木二郎、2014年、『中世鑄造遺跡からみた鉄鍋生産』、『考古学と中世史研究(高志書院)』11、pp. 181-202 村木二郎、2016年、「擬漢式鏡からみた和鏡生産の転換」、『十四世紀の歴史学』高志書院、pp. 373-390
25		古代における文字文化形成過程の総合的研究	22～24	22	国立歴史民俗博物館(編)、2014年、展示図録『文字がつなぐ—古代の日本列島と朝鮮半島—』国立歴史民俗博物館、247頁 国立歴史民俗博物館・平川南(編)、2014年、『古代日本と古代朝鮮の文字文化交流』、大修館書店、306頁 小倉慈司(編)、2015年、『国立歴史民俗博物館研究報告』第194集、国立歴史民俗博物館、576頁
26		近現代展示における歴史叙述の検証と再構築	22～23	25	原山浩介、2011年、「日本近現代史の現場から」、『オーラルヒストリーと〈語り〉のアーカイブ化に向けて：文化人類学・社会学・歴史学との対話：日本民俗学会国際シンポジウム』、成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、pp. 87-91 原山浩介、2013年、「出発としての焼け跡・闇市」、「〈現在〉からの問い」、『シリーズ戦後日本社会の歴史2 社会を消費する人びと：大衆消費社会の編成と変容』、岩波書店、pp. 14-39
27		日本の中山間地域における人と自然の文化誌	23～25	23	西谷大・島立理子・大久保悟、2014年、「共同研究[日本の中山間地域における人と自然の文化誌]中間報告—二号穴からみた水利用—」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第186集、pp. 295-309 上田大斗・大久保悟・島立理子・西谷大、2014年、「共同研究[日本の中山間地域における人と自然の文化誌]中間報告—蔵玉・折木沢用水の立地と水田耕作の関係—」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第186集、pp. 311-319 島立理子・西谷大・大久保悟、2014年、「共同研究[日本の中山間地域における人と自然の文化誌]中間報告—記録からみる蔵玉・折木沢の開削—」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第186集、pp. 321-335
28		民俗儀礼の変容に関する資料論的研究	23～25	24	山田慎也(編)、2017年、『民俗儀礼の変容に関する資料論的研究』(国立歴史民俗博物館研究報告第205集)、490頁
29		日韓における青銅原料の産地の変遷に関する研究	24～26	6	齋藤努、2012年、『金属が語る日本史—銭貨・日本刀・鉄炮—』吉川弘文館、205頁 齋藤努、2015年、「鉛同位体比による産地推定研究の動向—導入から今後の展開へ向けて—」、『考古学と自然科学』69、pp. 5-24 齋藤努・肥塚隆保・高妻洋成・澤田正明・中川寧・増田浩太、2016年、「加茂岩倉遺跡出土銅鐸の化学分析結果について」、『古代文化研究』24、pp. 1-17

通 番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
30	基盤研究 (共同研究)	東アジアの宗教をめぐる交流と変容	24～26	21	国立歴史民俗博物館・松尾恒一（編）、2014年、「東アジアの宗教文化—越境と変容」、岩田書院、470頁
31		保護地域制度が周辺地域の生業変化や資源化に及ぼす影響—持続可能な地域発展における規制のあり方—	25～27	22	八巻一成、2016年、「北海道における林業遺産と森林鉄道関連遺構」、『北方林業』67、pp. 1-24 八巻一成、2016年、「平取町におけるアイヌ文化伝承へ向けた森林再生の取り組み：北方森林学会春季行事に参加して」、『北方林業』67、pp. 68-69 八巻一成、2016年、「北の林業遺産（1）北海道開拓初期の植林試験地—円山養樹園」、『北方林業』68、pp. 30-31
32		高度経済成長と地域社会の変化	25～27	11	関沢まゆみ、2017年、「高度経済成長と民俗学」、『國學院雑誌』118-4、pp. 124-140
33		学際的研究による漆文化史の新構築	25～27	19	鈴木三男、2016年、『クリの木と縄文人』、同成社、184頁
34		対外関係・交流史を歴史展示で表現するための実践的研究—19世紀を中心とする対米および対独との関係・交流を展示で表現する試み—	25～27	14	国立歴史民俗博物館（編）、2015年、『ドイツと日本を結ぶもの—一日独修好150年の歴史—』、国立歴史民俗博物館、209頁 国立歴史民俗博物館（編）、2015年、『ドイツと日本を結ぶもの—一日独修好150年の歴史—別冊』、国立歴史民俗博物館、128頁 久留島浩・荒川章二・大久保純一・原山浩介・福岡万里子、2016年、『戦争をめぐるパブリックヒストリー—ドイツ・日本 歴史博物館の対話—』、国立歴史民俗博物館、110頁
35		年代情報に基づく木材の利用・活用に関する横断的研究	25～27	12	国立歴史民俗博物館・坂本稔・中尾七重、2015年、『築何年？炭素で調べる古建築の年代研究』、吉川弘文館、187頁
36		研究資源としての民俗研究映像の制作と活用に関する研究	25～27	18	内田順子、2014年、「歴博における映像資料の収集・制作・活用について」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第183集、pp. 145-168 内田順子、2015年、「映像の共有と諸権利」、『社会学評論』65巻4号、pp. 504-520 川村清志（監督）、2016年、「明日に向かって曳け」（102分）
37		古墳時代・三国時代における日朝関係史の再構築—倭と栄山江流域の関係を中心に—	25～28	14	高田貫太、2017年、『海の向こうから見た倭国』（講談社現代新書）、講談社
38		歴史にみる人と自然の関係史	26～28	21	八木玲子・吉村光敏・小田島高之、2016年、「房総丘陵を水源とする河川流域の地域特性と地形誌」、『千葉県立中央博物館自然誌研究報告 特別号「房総丘陵の自然誌」』、pp. 21-44 江口誠一、2016年、「千葉県君津市・鴨川市における炭窯跡の分布と立地」、日本文化財科学会第33回大会（於：奈良大学、2016年6月4日）
39		海の生産と信仰・儀礼をめぐる文化体系の日韓比較研究	27～29	18	関周一、2016年、「東アジア海域交流のなかの中世山陰」、『貿易陶磁研究』36、pp. 100-112 関周一、2016年、「海域交流の担い手 倭人・倭寇」、『九州歴史科学』44、pp. 79-101 関周一、2017年、『日朝関係史』、吉川弘文館、402頁
40		中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究	27～29	14	田中大喜（編著）、2016年、『古琉球史再考』（『歴博』194）、32頁 荒木和憲、2017年、『対馬宗氏の中世史』、吉川弘文館、289頁 岩元康成、2017年、「中世南九州の中国陶器」、『中近世陶磁器の考古学〈第5巻〉』、雄山閣、pp. 63-80

通 番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
41	基盤研究 (共同研究)	「1968年」社会運動の資料と展示に関する総合的研究	27～29	14	黒川伊織、2016年、「いやがらせの思想—「ベトナムに平和を！」神戸行動委員会の経験」、『大原社会問題研究所雑誌（法政大学出版局）』697号、pp. 16-32 小杉亮子、2016年、「全共闘とはなんだったのか—東大闘争における参加者の解釈と意味づけに着目して—」、『大原社会問題研究所雑誌（法政大学出版局）』697号、pp. 33-48 荒川章二、2016年、「「1968」大学闘争が問うたもの—一日大闘争の事例に即して—」、『大原社会問題研究所雑誌（法政大学出版局）』698号、pp. 1-24
42		古代の百科全書『延喜式』の総合書物学研究—多分野協働をめざして—	27～29	16	仁藤敦史、2015年、「留守官について」、館野和己（編）、『日本古代の都を探る』勉誠出版、pp. 116-138 特集展示「『延喜式』ってなに!？」（2016年） 2016年、『「歴博フォーラム『延喜式』ってなに!？」予稿集』、国立歴史民俗博物館、61頁
43	公募型基盤研究 (共同研究)	中世における儀礼テキストの総合的研究—館蔵田中旧蔵文書『転法輪鈔』を中心として—	20～22	16	阿部泰郎・松尾恒一（編）、2017年、「中世における儀礼テキストの総合的研究—館蔵田中旧蔵文書『転法輪鈔』を中心として—」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第188集、341頁
44		元禄『堺大絵図』に示された堺の都市構造に関する総合的研究	22～24	10	特集展示「元禄二年堺大絵図」（2012年12月18日～2013年1月27日） 藤田裕嗣（編）、2017年、「元禄『堺大絵図』に示された堺の都市構造に関する総合的研究」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第204集、148頁 藤田裕嗣、2017年、「「堺大絵図」に反映された堺の景観と都市機能」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第204集、pp. 101-120
45		高松宮家伝来書籍等を中心とする漢籍読書の歴史とその本文に関する研究	23～25	13	静永健（編）、2015年、『高松宮家伝来書籍等を中心とする漢籍読書の歴史とその本文に関する研究（国立歴史民俗博物館研究報告第198集）』、269頁 国立歴史民俗博物館（編）、2012年、『歴博国際シンポジウム「東アジアをむすぶ漢籍文化—敦煌から正倉院、そして金沢文庫へ—」予稿集』、国立歴史民俗博物館、182頁 静永 健・川平敏文（編）、2012年、『東アジアの短詩形文学：俳句・時調・漢詩（アジア遊学152）』、勉誠出版、255頁
46		柳田國男収集考古資料の研究	23～25	11	設楽博己・工藤雄一郎（編）、2017年、「柳田國男収集考古資料の研究」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第202集、380頁
47		歴史資料デジタルアーカイブデータを用いた知的構造の創生に関する研究—小袖屏風を対象として—	25～27	10	濱上知樹・澤田和人、2014年、「デジタルアーカイブからの知的構造の抽出—インテリジェントシステムによる人文・歴史研究支援」、電気学会論文誌C134（9）、pp. 1282-1286 藤村雄基・萩生田明徳・木島彩梨沙・富井尚志、2014年、「歴史資料に関する利用者の興味喚起を目的とした小袖屏風DBシステムの設計と構築」、研究報告データベースシステム（DBS）2014-DBS-160（17）、pp. 1-9 小袖屏風閲覧システム、企画展示「デジタルで楽しむ歴史資料」（2017年）
48		近世の一枚摺文化の受容と都市社会の研究	26～28	8	大久保純一、2015年、「書画会に関する資料群」、『歴博』190号、pp. 20-23 大久保純一、2016年、「江戸の食べ物屋ランキング」、『歴博』196号、pp. 20-23

通番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
49	公募型 共同研究	廣橋家旧蔵文書を中心とする年号勘文資料の整理と研究	27～29	12	石井行雄・近藤浩之・高田宗平、2017年、「田中本『周易』(重文)のもう一つの顔—白点調査中間報告—」、歴史系総合誌『歴博』201号、pp. 20-23
50	開発型 共同研究	縄文時代の人と植物の関係史	22～24	20	工藤雄一郎(編)、2014年、『国立歴史民俗博物館研究報告』第187集、国立歴史民俗博物館、494頁 工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館(編)、2014年、『ここまでわかった!縄文人の植物利用』、新泉社、224頁 工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館(編)、2017年、『さらにわかった!縄文人の植物利用』、新泉社、216頁
51		人の移動とその動態に関する民俗学的研究	22～24	18	松田睦彦(編)、2015年、「人の移動とその動態に関する民俗学的研究」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第199集、320頁
52		日本近世における彩色の技法と材料の受容と変遷に関する研究	26～28	11	島津美子(編)、2016年、総合誌『歴博 特集:彩色の近代化』199号、32頁 島津美子、2016年、「幕末明治期の錦絵に用いられた色材調査 赤色、黄色、緑色について」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第200集、pp. 83-96 島津美子・岡田 靖、2016年、「〔研究ノート〕近世・近代の木彫仏像に施された彩色の技法材料 山形県龍泉寺、塩田行屋、法来寺の事例」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第206集、pp. 61-88
53	機構 関連 共同研究	シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代(19世紀)に日本で収集された資料についての基本的調査研究	22～27	42	国立歴史民俗博物館(編)、2015年、『シーボルトが紹介したかった日本—欧米における日本関連コレクションを使った日本研究・日本展示を進めるために—』、人間文化研究機構、386頁 松井洋子・マティ=フォラー責任編集、人間文化研究機構・国立歴史民俗博物館・ライデン国立民族学博物館(編)、2016年、『ライデン国立民族学博物館蔵 プロムホフ蒐集目録—プロムホフの見せたかった日本』臨川書店、320頁 国立歴史民俗博物館(編)、2016年、『五大陸博物館所蔵シーボルト・コレクション関係史料集成』、国立歴史民俗博物館、396頁
54		近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究	22～27	6	朝日祥之・原山浩介(編)、2015年、『アメリカ・ハワイ日系社会の歴史と言語文化』、東京堂出版、304頁 原山浩介、2016年、「日系アメリカ移民データベース」(国立歴史民俗博物館研究成果・論文目録データベース)
55		正倉院文書の高度情報化研究	22～26	18	仁藤敦史(編)、2014年、「正倉院文書の高度情報化研究」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第192集、232頁 安達文夫・鈴木卓治・仁藤敦史、2014年、「〔研究ノート〕超高精細画像自在閲覧方式を適用した正倉院文書の調査研究支援閲覧システム」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第192集、pp. 207-220 仁藤敦史、2015年、「【システム公開】正倉院文書研究支援即日閲覧システム(公文編)の即日閲覧公開」、国立歴史民俗博物館即日閲覧室
56		近現代の生活と産業変化に関する資料論的研究	22～26	13	企画展示「身体をめぐる商品史」(2016年) 国立歴史民俗博物館(編)、2016年、『企画展示 身体をめぐる商品史』、国立歴史民俗博物館、125頁

通番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
57	機構関連共同研究	歴史研究資料としての映画の保存と活用に関する基盤的研究	22～26	8	内田順子、2013年、「民俗誌映画のアーカイブ化—マテリアルとしての映画情報の取得と保存活用」、『日本民俗学』273、pp. 254-256 宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄・原田一男・内田順子・高城玲（編）、2016年、『甦る民俗映像—渋谷敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』、岩波書店、480頁・DVD6枚組
58		中近世の都市を描く絵画と地誌に関する研究—京都と江戸—	22～24	7	人間文化研究機構連携展示「都市を描く—京都と江戸—」（2012年） 国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館（編）、2012年、『人間文化研究機構連携展示「都市を描く—京都と江戸—」』、国立歴史民俗博物館、239頁 小島道裕、2016年、「近世初期の風俗画に見える「うどん屋」について」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第200集、pp. 127-144
59		ICOM-CECA アジア太平洋地区研究集会博物館教育の可能性	24～24	4	太田歩、2013年、「「ICOM-CECA アジア太平洋地区研究集会」からの報告」、『博物館研究』2013年3月号、pp. 26-28
60		大規模災害と広域博物館連携に関する総合的研究	24～26	17	国立歴史民俗博物館（編）、2013年、「東日本大震災と気仙沼の生活文化」 人間文化研究機構連携展示「東日本大震災と気仙沼の生活文化」（2013年） 木部暢子（編）、2015年、『災害に学ぶ—文化資源の保全と再生—』、勉誠出版、328頁
61		都市風俗と「職人」—日本中近世の絵画資料を中心に—	25～27	16	大高洋司・小島道裕・大久保純一（編）、2017年、『鉄形蕙斎画 近世職人尽絵詞』、勉誠出版、213頁 小島道裕、2016年、『洛中洛外図屏風—つくられた〈京都〉を読み解く—』、吉川弘文館、233頁
62	資料調査プロジェクト	伊能家資料（近世・近代文書）	22～25	2	館蔵資料データベース（データの更新）
63		棟梁鈴木家資料	25～25	2	館蔵資料データベース（データの更新）
64		軍事郵便資料	26～27	6	荒川章二ほか（編）、2015年、総合誌『歴博 特集：軍事郵便と戦争・兵士』、国立歴史民俗博物館、32頁
65	展示プロジェクト	アジアの境界を越えて	20～22	10	上野祥史、2010年、『アジアの境界を越えて』、国立歴史民俗博物館、215頁 機構連携企画展示「アジアの境界を越えて」（2010年）
66		都市を描く—京都と江戸—	23～23	18	小島道裕、2012年、『都市を描く—京都と江戸—』、人間文化研究機構、239頁 機構連携企画展示「都市を描く—京都と江戸—」（2012年）
67		文字がつなぐ—古代の日本列島と朝鮮半島—	24～26	19	国立歴史民俗博物館・小倉慈司（編）、2016年、『古代東アジアの文字文化交流』、同成社、270頁 小倉慈司、2014年、『文字がつなぐ—古代の日本列島と朝鮮半島—』、国立歴史民俗博物館、248頁 国際企画展示「文字がつなぐ—古代の日本列島と朝鮮半島—」（2014年）
68		武士とはなにか	21～22	19	小島道裕、2010年、『武士とはなにか』、国立歴史民俗博物館、213頁 企画展示「武士とはなにか」（2010年）

通 番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
69	展 示 プ ロ ジ ェ ク ト	侯爵家のアルバム—孝 允から幸一にいたる木 戸家写真資料—	21～22	5	樋口雄彦、2011年、『侯爵家のアルバム—孝允から幸一にいたる木戸家写真資料—』、国立歴史民俗博物館、171頁 企画展示「侯爵家のアルバム—孝允から幸一にいたる木戸家写真資料—」(2011年)
70		紅板締め—江戸から明 治のランジェリー—	21～23	4	澤田和人、2011年、『紅板締め—江戸から明治のランジェリー—』、国立歴史民俗博物館、163頁 企画展示「紅板締め—江戸から明治のランジェリー—」(2011年)
71		楽器は語る—紀州藩主 徳川治宝と君子の楽—	22～24	13	日高薫、2012年、『楽器は語る—紀州藩主徳川治宝と君子の楽—』、国立歴史民俗博物館、163頁 企画展示「楽器は語る—紀州藩主徳川治宝と君子の楽—」(2012年)
72		行列にみる近世—武士 と異国と祭礼と—	22～24	12	久留島浩、2012年、「行列にみる近世—武士と異国と祭礼と—」、国立歴史民俗博物館、244頁 企画展示「行列にみる近世—武士と異国と祭礼と—」(2012年)
73		風景の記録—写真資料 を考える—	22～23	18	青山宏夫、2011年、『風景の記録—写真資料を考える—』、国立歴史民俗博物館、155頁 青山宏夫、2011年、「F. ベアトの江戸パノラマ写真はいつ撮影されたのか」、国立歴史民俗博物館(編)、『風景の記録—写真資料を考える—』、歴史民俗博物館振興会、pp. 19-25 企画展示「風景の記録—写真資料を考える—」(2011年)
74		時代を作った技—中世 の生産革命—	23～25	17	村木二郎、2013年、『時代を作った技—中世の生産革命—』、国立歴史民俗博物館、235頁 企画展示「時代を作った技—中世の生産革命—」(2013年) 村木二郎、2014年、「中世鑄造遺跡からみた鉄鍋生産」、『考古学と中世史研究』11、pp. 181-202
75		中世の古文書—機能と 形—	24～25	6	小島道裕、2013年、『中世の古文書—機能と形—』、国立歴史民俗博物館、222頁 企画展示「中世の古文書—機能と形—」(2013年) 小島道裕、2016年、『中世の古文書入門—読めなくても大丈夫!』、河出書房新社、128頁
76		歴史にみる震災	24～25	22	原山浩介、2014年、『歴史にみる震災』、国立歴史民俗博物館、225頁 企画展示「歴史にみる震災」(2014年)
77		弥生ってなに?!	24～26	8	藤尾慎一郎、2014年、『弥生ってなに?!』、国立歴史民俗博物館、128頁 企画展示「弥生ってなに?!」(2014年) 藤尾慎一郎、2014年、「企画展示 弥生ってなに?!」、『歴史系総合誌歴博』No.184、pp. 24-25
78		大ニセモノ博覧会—贋 造と模倣の文化史—	24～26	15	西谷大、2015年、『大ニセモノ博覧会—贋造と模倣の文化史—』、国立歴史民俗博物館、117頁 企画展示「大ニセモノ博覧会—贋造と模倣の文化史—」(2015年) 西谷大(編)、2016年、『見るだけで楽しめる!ニセモノ図鑑—贋造と模倣からみた文化史』、河出書房新社、128頁
79		万年筆の生活誌—筆記 の近代—	25～27	12	国立歴史民俗博物館、2016年、「万年筆の生活誌—筆記の近代—」、国立歴史民俗博物館、192頁 企画展示「万年筆の生活誌—筆記の近代—」(2016年)

通 番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
80	展示 プロ ジェ クト	ドイツと日本を結ぶもの— 一日独修好 150 年の 歴史—	25 ～ 27	20	大久保純一、2015 年、『ドイツと日本を結ぶもの—一日独修好 150 年の歴史—』、国立歴史民俗博物館、209 頁 企画展示「ドイツと日本を結ぶもの—一日独修好 150 年の歴史 —」(2015 年)
81		大久保利通とその時代	27 ～ 27	6	樋口雄彦、2015 年、『大久保利通とその時代』、国立歴史民俗 博物館、147 頁 企画展示「大久保利通とその時代」(2015 年)
82		よみがえれ！シーボルト の日本博物館	26 ～ 28	20	日高薫、2016 年、『よみがえれ！シーボルトの日本博物館』、 国立歴史民俗博物館／青幻舎、264 頁 企画展示「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」(2016 年) 「シーボルト父子関係データベース」(2015 年)
83		身体をめぐる商品史	26 ～ 28	6	青木隆浩、2016 年、『身体をめぐる商品史』、国立歴史民俗博 物館、125 頁 企画展示「身体をめぐる商品史」(2016 年)
84		デジタルで楽しむ歴史 資料 (仮称)	26 ～ 28	12	鈴木卓治、2017 年、『デジタルで楽しむ歴史資料』、国立歴史 民俗博物館、58 頁 企画展示「デジタルで楽しむ歴史資料」(2017 年) 鈴木卓治・大久保純一、2017 年、デジタルコンテンツ「江戸 名所見比べコンテンツ」(企画展示「デジタルで楽しむ歴史 資料」)
85		URUSHI ふしぎ物語— 人と漆の 12000 年史—	27 ～ 29	18	企画展示「URUSHI ふしぎ物語—人と漆の 12000 年史—」 (2017 年) 日高薫、2017 年、展示図録『URUSHI ふしぎ物語—人と漆 の 12000 年史—』、300 頁
86		「1968 年」—無数の問 いの噴出の時代—	27 ～ 29	16	
87		時代を映す鏡—幕末・ 明治の錦絵—	27 ～ 27	5	
88		夷酋列像—蝦夷地イメ ージをめぐる人・物・ 世界—	26 ～ 27	7	機構連携特集展示「夷酋列像—蝦夷地イメージをめぐる人・ 物・世界—」(2015 年) 内田順子、2015 年、「フランスの人々によるアイヌ文化の記 録」、展示図録『夷酋列像—蝦夷地イメージをめぐる人・物・ 世界—』、pp. 80-81
89		旗本 本多家資料の世界	22 ～ 22	4	特集展示「旗本 本多家資料の世界 (『もの』からみる近世)」 (2010 年 10 月 26 日～12 月 5 日)
90		『伝統の朝顔』—館蔵 資料にみる朝顔文化—	22 ～ 22	7	特集展示「『伝統の朝顔』—館蔵資料にみる朝顔文化—」(2010 年 8 月 3 日～8 月 29 日))
91		紀州徳川家伝来の楽器 —琵琶—	22 ～ 22	3	特集展示「紀州徳川家伝来の楽器—琵琶—」(2010 年 4 月 27 日～6 月 20 日)
92		マリア十五玄義図の探 究	23 ～ 23	4	特集展示「マリア十五玄義図の探究」(2011 年 11 月 1 日～ 11 月 27 日)
93		元禄の堺大絵図—巨大 都市図を歩く—	24 ～ 24	10	特集展示「元禄の堺大絵図—巨大都市図を歩く—」(2012 年 12 月 18 日～2013 年 1 月 27 日)
94		伝統の古典菊	24 ～ 24	7	特集展示「伝統の古典菊」(2012 年 11 月 6 日～12 月 2 日)
95		雅楽を伝える—南都楽 人辻家資料—	24 ～ 24	2	特集展示「雅楽を伝える—南都楽人辻家資料—」(2012 年 7 月 10 日～9 月 2 日)

(年度は平成)

5-2. 国文学研究資料館

2010-2015 年度に国文研で実施した各共同研究の成果の一部を次ページ以降の表で紹介しています。国文研では、国内外の日本文学を中心とする学術資料の大規模集積とそれらの資料に基づく先進的な共同研究を推進するとともに、日本の古典籍に関する資料研究の蓄積を活かし、国内外の研究機関・研究者と連携し、分野を横断した研究の創出に取り組んでいます。

2010-2015 年度に実施した共同研究のうち、「王朝文学の流布と継承」（基幹研究）では、国文研が公開しているデータベースを活用して、江戸前期刊行の歌書の変遷、書誌情報に基づく江戸初期の禁裏・公家の蔵書形成の解明など新たな研究領域を開拓し、未開拓の分野の成果を含む 43 本の論文を収めた研究成果報告書『基幹研究「王朝文学の流布と継承」』を刊行したほか、本研究の成果を基に王朝文学の基礎的・総合的なガイドブックとして刊行した『王朝文学をよむために——古典籍研究ガイダンス』（2012 年）は、若手研究者の入門書としても有益であり、「週刊読書人」に 2 回にわたり書評と紹介が掲載されました。

また、「在米絵入本の総合研究」（特定研究）は、国内外の研究者によって、日本文学研究だけでなく歴史・宗教・美術史研究などの領域から、総合的、学際的、国際的に実施した共同研究であり、本研究の成果として、研究論文等のほか、『アメリカに渡った物語絵——絵巻・屏風・絵本』（2013 年）や、『絵が物語る日本——ニューヨーク スペンサー・コレクションを訪ねて』（2014 年）を刊行しました。これらの刊行物は、当該テーマに関心を持つ若手研究者や学生などに有益な書籍であり、研究者コミュニティへ大きく貢献しました。

国際連携研究「オランダ国ライデンを中心とするシーボルト関係日本書籍資料の調査研究」では、海外の研究者と協力してオランダのライデン大学図書館以下 5 ヶ国 6 機関に所蔵されているシーボルト蒐集書についての書誌調査を行い、その成果として『シーボルト日本書籍コレクション 現存書目録と研究』（2014 年）を刊行し、文学、医学、出版流通などの他分野に渡る知の集積状況を明らかにしました。

アーカイブズに関する研究として、「近世地域アーカイブズの構造と特質」（基幹研究）においては、アーカイブズが、記録文書群の伝来や管理状況を構造認識し、公開・利用を前提として編成記述のあり方を科学的に追求する科学として独自の研究領域を持つことを明確にし、その成果として『アーカイブズの構造認識と編成記述』（2014 年）等を刊行し、複数の学会誌などに書評が掲載されるなど、アーカイブズ学の専門家やアーカイブズに携わる研究者に大きく貢献しました。

さらに、特定研究「近世的表現様式と知の越境——文学・芸能・絵画による総合研究——」の成果として、江戸時代の文学・芸能・絵画という異なる表現様式を学際的・総合的に研究分析した『図説 江戸の「表現」浮世絵・文学・芸能』（2014 年）を刊行し、新聞で紹介されるなど、高い評価を得ました。また、公募共同研究「近世風俗文化の形成——忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺——」の成果として『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』（2010 年）などを刊行し、今後の研究の発展に寄与しました。

5-2-A：共同研究の主な成果（各3件まで）

	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
1	基 幹 研 究	王朝文学の流布と継承	18～22	32	国文学研究資料館（編）、2011年、研究成果報告書『基幹研究「王朝文学の流布と継承」』、国文学研究資料館、566頁（資料編DVD一枚つき） 国文学研究資料館（編）、2012年、『王朝文学をよむために—古典籍研究ガイド』、笠間書院、445頁 寺島恒世、2015年、『後鳥羽院和歌論』、笠間書院、698頁
2		19世紀における出版と流通	18～22	24	磯部敦、2011年、「江差皇学舎と平田国学—江差町郷土資料館の調査をとおして」、『調査研究報告（国文学研究資料館）』31号、pp. 35-52 山本和明・青木稔弥・青田寿美、2011年、「酒田『書籍購読会一途』瞥見」、『調査研究報告（国文学研究資料館）』31号、pp. 53-84
3		近世地域アーカイブズの構造と特質	18～22	22	国文学研究資料館（編）、2014年、『アーカイブズの構造認識と編成記述』、思文閣出版、391頁 国文学研究資料館（編）、2015年、『幕藩政アーカイブズの総合的研究』、思文閣出版、495頁 高橋実、2012年、「近世地域社会における文書の作成と管理」、『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第8号、pp. 1-15
4		近世における蔵書形成と文芸享受	23～25	37	シンポジウム報告、2012年（「調査研究報告」、33号、pp. 1-39） シンポジウム報告、2014年（「調査研究報告」、35号、pp. 1-47）
5		日本古典文学における〈中央〉と〈地方〉	25～27	23	鈴木元、2014年、熊本文化研究叢書第9輯『菊池風土記1』、熊本県立大学日本語日本文学研究室（影印（pp. 1-94）、「解題」（pp. 96-98）） 石澤一志、2015年、『風雅和歌集 校本と研究』、勉誠出版、576頁 高橋悠介、2015年、「称名寺の千字文説草と杉本寺」、『金沢文庫研究』、334号、pp. 16-27
6		民間アーカイブズの保存活用システム構築に関する基礎研究	25～27	19	太田尚宏、2014年、「真田家文書〈家老日記〉の種類と性格」、『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第10号、pp. 1-33 西村慎太郎、2014年、口頭発表「民間所在資料の保全、過去・現在・未来」（シンポジウム「多摩地域の博物館・資料館・美術館における防災と地域連携」、国文学研究資料館3研究グループ・三多摩公立博物館協議会共催、於：国文学研究資料館大会議室、2014年9月13日） 国文学研究資料館（編）、2016年、『近世大名のアーカイブズ資源研究』、思文閣出版、408頁
7		日本語の歴史的典籍データベースの検索に関する総合的研究	27～29	25	
8		日本文学関連電子資料の構成・利用の研究	20～22	13	古瀬蔵ほか、2010年、講演「国文学研究資料館の公開データベース」、（於：European Association of Japanese Resource Specialists (EAJRS) Conference 2010） 相田満ほか、2010年、講演「The Origins and Current State of Digitization of Humanities in Japan」（於：Digital Humanities 2010） 蔵書印データベース（ http://base1.nijl.ac.jp/~collectors_seal/ ）

	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
9	特定 研究	陽明文庫における歌合資料の総合的研究	21～23	18	大内英範、2010年、『源氏物語鎌倉期本文の研究』、おうふう、234頁 特別展示「近衛家陽明文庫 王朝和歌文化一千年の伝承」(2011年10月8日～12月4日、国文学研究資料館展示室)
10		久世家文書の総合的研究	21～23	19	日下幸男、2010年、「久世家文書の研究」、『国文学研究資料館紀要 文学研究篇』第37号、pp. 143-163 国文学研究資料館(編)、2012年、『久世家文書の総合的研究』、国文学研究資料館、92頁 日下幸男、2012年、「久世家文書と古今伝授」、『調査研究報告』第32号、pp. 5-11
11		在米絵入本の総合研究	22～24	19	国文学研究資料館(編)、2013年、『アメリカに渡った物語絵—絵巻・屏風・絵本』、ぺりかん社、258頁 国文学研究資料館(編)、2013年、『Japanese Visual Culture—Performance, Media, and Text』、国文学研究資料館、196頁 国文学研究資料館(編)、2014年、『絵が物語る日本—ニューヨーク スペンサー・コレクションを訪ねて』、三弥井書店、360頁
12		近世的表現様式と知の越境—文学・芸能・絵画による総合研究—	22～24	20	国文学研究資料館(編)、2014年、『図説 江戸の「表現」浮世絵・文学・芸能』、八木書店、349頁
13		藤原道長の総合的研究—王朝文化の展開を見据えて—	23～25	22	
14	基幹 研究	大福光寺本「方丈記」を中心とした鴨長明作品の文献学的研究	23～24	16	特別展示「鴨長明とその時代『方丈記』800年記念」(2012年5月25日～6月23日、於：国文学研究資料館展示室) 国文学研究資料館、2012年、展示図録『鴨長明とその時代『方丈記』800年記念』、国文学研究資料館、130頁 木下華子、2015年、『鴨長明研究』、勉誠出版、424頁
15		日本における宋版の伝来と受容についての研究	23～25	10	牧野和夫、2011年、「『思融—良含』周辺のこと・杭州出自の宋人のこと」、『実践国文学』80号、pp. 45-58 牧野和夫、2012年、「『沙石集』論—円照入寂後の戒壇院系の学僧たち—」、『実践国文学』81号、pp. 1-17 牧野和夫、2013年、「日本現存資料から見た宋版大蔵經の〈修〉について：「入(埋)木」の世界」、『実践国文学』84号、pp. 31-49
16		語り物文芸の絵画化と享受環境に関する基礎的研究—〈曾我物語〉を題材とする絵入本・絵巻・屏風の考察を中心として—	24～25	8	宮腰直人、2012年、「和田酒盛譚考」、『国文学研究資料館紀要：文学篇』39号、pp. 97-118 宮腰直人、2014年、「勝田竹翁筆『富士巻狩』考—《曾我物語》研究序説」、『立教大学日本文学』108号、pp. 97-106 出口久徳、2014年、「寛文・延宝期の軍記物語—延宝五年版『平家物語』から考える—」、『説話文学研究』49号、pp. 23-31
17		歴史叙述と文学	25～27	7	清水由美子、2013年、「資料としての軍記文学、物語としての軍記文学」、『國學院雑誌』第114巻11号、pp. 316-332 森暁子、2014年、「北条氏長『兵法問答』の合戦語り」、『近世文藝』第100号、pp. 15-29 吉岡亮、2015年、「内田魯庵『文学一斑』におけるヘーゲル—その典拠とドラマ論」、『札幌大谷大学 社会学部論集』第3号、pp. 133-150

	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
18	基幹研究	日本古典籍の書型に関する研究	25	6	陳捷、2014 年、「『夢梅華館日記』翻刻（第二十六～二十七巻）」、『調査研究報告（国文学研究資料館）』第 34 号、pp. 158-108 中村健太郎、2013 年、「古筆切資料としての伝世尊寺行俊筆「長門切」—伝称筆者と名物切の名称について—」、『國學院雜誌』、第 114 巻 11 号、pp. 306-315 海野圭介・中村健太郎、2014 年、「洛中洛外図屏風（歴博甲本）に貼られた付箋の書」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第 180 集、pp. 65-77
19		万葉集伝本の書写形態の総合的研究	26～28	7	
20		中世古今集注釈書の総合的研究—「毘沙門堂本古今集注」を中心に—	26～28	11	
21		日本の近世における中国漢詩文の受容—三体詩・古文真宝の出版を中心に—	26～28	11	
22	特定研究	短冊手鑑の内容と成立に関する研究	26～28	10	
23		読書一人・モノ・時空—	26～28	6	
24		ベトナム社会科学研究所蔵旧フランス極東学院資料についての研究	27～29	5	
25		生巧館制作による木口木版の研究—国文学研究資料館収蔵品を中心に—	27～28	7	
26		『和漢朗詠集』の伝本と本文享受の研究	27～28	5	
27		怪力乱神の文学—怪異・神秘・混乱—	27～29	4	
28	国際連携研究	オランダ国ライデンを中心とするシーボルト関係日本書籍資料の調査研究	22～24	19	鈴木淳、2010 年、「北斎絵入り狂歌春興帖『花の兄』の紹介と翻刻」、『江戸のみやび』、岩波書店、pp. 172-206 牧野悟資、2010 年、「朱楽菅江一門考—『狂歌大体』を中心に—」、『都大論究』47 号、pp. 41-53 国文学研究資料館（編）、2014 年、『シーボルト日本書籍コレクション 現存書目録と研究』、勉誠出版、688 頁
29		日本文学のフォーラム	25～27	7	国文学研究資料館（編）、2016 年、『もう一つの日本文学史』、勉誠出版、288 頁
30	国際共同研究	江戸時代初期出版と学問の総合的研究	27～30	12	
31		境界をめぐる文学—知のプラットフォーム構築をめざして—	27～30	8	

	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
32	総合書物学の構築を目指す共同研究	アジアの中の日本古典籍—医学・理学・農学書を中心として—	26～29	30	
33		日本古典籍の書誌概念と書誌用語の国際化	26～29	6	
34		日本古典籍コードの国際標準化	26～29	11	
35		古代の百科全書『延喜式』の総合書物学研究—多分野協働をめざして	26～29	15	
36		表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化	26～29	8	
37		キリシタン文学の継承—宣教師の日本語文学	26～29	15	
38		表記の文化学—ひらがなとカタカナ—	26～29	7	
39		書誌学・文献学の再構築	27～30	3	
40		青少年に向けた古典籍インターフェースの開発	27～30	2	
41	公募共同研究	近世風俗文化学の形成—忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺—	20～22	12	飯倉洋一（編）、2010年、『忍頂寺文庫・小野文庫の研究（大阪大学大学院文学研究科共同研究研究成果報告5号）』、pp. 1-50 青田寿美・飯倉洋一・内田宗一・福田安典・山本和明・鷺原知良、2011年、「仙台忍頂寺家所蔵資料目録」、『国文学研究資料館調査研究報告』31号、pp. 171-193 「近世風俗文化学の形成—忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺」プロジェクト（編）、2012年、『近世風俗文化学の形成：忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺（国文学研究資料館公募共同研究成果報告書）』、国文学研究資料館、651頁
42		草双紙を中心とした近世挿絵史の構築	26～29	15	
43	公募共同研究	紀州地域に存する古典籍およびその関連資料・文化資源の基礎的研究	26～29	45	
44		日本漢詩文における古典形成の研究ならびに研究環境のグローバル化に対応した日本漢文学の通史の検討	26～29	14	
45		近世日本を中心とする東アジアの理学典籍に関する国際共同研究	26～29	16	
46		近世日本科学史典籍の国際的再評価に向けた基盤研究	26～29	5	

	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
47	異分野 融合 共同 研究	古典籍を活用した和漢薬に関する総合研究	27～29	5	
48		オーロラと人間社会の過去・現在・未来	27～28	12	
49	拠点主 導共同 研究	法華経の日本での享受についての研究	27～28	13	
50		日本の歴史的典籍の画像データベースを利用した国際的教育プログラムの開発	27～28	9	
51		「見立て」と日本文化の諸相	27～28	12	
52		西欧および近代日本における日本「古典」の受容のあり方についての研究～南方熊楠を視座として～	27～28	11	
53	研究開 発系共 同研究	古文書および古典籍を対象とした、ブックスキヤナの開発に関する共同研究	27～30	8	
54		「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」における典籍の全文テキスト化に関する検討協力	26～	6	
55		典籍画像からのテキスト化とキーワード抽出に関する研究	27～29	7	
56		古典籍画像を対象としたメタデータ記述／アノテーションに関する研究	27～28	4	
57		「新古典籍総合目録データベース」のマルチリンガル化対応のための基礎研究	27～29	3	
58		検索機能の高度化に係る総合的研究	27～29	3	

(年度は平成)

5-3. 国立国語研究所

2010-2015 年度に国語研で実施した各共同研究の成果の一部を次ページ以降の表で紹介しています。

このうち、Haruo Kubozono (ed.), 2015, *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*, De Gruyter Mouton は日本語音声学・音韻論の主要領域を網羅した世界で初めての英文論文集であり、国語研と世界の言語学出版を代表する De Gruyter Mouton 社の協定による HANDBOOKS OF JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS シリーズの 1 冊として、研究成果を広く世界に発信したものです。海外の研究者から「広範囲な現象を深く掘り下げた優れた業績」(R. Ladd エジンバラ大学教授)、「この言語に関する他に例を見ない研究資源」(M. Kenstowicz MIT 教授)という評価を受けています(出版社 HP)。

同シリーズの Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.), 2016, *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*, De Gruyter Mouton も、世界初の日本語語彙論の包括的英文論集として、G. Booij ライデン大学名誉教授、M. Aronoff ストローニーブルック大学卓越教授から「研究を進める着想の源泉となる信頼できる手引き」や「今後の研究の評価基準」(出版社 HP)と評されているほか、日本語教育研究の成果として Masahiko Minami (ed.), 2016, *Handbook of Japanese Applied Linguistics*, De Gruyter Mouton も刊行され、上記 2 巻については海外専門誌の書評でも高い評価を得ました。

また、動詞に反映される他動性を多角的に分析した論文集、プラシャント・パルデシ、桐生和幸、ハイコ・ナロック(編著)『有対動詞の通言語的研究——日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』(くろしお出版、2015)も、『ことばと文字』第 5 号の書評で「言語類型論とコーパス言語学の最新成果を取り入れ」、「有対動詞と他動性に関する通言語的類型論研究の画期的な成果である」と評されるなど、高い評価を受けた編著書を多数発表しました。

研究成果は日本語に関するものだけではなく、Anna Bugaeva, 2015, “Valency classes in Ainu.” Comrie, Bernard & Malchukov, Andrej (eds.) *Valency Classes Cross-Linguistically*, Gruyter de Mouton, pp. 807-854 は、北米先住民諸言語などの複統合型言語との対照においてアイヌ語の述語構造を詳細に論じた研究論文で、ドイツ・マックスプランク進化人類学研究所との共同研究の成果の一部として出版されています。アイヌ語については、このような学術的な意義の高い論文だけではなく、ウェブ上で誰もがアイヌ語に触れることができる「トピック別 アイヌ語会話辞典」、「アイヌ語口承文芸コーパス(音声・グロス付き)」など社会的意義も高いデータも研究成果として公開しました。

国語研の共同利用の中核をなすコーパスの構築と利用に関しては、プロジェクトメンバーによって蓄積された知見を集大成したシリーズとして、前川喜久雄(編・監修)『講座日本語コーパス』第 1 巻～第 6 巻(朝倉書店、2013-2016 年)を刊行しています。第 1 巻は『計量国語学』29(2)で「日本語のコーパス研究を知るためだけでなく、自身のコーパス研究の手引き書としても最適」と、第 2 巻は『日本語学』34(7)で『現代日本語書き言葉均衡コーパス』が「どのように作られたかを明らかにする」とものと評されています。

日本の消滅危機言語・方言に関する研究成果としては、フィールド調査により木部暢子、窪蘭晴夫、下地賀代子、ローレンス・ウエイン、松森晶子、竹田晃子(共著)『喜界島方言調査報告書』(国立国語研究所、2011 年)などの報告書という形で、語彙・文法・音声データを公開しました。また、木部暢子『そうだったんだ日本語 じゃって方言なおもしろいか』(岩波書店、2013 年)は、朝日新聞(2014 年 3 月 9 日)の書評欄で「世界中で起きている言語の消滅の問題など、昨今の方言や少数派言語をめぐる議論の背景を知ること」ができると評され、日本経済新聞(2014 年 2 月 2 日)では、「方言の世界の豊かさを解説した」書籍として取り上げられるなど、社会的にも注目されました。

5-3-A：共同研究の主な成果（各3件まで）

	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
1	基幹型 共同研究	日本語レキシコンの音韻特性	21～27	48	Haruo Kubozono (ed.), 2012, "Special issue on Varieties of Pitch Accent Systems", <i>Lingua</i> (Elsevier), Vol.12, Issue 13, pp.1325-1521 Haruo Kubozono (ed.), 2013, "Special issue on Japanese Geminate Obstruents", <i>Journal of East Asian Linguistics</i> (Springer), Vol. 22, No.4, pp.303-398 Haruo Kubozono (ed.), 2015, <i>Mouton Handbook of Japanese Phonetics and Phonology</i> , De Gruyter Mouton, xl + 767p.
2		日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性	21～27	34	影山太郎（編著）、2014年、『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』、ひつじ書房、468頁 Hideki Kishimoto, Taro Kageyama, and Kan Sasaki, 2015, "Valency classes in Japanese", Andrej Malchukov and Bernard Comrie (eds.), <i>Valency Classes in the World's Languages</i> , vol. 1. De Gruyter Mouton, pp. 765-805 Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.), 2016, <i>Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation</i> , De Gruyter Mouton, 708p.
3		文字環境のモデル化と社会言語科学への応用	21～27	36	横山詔一、2013年、「文字の認知単位」、『講座日本語学・日本語教育』(3)、日本語学と日本語教育刊行委員会（韓国）、pp. 419-430 高田智和・横山詔一（編）、2014年、『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』、彩流社、261頁 銭谷真人、2014年、「『横浜毎日新聞』における仮名字体および仮名文字遣い—明治期の新聞における字体の統一について—」、『日本語の研究』、pp. 48-66
4		日本語レキシコン—連濁事典の編纂	22～27	27	Timothy J. Vance, 2012, "Benjamin Smith Lyman as a Phonetician." <i>Journal of Japanese Linguistics</i> 28, pp. 31-41 Timothy J. Vance, Mizuki Miyashita, and Mark Irwin, 2014, "Rendaku in Japanese Dialects that Retain Prenasalization." <i>Japanese/Korean Linguistics</i> 21, ed. by Seungho Nam, Heejeong Ko, and Jongho Jun, Stanford: CSLI, pp. 33-42 Shigeto Kawahara, 2015, "Comparing a forced-choice wug test and a naturalness rating test: An exploration using rendaku." <i>Language Sciences</i> , 48, pp. 42-47
5		消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究	21～27	41	木部暢子・窪蘭晴夫・下地賀代子・ローレンス ウエイン・松森晶子・竹田晃子（共著）、2011年、『喜界島方言調査報告書』、国立国語研究所、346頁 木部暢子、2013年、『そうだったんだ日本語 じゃって方言なおもしろいか』、岩波書店、199頁 木部暢子（編）、2016年、『鹿児島県与論島・沖永良部島方言調査報告書』、国立国語研究所、284頁
6		方言の形成過程解明のための全国方言調査	21～27	54	小西いずみ・井上優、2013年、「富山県呉西地方における尊敬形「～テヤ」—意味・構造の地域差と成立・変化過程—」『日本語の研究』9(3)、pp. 33-47 Takuichiro Onishi, 2016, "Timespan Comparison of Dialectal Distributions." <i>The Future of Dialects</i> , Berlin Language Science Press, pp. 377-387 大西拓一郎（編著）、2016年、『新日本言語地図』、朝倉書店、320頁

	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
7	基幹型 共同研究	多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明	21～27	20	田中ゆかり、2011年、『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで—』、岩波書店、286頁 相澤正夫（編）、2013年、『現代日本語の動態研究』、おうふう、262頁 相澤正夫・金澤裕之（編）、2016年、『SP 盤演説レコードがひらく日本語研究』、笠間書院、299頁
8		日本語変種とクレオール形成過程	21～25	8	Chien Yuehchen and Sanada Shinji, 2010, “Yilan Creole in Taiwan.” <i>Journal of Pidgin and Creole Languages</i> , 25: 2, John Benjamins Publishing Company, pp. 350-357 簡月真（著）、真田信治（監修）、2011年、『台湾に渡った日本語の現在—リングフランカとしての姿—』、明治書院、162頁 朝日祥之（著）、真田信治（監修）、2012年、『サハリンに残された日本語樺太方言』、明治書院、158頁
9		日本語の大規模経年調査に関する総合的研究	24～27	25	Fumio Inoue, 2013, “Dialect Lexicography and the Standard Language — Words for Snow and Suburban Tokyo Dialect —.” <i>Dialectologia</i> special issue IV, pp. 93-121 尾崎喜光、2013年、『“道理に合わない” 授受表現の使用と動態—愛知県岡崎市での経年調査および最近の言語調査から—』、相澤正夫（編）、『現代日本語の動態研究』、おうふう、pp. 104-126 横山詔一・中村隆・阿部貴人・前田忠彦・米田正人（著）、2014年、『成人の同一話者を41年間追跡した共通語化研究』、『計量国語学』29（7）、pp. 241-250
10		日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究	25～27	26	金水敏、2015年、『「変項名詞句」の意味解釈について』、『日中言語研究と日本語教育』8、pp. 1-11 志波彩子、2016年、『近代日本語の間接疑問構文とその周辺—従属カ節を持つ構文のネットワーク—』、『国立国語研究所論集』10、pp. 193-220
11		コーパスアノテーションの基礎研究	21～27	23	Yasuharu Den, Koiso Hanae, Katsuya Takanashi, and Nao Yoshida, 2012, “Annotation of response tokens and their triggering expressions in Japanese multi-party conversations.” <i>Proceedings of the 8th Language Resources and Evaluation Conference</i> , pp. 1332-1337 小西光・浅原正幸・前川喜久雄、2013年、『「現代日本語書き言葉均衡コーパス」に対する時間情報アノテーション』、『自然言語処理』20（2）、pp. 201-221 Masayuki Asahara, Sachi Kato, Hikari Konishi, Mizuho Imada, and Kikuo Maekawa, 2014, “BCCWJ-TimeBank: Temporal and Event Information Annotation on Japanese Text.” <i>Computational Linguistics and Chinese Language Processing</i> , 19（3）、pp. 1-24
12		通時コーパスの設計	21～27	27	2014年、『特集 日本語史研究と歴史コーパス』、『日本語学』33巻14号（臨時増刊号）、明治書院 『日本語歴史コーパス』（「平安時代編」（2014年）、「室町時代編 I 狂言」（2015年）、「鎌倉時代編 I 説話随筆」（2016年））、国立国語研究所（ http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/ ） 近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信（編）、2015年、『コーパスと日本語史研究』、ひつじ書房、312頁

	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
13	基幹型 共同研究	コーパス日本語学の創 成	21 ~ 27	49	石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠（編著）、2010 年、『言語研究 のための統計入門』、くろしお出版、281 頁 Yukio Tono, Makoto Yamazaki, and Kikuo Maekawa, 2013, <i>A Frequency Dictionary of Japanese</i> (Routledge Frequency Dictionary), London: Routledge, 384p. 前川喜久雄（編・監修）、2013 年、『講座日本語コーパス』（全 6 巻、第 1 巻：182 頁、第 2 巻：149 頁、第 3 巻：186 頁、第 4 巻：205 頁、第 5 巻：203 頁、第 6 巻：175 頁）
14		形容詞節と体言締め 文：名詞の文法化	21 ~ 23	36	Naonori Nagaya, 2011, “Rise and Fall of Referentiality: Articles in Philippine languages.” Foong Ha Yap, Karen Grunow-Hårsta and Janick Wrona, eds., <i>Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspectives</i> , Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, pp. 589-626. 呉人恵、2011 年、「コリャーク語の名詞化—動作主・被動作 主名詞の意味とシンタックス」、『北方言語研究』1、pp. 41- 62
15		節 連 接 へ の モ ー デ ル 的 ・ 発 話 行 為 的 な 制 限	21 ~ 23	43	風間伸次郎、2011 年、「ナーナイ語の複文について：条件表 現の使い分けを中心として」、『北方言語研究』1、pp. 115- 138 Megumi Kurebito, 2011, “Adverbial Clauses in Koryak: Degrees of Subordination and the Five Levels”, 『北方文化 研究』5、pp. 71-94 角田三枝、2011 年、「モノノとナイマデモ：節連接の五つのレ ベルにおける逆接と譲歩条件（=monono and-nai=mademo: Adversatives and Concessive Conditionals in the Five-level Classification of Clause Linkage）」、『国立国語研究所論集』2、 pp. 107-134
16		述語構造の意味範疇の 普遍性と多様性	21 ~ 27	##	Pardeshi, Prashant and Yuko Yoshinar, 2012, “An investi- gation into the interaction between intentionality and the use of transitive/ intransitive expression: A contrastive study of Japanese and Marathi”, <i>Journal of Japanese Linguistics</i> 28, pp. 77-88 プラシャント・パルデシ、桐生和幸、ハイコ・ナロック（編著）、 2015 年、『有対動詞の通言語的研究—日本語と諸言語の対照 から見えてくるもの』、くろしお出版、488 頁 Prashant Pardeshi, 2016, <i>A Functional Account of Marathi's Voice Phenomenon: Passives and Causatives in Marathi</i> , Brill Studies in South and Southwest Asian Languages 7, 196p.
17		日本列島と周辺諸言語 の類型論的・比較歴史 的研究	24 ~ 27	62	ブガエワ・アンナ、長崎郁（編）、2015 年、『アイヌ語研究の 諸問題』、北海道出版企画センター、128 頁 Bugaeva, Anna, 2015, “Causative constructions in Ainu: A typological perspective with remarks on the diachrony.” <i>STUF- Language Typology and Universals</i> (Sprachtypol- ogie und Universalienforschung) 68 (4), pp. 439-484 Bugaeva, Anna, 2015, “Valency classes in Ainu.” Comrie, Bernard & Malchukov, Andrej (eds.) <i>Valency Classes Cross-Linguistically</i> , Gruyter de Mouton, pp. 807-854

	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
18	基幹型 共同研究	多文化共生社会における日本語教育研究	22～27	44	野田尚史（編著）、2012年、『日本語教育のためのコミュニケーション研究』、くろしお出版、223頁 庵功雄・山内博之（編）、2015年、『現場に役立つ日本語教育研究1 データに基づく文法シラバス』、くろしお出版、280頁 Kumiko Sakoda, 2016, “Errors and learning strategies by learners of Japanese as a second language” in M. Minami (Ed.), <i>Handbook of Japanese Applied Linguistics</i> . (Handbooks of Japanese Language and Linguistics Series, Vol.10, pp. 129-150
19		コミュニケーションのための言語と教育の研究	25～27	45	野田尚史・高山善行・小林隆（編）、2014年、『日本語の配慮表現の多様性—歴史的変化と地理的・社会的変異—』、くろしお出版、320頁 野田尚史（著）、張麟声他（訳）、2014年、『交际型日语教学语法研究 [コミュニケーションのための日本語教育文法]』、外語教学与研究出版社（北京）、297頁 宇佐美洋、2014年、『「非母語話者の日本語」は、どのように評価されているか—評価プロセスの多様性をとらえることの意義—』、ココ出版、392頁
20	領域 指定型 共同研究	敬語と敬語意識の半世紀—愛知県岡崎市における調査データの分析を中心に—	22～24	19	井上史雄、2011年、『経済言語学論考—言語・方言・敬語の値打ち—』、明治書院、497頁 井上史雄、2012年、『岡崎敬語の現代史』、『日本語学』31（11）、pp.2-13
21		言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究	22～25	10	村杉恵子、2013年、『幼児の『誤用』はなぜ生じるのか：幼児の言語獲得における普遍文法の役割』、『日本語文法』13（2）、pp. 19-36 Hideki Kishimoto, 2013, “Verbal Complex Formation and Negation in Japanese.” Simin Karimi ed., <i>Lingua</i> , 135, pp. 132-154
22		日本語教育のためのコーパスを利用したオンライン日本語アクセント辞書の開発	22～25	11	『オンライン日本語アクセント辞書 OJAD』、（2012年、 http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/ ） 鈴木雅之・黒岩龍・印南佳祐・小林俊平・清水信哉・峯松信明・広瀬啓吉、2013年、『条件付き確率場を用いた日本語東京方言のアクセント結合自動推定』、『電子情報通信学会論文誌』、vol.J96-D, no.3, pp. 644-654
23		文末音調と発話意図とを統合した話し言葉のアノテーションの可能性—日本語諸方言の同意要求表現を中心に考える—	22～25	5	岡田祥平・江崎哲也、2012年、『文末音調と発話意図とを統合したアノテーション』を施した音声コーパスを考える際に必要となる視点は何か？—「同意要求表現」を中心に—、『第1回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』、国立国語研究所、pp. 329-338
24		パラ言語情報および非言語情報の研究における基本概念の体系化	22～25	5	Hiroki Mori, 2013, “Dynamic Aspects of Aizuchi and Its Influence on the Naturalness of Dialogues.” <i>Acoustical Science and Technology</i> , 34, pp. 147-149 森大毅・前川喜久雄・粕谷英樹、2014年、『音声は何を伝えているか—感情・パラ言語情報・個人性の音声科学』、コロナ社、207頁

	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
25	領域 指定型 共同研究	空間移動表現の類型論 と日本語：ダイクシス に焦点を当てた通言語 的実験研究	22～25	21	Yo Matsumoto, 2011, “Typologies of Lexicalization Patterns and Event Integration: Clarifications and Reformulations.” Adele Goldberg (ed.) <i>Cognitive Linguistics</i> (Critical concepts in linguistics), Vol. III, London: Routledge, pp. 422-439 Takahiro Morita, 2011, “Intratypological Variations in Motion Events in Japanese and French: Manner and Deixis as Parameters for Cross-Linguistics Comparison.” <i>Cognitextes</i> , Revue de l'Association Française de Linguistique Cognitive, France
26		学習者コーパスから見た 日本語習得の難易度 に基づく語彙・文法シ ラバスの構築	23～26	32	石黒圭・橋本行洋（編）、2014 年、『話し言葉と書き言葉の接点』、ひつじ書房、296 頁 中俣尚己、2014 年、『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』、くろしお出版、252 頁
27		日本語を母語あるいは 第二言語とする者によ る相互行為に関する総 合的研究	23～26	11	柳町智治・長野克則・繪内正道・馬場直志、2013 年、「外国人留学生による日本語コミュニケーションにおける問題点と改善策」、『工学教育』61（4）、pp. 1-5 Keiko Ikeda, 2013, “Audience Participation in Politics: Communicative Competence for Political Communication in Contemporary Japan.” <i>Language & Communication</i> , 33, pp. 351-365
28	独創・ 発展型 共同研究	複文構文の意味の研究	22～25	5	Kaoru Horie, 2012, “The Interactional Origin of Nominal Predicate Structure in Japanese: A Comparative and Historical Pragmatic Perspective.” <i>Journal of Pragmatics</i> , 44, pp. 663-679 益岡隆志、2013 年、『日本語構文意味論』、くろしお出版、296 頁
29		大規模方言データの多 角的分析	21～24	10	熊谷康雄（編）、2013 年、『大規模方言データの多角的分析成果報告書：言語地図と方言談話資料』、国立国語研究所、181 頁 日高水穂、2013 年、「複合辞「という」の文法化の地域差」、藤田保幸（編）、『形式語研究論集』、和泉書院、pp. 285-300
30		接触方言学による「言 語変容類型論」の構築	21～24	17	真田信治・ダニエル＝ロング・朝日祥之・簡月真（編）、2010 年、『改訂版社会言語学図集』、秋山書店、204 頁 Mie Hiramoto, 2010, “Dialect contact and dialect change among plantation immigrants from northern Japan in Hawaii.” <i>Journal of Pidgin and Creole Linguistics</i> , 25(2), pp. 229-262
31		日本語文法の歴史的研 究	22～25	11	高山善行・青木博史・福田嘉一郎（編）、2012 年、『日本語文法史研究 1』、ひつじ書房、276 頁 吉田永弘、2013 年、「「る・らる」における肯定可能の展開」、『日本語の研究』9（4）、pp. 18-32
32		近代語コーパス設計の ための文献言語研究	21～24	10	『明六雑誌コーパス』、2012 年（ http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/mei roku/ ） 田中牧郎、2013 年、『近代書き言葉はこうしてできた』、岩波書店、200 頁
33		多様な様式を網羅した 会話コーパスの共有化	23～26	10	伝康晴・小磯花絵、2014 年、「既存のツールと結合した話し言葉コーパス利用環境」、『自然言語処理』21（2）、pp. 99-123 Sandra A. Thompson and Ryoko Suzuki, 2014, “Reenactments in Conversation: Gaze and Reciprocity.” <i>Discourse Studies</i> , 16, pp. 816-846

	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
34	独創・発展型共同研究	日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成	21～24	58	Prashant Pardeshi, Shingo Imai, Kazuyuki Kiryu, Sangmok Lee, Shiro Akasegawa and Yasunari Imamura, 2012, “Compilation of Japanese Basic Verb Usage Handbook for JFL Learners: A Project Report.” <i>Acta Linguistica Asiatica</i> Volume 2, No. 2, pp. 37-64 『基本動詞ハンドブック』、2012 年 (http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/)
35		定住外国人の日本語習得と言語生活の実態に関する学際的研究	21～24	14	鎌田修、嶋田和子（編）、平田オリザ・牧野成一・川村宏明・伊東祐郎・野山広（著）、2012 年、『対話とプロフィシェンシー——コミュニケーション能力の広がりともまりを目指して——』、凡人社、198 頁 村田和代・森本郁代・野山広（編）、2013 年、特集「ウエルフェア・リングイスティクスにつながる実践的言語・コミュニケーション研究」、『社会言語科学』第 16 巻第 1 号
36	萌芽・発掘型共同研究	訓点資料の構造化記述	21～24	9	高田智和、2011 年、「ア行の /e/・ヤ行の /je/ を表わす仮名文字の標準化」『漢字文献情報処理研究』12、pp. 4-12 『国立国語研究所蔵金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經閲覧システム』2012 年 (http://dglb01.ninjal.ac.jp/kongo-chokyo_inseiki/)
37		会話の韻律機能に関する実証的研究	22～25	5	小磯花絵、2010 年、「話者交替における統語的・韻律的特徴の役割—日本語三者会話の定量的分析に基づく考察—」『音声研究』14（3）、pp. 13-26 Yosuke Igarashi and Hanae Hanae, 2012, “Pitch range control of Japanese boundary pitch movements.” <i>Proceedings of InterSpeech2012</i> , pp. 1949-1952
38		首都圏の言語の実態と動向に関する研究	22～25	6	田中ゆかり・早川洋平・富田悠・林直樹、2012 年、「街のなりたちと言語景観—東京・秋葉原を事例として—」、『言語研究』142、pp. 155-170 三井はるみ（編）、2013 年、『首都圏の言語の実態と動向に関する研究成果報告書 首都圏言語研究の視野』、国立国語研究所、350 頁
39		方言談話の地域差と世代差に関する研究	22～25	7	井上文子（編）、2014 年、『方言談話の地域差と世代差に関する研究—ロールプレイ会話データ集—』、国立国語研究所、99 頁
40		近現代日本語における新語・新用法の研究	22～25	4	梅林博人、2012 年、「『古川ロッパ昭和日記』における副詞「全然」の用法—言語変化の過渡期における個人の使用実態」、『表現研究』96、pp. 44-53 新野直哉、2013 年、「“全然”に関する国語学者浅野信の言語規範意識—昭和 10 年代を中心に—」、『表現研究』97、pp. 1-10
41		テキストの多様性を捉える分類指標の策定	21～24	11	Wakako Kashino and Manabu Okumura, 2010, “An Approach toward Register Classification of Book Samples in the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese.” <i>Proceedings of PACLIC24</i> , pp. 433-438
42		テキストにおける語彙の分布と文章構造	21～24	11	村田年・山崎誠、2012 年、「自然科学系書籍における複合動詞の使用傾向—後項動詞を指標として—」、『日本語と日本語教育』40、pp. 83-112 Makoto Yamazaki, 2013, “Quantitative Analysis of the Text Structure Using Co-occurrence of Words.” <i>Methods and Applications of Quantitative Linguistics</i> , pp. 96-104

	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
43	萌芽・発掘型 共同研究	文脈情報に基づく複合的言語要素の合成的意味記述に関する研究	21～24	6	「Web データに基づく複合動詞用例データベース」、2012 年 (http://csd.ninjal.ac.jp/comp/) 山口昌也、2013 年、「複合動詞「～込む」と前項動詞の格関係―「複合動詞用例データベース」を用いた分析―」、影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて』、ひつじ書房、pp. 185-212
44		統計と機械学習による日本語史研究	22～25	10	小木曾智信・小町守・松本裕治、2013 年、「歴史的日本語資料を対象とした形態素解析」、『自然言語処理』20（5）、pp. 727-748 小木曾智信、2013 年、「中古仮名文学作品の形態素解析」、『日本語の研究』9（4）、pp. 49-62

(年度は平成)

5-4. 国際日本文化研究センター

2010-2015 年度に日文研で実施した各共同研究の成果の一部を次ページ以降の表で紹介しています。

日文研は日本文化に関する国際的・学際的・総合的な共同研究を展開しています。共同研究の実施に際しては、各共同研究に海外在住の研究者を共同研究員として配置して海外の研究者コミュニティとの連携を強化したほか、国際共同研究 2 件を実施しました。また、毎年 1 件公募形式で共同研究課題を募集しました。

「仏教から見た前近代と近代」の研究成果『妙貞問答を読む ― ハビアン の 仏教批判』(法蔵館)は、近世のキリシタンによる仏教批判の著作の解題として、学術的・文献学的な意義が大きく、「キリシタン思想史研究にとっては画期的な出来事」(『宗教研究』)の評を得ました。本研究と関連して、主宰者編集の『仏教辞典』(朝倉書店)は、2014 年度の毎日出版文化賞(企画部門)を受賞するなど、世評も高く、読む辞典として、読書界にも好評裏に迎えられました。

「怪異・妖怪文化の伝統と創造 ― 研究のさらなる飛躍に向けて ―」は、同じ研究者による共同研究の成果を継承し・発展させた研究です。本共同研究とともに関連し、社会的発信や関連資料の収集・公開の点でも、日文研データベースとしてさらに「怪異・妖怪絵姿」、「怪異妖怪画像」、「怪異・妖怪伝承などを構築して、研究者や一般市民の研究の関心や期待に応えています。また本共同研究代表者の小松和彦(現日文研所長)は、2013 年度に紫綬褒章を受賞し、2016 年に文化功労者に選ばれました。

「夢と表象 ― メディア・歴史・文化 ―」は、本共同研究の集大成として開催された国際研究集会並びに公開講演会の模様が、朝日新聞の夕刊文化面においてその詳細が記録・報道され、大きな社会的な影響やインパクトが見られました。

「建築と権力の相関性とダイナミズムの研究」は、研究成果である『現代の建築家』(井上章一著)が「日本の現代建築史を覆す勇氣ある論」(朝日新聞、隈研吾氏(建築家・東京大学教授))との書評を得ました。加えて、『権力の館を考える』(御厨貴編著)が、2016 年度の放送大学の授業科目「権力の館を考える(16)」やその教材となるなど、社会的な発信や文化的な意義として、多大なものがありました。

「近代日本における指導者像と指導者論」は、その成果論集である『近代日本のリーダーシップ ― 岐路に立つ指導者たち』(千倉書房)が東京財団ウェブサイト上の書評において好意的に取り上げられました。その他特筆すべき成果として、本共同研究会の幹事を務めた、瀧井一博教授の著書『伊藤博文 ― 知の政治家』(中央公論)があります。同書はサントリー学芸賞(政治・経済部門)を受賞し、読書界においても読売新聞の書評などで高い評価を得たほか、「毎日新聞」などの各紙の書評欄にこぞって取り上げられました。瀧井教授はさらに、2015 年には、日独の学術・文化交流寄与を評価され、フィリップ・フランツ・フォン・

ジーボルト賞を受賞しました。

「仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論」の最終的な成果である基本語彙集のフランス語による出版は、国際的な学术交流の成果発信のあり方としても大いに評価されるものと考えています。成果論集として上梓された語彙集である、Philippe Bonnin／西田雅嗣／稲賀繁美（編）、*Vocabulaire de la Spatialité Japonaise*（『日本の生活空間』、CNRS Editions）は、フランス建築アカデミーより、建築アカデミー 2014 年度書籍賞として顕彰されフランス本国でも大きな反響を呼び、高い評価を受け、日本文化を改めてフランス社会に知らしめたという、社会的意義を有する刊行となりました。

「昭和 40 年代の日本のポピュラー音楽の社会・文化的分析」は、その研究成果物が、「読売」紙・夕刊文化面で取り上げられたほか、研究代表者の活動は、毎日新聞など各紙などのメディアからも大きく取り上げられました。

「東洋美学・東洋的思惟」を問う：自己認識の危機と将来への課題」は、共同研究員 2 名がそれぞれ 2012 年度と 2014 年度のサントリー学芸賞（芸術・文学部門）を受賞するなど新進気鋭の多くの若手研究者を輩出し、その研究成果を社会に還元しました。

「帝国と高等教育—東アジアの文脈—」は、その成果論集が、日韓両国の専門的な学術誌（『歴史外 現実』『植民地教育史研究』）の書評欄でも「緻密で実証的研究方法と姿勢に感嘆する」との評を受け、本研究の画期性や先見性が高く評価されました。

「民謡研究の新しい方向」は、特に媒介者（エイジェント）の自覚を持った人物の役割に着目し、彼らが民俗学、民族音楽学と、レコード産業や興行界を結びながら、音楽家と聴衆の双方に広範囲の影響を与えたことを検証することで、日本についての研究とそれ以外の研究とが向かい合わぬまま進められてきた従来の民謡研究に新しい視角を提供しました。この研究上の意義はさきわめて大きく、本共同研究の主要メンバーである輪島裕介、大和田俊之両氏が、本研究を支える個人研究の成果をもって 2011 年度のサントリー学芸賞を受賞しました。

「日記の総合的研究」は、史学会の機関誌『史学雑誌』の「2010 年の歴史学界—回顧と展望欄」欄で取り上げられたほか、成果集についても「最高レベルの研究成果」の文言が同誌に載るなど、歴史学界において新たな潮流をつくりつつあります。また本研究の成果の一環として、研究代表者の倉本一宏教授は、日文研のデータベース「撰関期古記録」を順次蓄積・公開し、研究者や一般社会への成果還元に努めています。また本研究の要の一つである『御堂関白記』のユネスコ記憶遺産への登録（2013 年 6 月）は、研究代表者の貢献によるところが大きいといえます。

5-4-A：共同研究の主な成果（各 3 件まで）

種別区分等			研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
1	第 1 研究域 動態研究	伝 統	仏教からみた前近代と近代	20～23	29	末木文美士他、2011 年、「近代と仏教」Modernity and Buddhism」、第 41 回国際研究集会、於：国際日本文化研究センター 末木文美士（編）、2012 年、国際研究集会報告書 41『近代と仏教』、157 頁 末木文美士（編）、2014 年、『妙貞問答を読む—ハビアン』の仏教批判—、法蔵館、487 頁
			日本庭園のあの世とこの世—自然、芸術、宗教	24～25	24	白幡洋三郎（編）、2014 年、『作庭記』と日本の庭園、思文閣出版、353 頁

	種別区分等		研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果	
3	第1研究域 動態研究	現代	文明と身体	21 ～ 23	23		
4			人文諸学の科学史的研究	24 ～ 26	28		
5			昭和戦後期における日本映画史の再構築	26 ～ 26	17	谷川健司（編）、2016 年、『戦後映画の産業空間 資本・娯楽・興行』、森話社、348 頁	
6			戦後日本文化再考	27 ～ 29	54		
7		基層	怪異・妖怪文化の伝統と創造—研究のさらなる飛躍に向けて—	22 ～ 24	30	小松和彦、2010 年、『妖怪文化の伝統と創造—絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで（妖怪文化叢書）』、せりか書房、627 頁 人間文化研究機構連携展示『百鬼夜行の世界—百鬼夜行絵巻の系譜—』（2013 年 7 月 18 日～8 月 30 日、於：国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館（※日文研は展示資料を提供）） 怪異・妖怪画像データベース（2014 年、国際日本文化研究センターウェブサイトで公開）	
8			戦争と鎮魂	26 ～ 28	35		
9		第2研究域 構造研究	人間	性欲の社会史	19 ～ 22	26	井上章一・斎藤光・澁谷知美・三浦順子（編）、2010 年、『性的なことば』、講談社、446 頁
10				夢と表象—メディア・歴史・文化—（※平成 26 年度は「夢と表象—その統括と展望」）	23 ～ 26	34	笹生美貴子、2014 年、「明石一族を取り巻く「夢」—夢実現の共同体—」の視座から—、『日本研究』第 50 集、pp. 41-59 荒木浩（編）、2015 年、『夢見る日本文化のパラダイム』、法蔵館、562 頁 荒木浩他、公開講演会「夢を観る／夢を聴く—夢の文化と芸術世界—」（2015 年 3 月 2 日、於：国際日本文化研究センター）
11	説話文学と歴史史料の間に			27 ～ 29	40		
12	社会		日本の近代化とプロテスタンティズム	21 ～ 22	38	上村敏文・笠谷和比古（編）、2013 年、『日本の近代化とプロテスタンティズム』、教文館、440 頁	
13			デジタル環境が創成する古典画像資料研究の新時代	23 ～ 24	17	楊曉捷・小松和彦・荒木浩（編）、2013 年、『デジタル人文学のすすめ』、勉誠出版、293 頁	
14			建築と権力の相関性とダイナミズムの研究	24 ～ 25	14	井上章一、2014 年、『現代の建築家』、ADA エディタートキョー、504 頁 御厨貴・井上章一（編）、2015 年、『建築と権力のダイナミズム』、岩波書店、336 頁 御厨貴（編著）、2016 年、『権力の館を考える』、放送大学教育振興会、354 頁	
15			おたく文化と戦時下・戦後	26 ～ 27	31		
16	自然		生命文明の時代を創造する	22 ～ 23	74	安田喜憲（編）、2011 年、『対論 文明の原理を問う』、麗澤大学出版会、204 頁 安田喜憲他、2010 年、「環境と文明：過去・現在・未来」、第 39 回国際研究集会（於：国際日本文化研究センター）	
17			現代民俗研究方法論の学際的研究	24 ～ 24	14	山泰幸・小松和彦（編著）、2015 年、『異人論とは何か ストレンジャーの時代を生きる』、ミネルヴァ書房、316 頁	
18			日本的時空観の形成	25 ～ 25	28		

種別区分等			研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
19	第2研究域 構造研究	自然	画像資料（絵葉書・地図・旅行案内・写真等）による帝国域内文化の再検討	26～28	40	
20		制度	近代日本の公と私、官と民—比較の視点から—	19～22	19	猪木武徳・マルクス リュッターマン（編著）、2014年、『近代日本の公と私、官と民』、NTT出版、412頁
21			近代日本における指導者像と指導者論	22～24	22	瀧井一博、2010年、『伊藤博文—知の政治家』、中公新書、376頁 戸部良一（編）、2014年、『近代日本のリーダーシップ—岐路に立つ指導者たち』、千倉書房、464頁 戸部良一他、2014年、「近代に於ける日本指導者像」、シンポジウム（於：中央研究院アジア太平洋研究センター（台湾））
22			徳川社会と日本の近代化—17～19世紀における日本の文化状況と国際環境—	23～25	44	笠谷和比古（編）、2015年、『徳川社会と日本の近代化』、思文閣出版、708頁
23	第3研究域 文化比較	制度	日本の軍事戦略と東アジア社会—日中戦争期を中心として—	26～27	24	
24		生活	植民地帝国日本における支配と地域社会	20～22	33	松田利彦他、2011年、「植民地帝国日本における支配と地域社会」、第40回国際研究集会（於：国際日本文化研究センター） 松田利彦・陳延媛（編）、2013年、『地域社会から見る帝国日本と植民地 朝鮮・台湾・満州』、思文閣出版、828頁 松田利彦（編）、2013年、『植民地帝国日本における支配と地域社会』、国際研究集会報告書40、186頁
25			仕掛けと概念—空間と時間の日仏比較建築論—	23～24	26	フィリップ ボナン他、2012年、「日仏の空間語彙：概念と仕掛け」、第43回国際研究集会（於：国際日本文化研究センター） フィリップ ボナン・西田雅嗣・稲賀繁美（編）、2013年、『Pour un Vocabulaire de la Spatialité Japonaise』、国際研究集会報告書43、230頁 Philippe Bonnin, Nishida Masatsugu, Inaga Shigemi (ed.), 2014, <i>Vocabulaire de la spatialité japonaise</i> =日本の生活空間, CNRS Editions, 605p.
26			昭和40年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析—ザ・タイガースの研究—	24～26	18	磯前順一、2013年、『ザ・タイガース 世界はボクらを待っていた』（集英社新書）、集英社、288頁 磯前順一、2014年、「社会史版「ザ・タイガース 世界はボクらを待っていた」—〈戦後民主主義と高度経済成長〉再考」、人間文化研究機構第24回公開講演会「世界の中の日本研究—京都から語る—」 磯前順一・黒崎浩行（編）、2015年、『ザ・タイガース研究論』、近代映画社、210頁
27			日本の舞台芸術における身体—死と生、人形と人工体—	27～28	21	

	種別区分等		研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
28	第3研究域 文化比較	思想	「東洋美学・東洋的思惟」を問う：自己認識の危機と将来への課題	20～23	89	稲賀繁美他、2010年、「東洋美学と東洋的思惟を問う：植民地帝国下の葛藤するアジア像（Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of “Asia” under the Colonial Empires）」、第38回国際研究集会（於：国際日本文化研究センター） 稲賀繁美（編）、2011年、『東洋美学と東洋的思惟を問う：植民地帝国下の葛藤するアジア像』、国際研究集会報告書38、388頁 稲賀繁美（編）、2012年、『東洋意識 夢想と現実のあいだー1887-1953ー』、ミネルヴァ書房、582頁
29			日本仏教の比較思想的研究	25～26	32	末木文美士（編）、2015年、『比較思想から見た日本仏教』、山喜房佛書林、547頁 末木文美士他、2015年、「比較思想から見た日本仏教」、第46回国際研究集会（於：国際日本文化研究センター）
30	第4研究域 文化関係	旧交圏Ⅰ	都市文化とは何か？－ユーラシア大陸における都市文化の比較史的研究－	19～22	35	白幡洋三郎・錦仁・原田信夫（編著）、2011年、『都市歴史博覧ー都市文化のなりたち・しくみ・たのしみー』、笠原書院、451頁
31		旧交圏Ⅰ	帝国と高等教育－東アジアの文脈－	22～23	19	松田利彦他、2012年、「帝国と高等教育－東アジアの文脈から（Empire and the Higher Education in East Asia）」、第42回国際研究集会、（於：国際日本文化研究センター） 酒井哲哉・松田利彦（編）、2013年、『帝国と高等教育－東アジアの文脈から－』、国際研究集会報告書42、265頁 酒井哲哉・松田利彦（編）、2014年、『帝国日本と植民地大学』、ゆまに書房、638頁
32			21世紀10年代日本文化の軌道修正－過去の検証と将来への提言－	25～27	58	稲賀繁美（編）、2017年、『海賊史観からみた世界史の再構築－交易と情報流通の現在を問い直す－』、思文閣出版、814頁
33			万国博覧会と人間の歴史－アジアを中心に－	25～27	29	佐野真由子（編）、2015年、『万国博覧会と人間の歴史』、思文閣出版、741頁 佐野真由子他、2015年、『万国博覧会と人間の歴史』、第48回国際研究集会（於：国際日本文化研究センター）
34		旧交圏Ⅱ	文学の中の宗教と民間伝承の融合－宮沢賢治の世界観の再検討－	22～23	18	プラットゥ アブラハム ジョージ・小松和彦（編）、2012年、『宮沢賢治の深層－宗教からの照射－』、法蔵館、492頁
35			日本文化形成と戦争の記憶	24～24	58	
36		新交圏	植民地帝国日本における知と権力	25～28	35	
37			「日本浪漫派」とアジア	22～22	21	
38		新交圏	「心身／身心」と「環境」の哲学－東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み－	23～26	43	伊東貴之（編）、2016年、『「心身／身心」と環境の哲学－東アジアの伝統思想を媒介に考える－』、汲古書院、771頁 伊東貴之他、2016年、「「心身／身心」と「環境」の哲学－東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み－」、第44回国際研究集会、（於：国際日本文化研究センター）

種別区分等			研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
39	文化関係 第4研究域	新交圏	明治日本の比較文明史的考察—その遺産の再考—	27～29	33	
40	第5研究域 文化情報	日本における日本研究	民謡研究の新しい方向	19～22	27	輪島裕介、2010年、『創られた「日本の心」神話：「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』、光文社、358頁 大和田俊之、2011年、『アメリカ音楽史：ミンストレル・ショウ、ブルースからヒップホップまで』、講談社、308頁 細川周平（編著）、2012年、『民謡からみた世界音楽—うたの地脈を探る—』、ミネルヴァ書房、425頁
41			日記の総合的研究	22～25	67	国際日本文化研究センター、2012年、「撰関期古記録」データベース、国際日本文化研究センターウェブサイト 倉本一宏、2013年、『藤原道長「御堂関白記」を読む（講談社選書メチエ）』、講談社、272頁 倉本一宏（編）、2015年、『日記・古記録の世界』、思文閣出版、776頁
42			日本大衆文化とナショナリズム	26～26	14	朴順愛・谷川健司・山田奨治（編）、2016年、『大衆文化とナショナリズム』、森話社、339頁
43	第5研究域 文化情報	外国における日本研究Ⅰ	日本における翻訳の文化史	21～22	22	
44			東アジア近現代における知的交流—概念編成を中心に—	22～24	81	鈴木貞美他、2011年、「東アジアにおける知的交流—キイ・コンセプトの再検討」、第44回国際研究集会（於：国際日本文化研究センター） 孫江・劉建輝（編著）、2014年、『東アジアにおける近代知の空間の形成』、東方書店、433頁 鈴木貞美・劉建輝（編）、2013年、『東アジアにおける知的交流—キイ・コンセプトの再検討』、国際研究集会報告書44、405頁
45			日本の教育文化の複数地域展開に関する比較研究—ブラジル・フィリピン・ハワイ・アメリカの日系教育史を中心に—	25～26	26	根川幸男・井上章一（編著）、2016年、『越境と連動の日系移民教育史—複数文化体験の視座—』、ミネルヴァ書房、453頁
46			マンガ・アニメで日本研究	25～27	25	山田奨治（編著）、2017年、『マンガ・アニメで論文・レポートを書く—「好き」を学問にする方法』、ミネルヴァ書房、268頁
47			「満州」学の整理と再編	19～22	42	
48		外国における日本研究Ⅱ	新大陸の日系移民の歴史と文化	23～26	28	細川周平（編著）、2017年、『日系文化を編み直す—歴史・文芸・接触—』、ミネルヴァ書房、416頁

（年度は平成）

5-5. 総合地球環境学研究所

2010-2015年度に地球研で実施した各共同研究の成果の一部を次ページ以降の表で紹介しています。

地球研では、地球環境問題の解決に資する「総合地球環境学」の構築に即した文理融合型・課題解決型の国際共同研究（研究プロジェクト）を実施しています。期間中に研究プロジェクトに参加した研究者や社会の多様なステークホルダーは5,835名にのぼり、自然系50.8%、人文系31.0%、社会系5.1%、複合系

13.0%と文理融合性・学際性が高いことが特徴です。また、共同研究の成果には1,930本の論文、484冊の書籍が含まれます。国際共同研究の推進の結果、国際共著率は46.6%に達し、国内の大学等研究機関の中でも高いレベルにあります。

地球研は、環境変動と人間活動の相互作用を多様な時空間スケールの中で捉えて地球環境問題の実態解明を行った複数の共同研究を実施し、多くの成果を公表しています。なかでも、「農業が環境を破壊するとき——ユーラシア農耕史と環境」研究プロジェクトは、ユーラシア大陸という広大な地域における農耕活動と自然環境の関係とその変遷を、過去のさまざまなデータ（絵画などの歴史資料やプロキシデータ（種子、花粉、プラントオパール、DNAなど））を分析することで、1万年という非常に長い時間軸から解明しました。その成果は、『焼畑の環境学』（2011年）や『食と農の未来——ユーラシア一万年の旅』（2013年）など多くの啓発的書籍として刊行したほか、“Consilience of genetics and archaeobotany in the entangled history of rice”などが国際誌に掲載され、国際的にも高い評価を得ています。また、「環境変化とインダス文明」研究プロジェクトは、文系・理系の広範なデータによる実証的な分析により、インダス文明の衰退の原因は、インダス川下流域での洪水や海水準変動による海上交通への打撃など多岐にわたる変動に起因し、結果として、インダス川流域から東への大きな人口移動が起こり、地域ネットワークの微妙なバランスが崩壊したことを明らかにしました。成果として、“Current Studies on the Indus Civilization”（2010-2012年、全9巻）や『インダス 南アジア基層世界を探る』（2013年）を刊行したほか、教科書にも取り上げられるなど高い評価を受けています。

地球研が設立当初より取り組んできた文理融合という面においても、安定同位体や環境DNAなどの新たな分析手法を生かした共同研究に取り組んでいます。「日本列島における人間——自然相互関係の歴史的・文化的検討」研究プロジェクトは、『シリーズ日本列島の三万五千年——人と自然の環境史』（2011年、全6巻）を刊行したほか、「病原生物と人間の相互作用環」研究プロジェクトは、環境DNAなどの新たな分析手法を開発し「環境疾患」という新たな概念を提唱して、国際学術雑誌に共著論文を発表しました。また、「都市の地下環境に残る人間活動の影響」研究プロジェクトは、アジアの都市における人間活動の地下環境に与える影響を、地下環境（自然）のcapacity（貯留量・涵養量等）として定量的に評価し、UNESCOなどとの共催による国際シンポジウムや多くの査読付き論文、書籍（日本語3冊・英語2冊）を通して広く発信しました。なかでも“Groundwater sustainability strategies”は地質学の分野で最も影響力の高い雑誌に掲載され、高い評価を得ています。さらに、「温暖化するシベリアの自然と人——水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応」研究プロジェクトが刊行した『シベリア 温暖化する極北の水環境と社会』（2015年）は、「分野横断・学際研究」の完成形の1つの形態を示したものとして高く評価され、水文・水資源学会学術出版賞を受賞しました。「高分解能古気候学と歴史・考古学の連携による気候変動に強い社会システムの探索」研究プロジェクトは、安定同位体による高分解能な気候復元結果を歴史学・考古学の膨大な知見に結びつけ、過去のさまざまな時代に起きた気候変動の実態とともに、気候変動に対する社会の適応のあり方を明らかにしています。成果は学術論文として刊行されているほか、テレビなどでも多く取り上げられるなど高く注目されています。

これら文理融合・学際的な共同研究に加え、第2期には、新たに国、地方自治体、企業、NGO・NPOなど社会のさまざまなステークホルダー（利害関係者）との協働により、具体的な課題の解決に資する「超学際研究」への取組を開始しています。特に、「砂漠化をめぐる風と人と土」研究プロジェクトは、砂漠化の原因のひとつである風食（風による土壌浸食）を防ぎ、作物の収穫量を増やす新技術を開発したことが評価され、第25回日経地球環境技術賞（2015年度）の優秀賞に選ばれました。また、「東南アジアにおける持続可能な食料供給と健康リスク管理の流域設計」研究プロジェクトでは、フィリピンのラグナ湖の再生と地域振興に取り組み、大学・自治体・地元関係者と一体となって、資源保護区の設定、資源の保全と伝統的な知恵を活かした漁法や生態系保全のための新たな政策づくりなどを提案した活動が評価され、フィリピン政

府より「湖の魂（Diwa ng Lawa）」賞が授与されるなど、国際的な地球環境問題の解決に貢献しました。これらの超学際研究の取組は、多くの書籍や査読付き論文として刊行されています。とりわけ「地域環境知形成による新たなコモンズの創生と持続可能な管理」研究プロジェクトのリーダーである佐藤哲教授の著書『フィールドサイエンティスト——地域環境学という発想』（2016年）は、書評（朝日新聞2016年4月17日）において、「科学について、科学と社会の関係について、新たな見通しを提供してくれる書である」との高い評価を得ました。

5-5-A：共同研究の主な成果（各3件まで）

	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
1	研究 プロ ジェ クト	都市の地下環境に残る 人間活動の影響	16～22	81	Tom Gleeson, J. Vander Steen, M. A. Sophocleous, Makoto Taniguchi, William M. Alley, Diana M. Allen, Yangxiao Zhou, 2010, "Groundwater sustainability strategies", <i>Nature Geoscience</i> , 3, pp.378-379 (DOI: 10.1038/ngeo881) Taniguchi, M. (Ed.), 2011, <i>Groundwater and Subsurface Environments: Human Impacts in Asian Coastal Cities</i> , Springer, pp.312 (DOI: 10.1007/978-4-431-53904-9) 谷口真人、2011年、『地下水流動—モンスーンアジアの資源と循環』、共立出版、272頁
2		日本列島における人間—自然相互関係の歴史的・文化的検討	15～22	133	安溪遊地（編）、2011年、『奄美沖縄 環境史資料集成』、南方新社、842頁 湯本貴和（編）、2011年、『シリーズ日本列島の三万五千年—人と自然の環境史』、文一総合出版（全6巻、第1巻：310頁、第2巻：333頁、第3巻：284頁、第4巻：351頁、第5巻：381頁、第6巻：246頁） Yumoto, T., 2012, "Human-environment interaction and climate in the Japanese Archipelago", <i>PAGES news</i> , 20(2), pp. 84-85
3		農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境	16～22	97	Fuller, DQ, Sato, YI, Castillo, C, Qin, L, Weisskopf, AR, Kingwell-Banham, EJ, Song, JX, Ahn, SM, van Etten, J, 2010, "Consilience of genetics and archaeobotany in the entangled history of rice", <i>Archaeological and Anthropological Sciences</i> , 2 (2), pp. 115-131 (DOI: 10.1007/s12520-010-0035-y) 佐藤洋一郎（監修）、2011年、『焼畑の環境学』、思文閣出版、591頁 佐藤洋一郎、2013年、『食と農の未来 ユーラシア一万年の旅』、昭和堂、256頁

4	研究プロジェクト	病原生物と人間の相互作用環	17 ~ 23	51	Kawabata, Z., Minamoto, T., Honjo, MN., Uchii, K., Yamanaka, H., Suzuki, AA., Kohmatsu, Y., Asano, K., Itayama, T., Ichijo, T., Omori, K., Okuda, N., Kakehashi, M., Nasu, M., Matsui, K., Matsuoka, M., Kong, H., Takahara, T., Wu, D., and Yonekura, R., 2011, "Environment-KHV-carp-human linkage as a model for environmental diseases", <i>Ecological Research</i>, 26, pp.1011-1016 (DOI: 10.1007/s11284-011-0881-9) Kawabata Z. (ed.), 2011, "Environmental change, pathogens, and human linkages", <i>Ecological Research</i>, 26, pp. 863-916 (DOI: 10.1007/s11284-011-0875-7) and pp.1009-1049 (DOI: 10.1007/s11284-011-0885-5) Takahara, T., Minamoto, T., Yamanaka, H., Doi, H. and Kawabata, Z., 2012, "Estimation of fish biomass using environmental DNA", <i>PLoS ONE</i>, 7 (4), e35868-35875, (DOI: 10.1371/journal.pone.0035868)
5		民俗／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷	17 ~ 23	109	窪田順平監修、2012 年、『中央ユーラシア環境史』（全 4 巻）、臨川書店 Sachiko Okamoto, Kazuhiro Naoki, Jumpei Kubota, 2014, "The disappearance of glaciers in the Tien Shan Mountains in Central Asia at the end of Pleistocene", <i>Quaternary Science Reviews</i> 103: 26-33. (DOI: http://dx.doi.org/10.1016/j.quascirev.2014.09.006) Takashi Chiba, Kunihiko Endo, Toshihiko Sugai, Tsuyoshi Haraguchi, Reisuke Kondo, Jumpei Kubota, 2016, "Reconstruction of Lake Balkhash levels and precipitation/evaporation changes during the last 2000 years from fossil diatom assemblages". <i>Quaternary International</i> Vol. 397, pp. 330-341. (DOI: http://dx.doi.org/10.1016/j.quaint.2015.08.009)
6		環境変化とインダス文明	16 ~ 23	60	Osada Toshiki (ed.), 2010-2012, <i>Current Studies on the Indus Civilization</i>, Manohar Publishers and Distributors) (全 9 巻、第 1 巻：178 頁、第 2 巻：135 頁、第 3 巻：109 頁、第 4 巻：163 頁、第 5 巻：111 頁、第 6 巻：163 頁、第 7 巻：187 頁、第 8 巻：800 頁、第 9 巻：269 頁) 長田俊樹、2013 年、『インダス文明の謎—古代文明神話を見直す』、京都大学学術出版会、323 頁 長田俊樹（編）、2013 年、『インダス 南アジア基層世界を探る』、京都大学学術出版会、454 頁
7		東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史	17 ~ 23	69	内山純蔵・カティ・リンドストロム（編）、2010-2012、『東アジア内海文化圏の景観史と環境』（全 3 巻） <i>Journal of World Prehistory</i> 2014 27 (3-4): Springer, pp. 197-324 (本プロジェクトのメンバーのみで執筆・編集した特集号) Craig, O.E., Saul, H., Lucquin, A., Nishida, Y., Taché, K., Clarke, L., Thompson, A., Altoft, D.T., Uchiyama, J., Ajimoto, M., Gibbs, K., Isaksson, S., Heron, C.P. and Jordan, P. "Earliest evidence for the use of pottery", <i>Nature</i>, (DOI: 10.1038/nature12109. 2013)

8	研究プロジェクト	社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス	17 ~ 23	46	Chieko Umetsu, Thamana Lekprichakul, Takeshi Sakurai, Taro Yamauchi, Yudai Ishimoto, Hidetoshi Miyazaki, 2014, "Dynamics of Social-ecological Systems: The Case of Farmers' Food Security in Semi-Arid Tropics", in Shoko Sakai and Chieko Umetsu eds., <i>Social-Ecological Systems in Transition</i>, pp. 157-178, Springer. (DOI: 10.1007/978-4-431-54910-9_9) Ando K., Shinjo H., Kuramitsu H., Miura R., Sokotela S., Funakawa S., 2014, "Effects of cropping and short-natural fallow rotation on soil organic carbon in the Eastern Province of Zambia", <i>Agriculture, Ecosystems & Environment</i>, 196, pp. 34-41 Hidetoshi Miyazaki, Yudai Ishimoto, Ueru Tanaka and Chieko Umetsu, 2013, "The role of sweet potato for the crop diversification of small scale farmers in Southern province, Zambia", <i>African Study Monographs</i>, 34 (2) : 119-137.
9		人の生老病死と高所環境—「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応	18 ~ 24	49	奥宮清人 (編)、2011 年、『生老病死のエコロジー：チベット・ヒマラヤに生きる』、昭和堂、241 頁 奥宮清人、2013 年、『高所と健康—低酸素適応と生活変化の相互作用—』、西村書店、171 頁 奥宮清人・稲村哲也 (編)、2013 年、『続・生老病死のエコロジー—ヒマラヤとアンデスに生きる身体・ところ・時間』、昭和堂、322 頁
10		人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生	18 ~ 24	95	Yamamura, Norio, Fujita, Noboru, Maekawa, Ai (Eds.), 2013 <i>The Mongolian Ecosystem Network, Environmental Issues Under Climate and Social Changes</i> (Ecological Research Monographs), Springer, 320p. Sakai, Shoko, Umetsu, Chieko (Eds.), 2014, <i>Social-Ecological Systems in Transition</i> (Global Environmental Studies), Springer, 198p. Ishii, R., Sakai, S., Fujita, N., Itioka, T., Yamamura, N., 2014, "Collapse and restoration of ecosystem networks under human activity", <i>Global Environmental Research</i> 18, pp. 133-143
11		熱帯アジアの環境変化と感染症	18 ~ 24	106	門司和彦・安本晋也・渡辺知保 (編著)、2014 年、『エコヘルス—21 世紀におけるあらたな健康概念—』、医歯薬出版、122 頁 Asakura T, Mallee H, Tomokawa S, Moji K, Kobayashi J., 2015, "The ecosystem approach to health is a promising strategy in international development: lessons from Japan and Laos", <i>Globalization and Health</i>, 11:3 (DOI: 10.1186/s12992-015-0093-0) Sato M, Pongvongsa T, Sanguankiat S, Yoonuan T, Kobayashi J, et al., 2015, "Patterns of trematode infections of <i>Opisthorchis viverrini</i> (Opisthorchiidae) and <i>Haplorchis taichui</i> (Heterophyidae) in human populations from two villages in Savannakhet Province, Lao PDR", <i>Journal of Helminthology</i>, 89 (4), pp. 439-445

12		温暖化するシベリアの自然と人—水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応	19 ~ 25	76	Fedorov, A.N., Gavriliev, P.P., Konstantinov, P.Y., Hiyama, T., Iijima, Y. and Iwahana, G., 2014, “Estimating the water balance of a thermokarst lake in the middle of the Lena River basin, eastern Siberia”, <i>Ecohydrology</i>, 7, pp. 188-196 (DOI: 10.1002/eco.1378). Oshima, K., Tachibana, Y. and Hiyama, T., 2015, “Climate and year-to-year variability of atmospheric and terrestrial water cycles in the three great Siberian rivers”, <i>Journal of Geophysical Research Atmospheres</i>, 120, pp. 3043-3062 (DOI: 10.1002/2014JD022489). 檜山哲哉・藤原潤子（編著）、2015年、『シベリア 温暖化する極北の水環境と社会』、環境人間学と地域、京都大学学術出版会、511頁（平成28年度水文・水資源学会 学術出版賞を受賞）
13	研究プロジェクト	アラブ社会におけるなりわい生態系の研究—ポスト石油時代に向けて	19 ~ 25	106	Nawata, H., Ishiyama, S. and Nakamura, R. (ed.), 2013, <i>Exploitation and Conservation of Middle East Tree Resources in the Oil Era</i> (Arab Subsistence Monograph Series 1), Kyoto: Shoukadoh Book Sellers, 248p. (in Arabic, English, French and Swahili) Nawata, H. (ed.), 2013, <i>Dryland Mangroves: Frontier Research and Conservation</i> (Arab Subsistence Monograph Series 2), Kyoto: Shoukadoh Book Sellers, 132p. (in English and Arabic) 縄田浩志・篠田謙一（編）、2014年、『砂漠誌—人間・動物・植物が水を分かち合う知恵』、国立科学博物館叢書15、東海大学出版部、474頁
14		東南アジアにおける持続可能な食料供給と健康リスク管理の流域設計	21 ~ 25	33	Ryohei Kada, 2014, “Valuation of Non-Marketed Agricultural Ecosystem Services, and Food Security in Southeast Asia”, in Nobuhiro Kaneko, Shinji Yoshiura, Masanori Kobayashi (eds.), <i>Sustainable Living with Environmental Risks</i>, pp. 111-121 (DOI: 10.1007/978-4-431-54804-1_10) R. F. Rañola Jr., Fe M. Rañola, Maria Francesca O.Tan, Ma. Cynthia S.Casin, 2014, “Emerging Socio-Economic and Environmental Issues Affecting Food Security: A Case Study of Silang-Santa Rosa Subwatershed”, in Nobuhiro Kaneko, Shinji Yoshiura, Masanori Kobayashi (eds.), <i>Sustainable Living with Environmental Risks</i>, pp. 123-135 (DOI: 10.1007/978-4-431-54804-1_11) B.H.N.Razafindrabe, M.A. Cuesta, B. He, R.F. Rañola Jr., K. Yaota, S.Inoue, S. Saito, T. Masuda, R.N. Concepcion, A. Santos-Borja & R. Kada, 2014, “Flood risk and resilience assessment for Santa Rosa-Silang subwatershed in the Laguna Lake region, Philippines”, <i>Environmental Hazards</i>, 14 (1), pp. 16-35 (DOI: 10.1080/17477891.2014.981497)

15	研究プロジェクト	メガシティが地球環境に及ぼすインパクト—そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案	19～26	74	Mori, K., Fujii, T., Yamashita, T., Mimura, Y., Uchiyama, Y., and Hayashi, K., 2015, “Visualization of a City Sustainability Index (CSI): Towards Transdisciplinary Approaches Involving Multiple Stakeholders”, <i>Sustainability</i>, 7 (9): 12402-12424 Holcim Awards 2014, Acknowledgement: Amemiya T., Okabe. A. et al. Megacity Skeleton (住民参加型高密度居住地改善プロジェクトに授与) Cynthia Henny and Ami A. Meutia, 2014, “Urban Lake Management Strategy: Effect of distinct types of lake surrounding and shoreline landscape development on water quality of urban lakes in Megacity Jakarta”, World Lake Conference 15th Perugia (Italy). (The Ibaraki Kasumigaura Prize を受賞)
16		統合的水資源管理のための「水土の知」を設える	22～27	117	Nakagami Ken'ichi, Mr. G. A. Choudhury, Prof. Dr. LI Jianhua Prof. Dr. Fukushi Kensuke (ed.), 2014, <i>Strategic Adaptation towards Water Crisis and IWRM</i>, The University Press Limited, 290p. (ISBN: 978 984 506 133 9.) Setiawan, B.I., Arief Imansyah, Ch. Arif, Ts. Watanabe, M. Mizoguchi, H. Kato 2014, “SRI Paddy Growth and GHG Emission at Various Groundwater Levels”, <i>Journal of Irrigation and Drainage</i> (Wiley Online Library), pp. 1-9 (DOI: 10.1002/ird.1866) Akça, E., Fujikura, R., & Sabbağ, Ç. 2014, “Atatürk Dam resettlement process: increased disparity resulting from insufficient financial compensation”, <i>International Journal of Water Resources Development</i> 29 (1), pp. 101-108.
17		東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティの向上	21～28	217	Satoshi Ishikawa, Kazuo Watanabe, 2015, <i>Area-capability: Promoting the Use of Local Resources</i>, Inter-University Research Institute Corporation, National Institutes for the Humanity, Research Institute for Humanity and Nature, Japan (ISBN 978-4-906888-19-1), 17p. Hiroyuki Motomura and Satoshi Ishikawa, 2013, <i>Fish Collection Building and Procedures Manual</i>, Kagoshima University Museum and Research Institute for Humanity and Nature, 70p. (translated by Akira Takagi and Yuka Ogata) Ryutaro Kamiyama, Tsutomu Miyata, Hisashi Kurokura, Satoshi Ishikawa, 2015, “The impact of distribution change on fisheries in Southeast Asia: a case study in the Batan Estuary, Aklan, Central Philippines”, <i>Fisheries Science</i> 81 (2): 401-408. (DOI: 10.1007/s12562-015-0855-x)
18		砂漠化をめぐる風と人と土	22～28	80	佐々木タ子、2013 年、講演「西アフリカ・サヘル地域の村落における農耕民および牧畜民の生活と環境意識に関する研究」、於：システム農学会 2013 年度秋季大会（会場：岩手大学農学部、2013 年 11 月 1 日～2 日）【2013 年度奨励賞受賞記念講演】 清水貴夫、2013 年、口頭発表「西アフリカ内陸部の「伝統」教育としてのクルアーン学校 [その 1] —ニジェール共和国ファカラ地方の事例より」、於：第 11 回アフリカ教育研究フォーラム（会場：京都女子大学）、2013 年 4 月 12 日～13 日【優秀研究発表特別賞】 田中樹・伊ヶ崎健大・真常仁志・飛田哲、2014 年、「風による土壌侵食の抑制と収量向上を両立させる砂漠化対処技術」、『季刊環境研究』176、pp. 5-14【第 41 回日立環境賞（環境大臣賞・優秀賞）】

19	研究プロジェクト	地域環境知形成による新たなコモンズの創生と持続可能な管理	23 ~ 28	181	佐藤宣子・興梠克久・家中茂（編著）、2014 年、『林業新時代—「自伐」がひらく農林家の未来—』、農山漁村文化協会、292 頁 佐藤 哲、2016 年、『フィールドサイエンティスト—地域環境学という発想』、東京大学出版会、234 頁 Makino M., Sakurai Y., 2014, “Towards The Integrated research in fisheries science”, <i>Fisheries Science</i> 80: 227-236 (査読付)
20		アジア太平洋地域の人間環境安全保障—水・エネルギー・食料連環	24 ~ 29	145	Taniguchi Makoto, Aiko Endo, Jason Gurdak, Peter Swarzenski, 2015, <i>Water-energy-food nexus in Asia Pacific Region</i> (Special Issue of Journal of Hydrology Regional Studies) Pedcris M. Orencio, Aiko Endo, Makoto Taniguchi & Masahiko Fujii, 2015, “Using Thresholds of Severity to Threats to and the Resilience of Human Systems in Measuring Human Security”, <i>Social Indicators Research</i> 1-21. (DOI:10.1007/s11205-015-1152-x) Aiko Endo, Kimberly Burnett, Pedcris M. Orencio, Terukazu Kumazawa, Christopher A. Wada, Akira Ishii, Izumi Tsurita and Makoto Taniguchi, 2015, “Methods of the Water-Energy-Food Nexus”, <i>Water</i> 2015 7(10). (DOI:10.3390/w7105806)
21		地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性—歴史生態学からのアプローチ	24 ~ 28	86	Habu, Junko, 2014, “Post-Pleistocene transformations of hunter-gatherers in East Asia”, in Vicki Cummings, Peter Jordan and Marek Zvelebil (eds.), <i>Oxford Handbook of the Archaeology and Anthropology of Hunter-Gatherers</i> , Oxford: Oxford University Press, pp. 507-520. 羽生淳子、2015 年、「歴史生態学から見た長期的な文化変化と人為的生体システム：縄文時代前・中期の事例から」、『第四紀研究』54: 299-310. (査読付) 羽生淳子・伊藤由美子・安達香織（編）、2016 年、『青森市合子沢松森（4）遺跡—2008・2009・2010 年度発掘調査報告書』、「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性」プロジェクト発行
22		高分解能古気候学と歴史・考古学の連携による気候変動に強い社会システムの探索	23 ~ 30	88	中塚武、2014 年、「平家はなぜ減んだのか—気候変動という視点」、『HUMAN』7: 132-141 Akira Kagawa, Masaki Sano, Takeshi Nakatsuka, Tsutomu Ikeda and Satoshi Kubo, 2015, “An optimized method for stable isotope analysis of tree rings by extracting cellulose directly from cross-sectional laths”, <i>Chemical Geology</i> , 393-394: 16-25 中塚武、2015 年、「酸素同位体比がもたらす新しい考古学研究の可能性」、『考古学研究』、62: 17-30
23		生物多様性が駆動する栄養循環と流域圏社会—生態システムの健全性	25 ~ 31	107	熊谷道夫・浜端悦治・奥田昇、2015 年、『琵琶湖は呼吸する』、海鳴社、東京、180 頁 奥田昇、2015 年、「リン酸—酸素安定同位体分析が拓くリン循環研究の黎明」、『地球環境』20、pp. 103-110 Itoh, M., Y. Kobayashi, T.-Y. Chen, T. Tokida, M. Fukui, H. Kojima, T. Miki, I. Tayasu, F.-K. Shiah & N. Okuda, 2015, “Effect of interannual variation in winter vertical mixing on CH4 dynamics in a subtropical reservoir”, <i>Journal of Geophysical Research: Biogeosciences</i> , 120: 1246-1261

(年度は平成)

5-6. 国立民族学博物館

2010-2015年度に民博で実施した各共同研究の成果の一部を下表で紹介しています。民博では、文化人類学・民族学およびその関連分野の共同研究を、文化人類学・民族学の国際的集積拠点として推進しています。

実施した共同研究のうち、高齢化社会のウェルビーイング研究を進めた国際共同研究「ウェルビーイング（福祉）の思想とライフデザイン」では、高齢者福祉を促進させる生活環境の変革が新たな地域文化を生み出す過程を解明し、新たな共助や協働実践のあり方について、『「障害のない社会」にむけて——ウェルビーイングへの問いとノーマライゼーションの実践』（2012年）、*The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together*（2013年）などを刊行しました。また、「中国における社会と文化の再構築——グローカリゼーションの視点から」は、近代中国のグローバル化をテーマとし、中国社会科学院と協力して国際共同研究を進め、研究成果として『中国社会における文化変容の諸相——グローカル化の視点から』（2015年）を刊行しました。

「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に——」および「内陸アジアの宗教復興——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開」の成果物は朝日新聞（2015年）において、また、「人の移動と身分証明の人類学」の成果物は読売新聞（2017年）においてそれぞれ書評が掲載されたほか、「アジア・アフリカ地域社会における〈デモクラシー〉の人類学——参加・運動・ガバナンス」の成果物は2014年度国際開発学会奨励賞を受賞しました。

現代的な重要研究課題を扱う学際的共同研究として実施した「捕鯨文化に関する実践人類学的研究」は、捕鯨の現状や問題点を学際的に比較・解明し、国際的に評価されました。また、研究成果として、『捕鯨の文化人類学』（2012年）を刊行しました。

機関研究「マテリアリティの人間学」の各共同研究の成果として、『ミュージアムと負の記憶——戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』（2015年）、『中国地域の文化遺産——人類学の視点から』（2016年）などの刊行のほか、さまざまなワークショップ、国際シンポジウムなどを開催しました。

機関研究「包摂と自律の人間学」についても各共同研究の成果として、『国際開発と協働——NGOの役割とジェンダーの視点』（2013年）、*Healing Alternatives: Care and Education as a Cultural Lifestyle*（2014年）、『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態——東亜人類学者的理論探索』（2014年）などの刊行のほか、口頭発表や論文などの形で成果を公開しました。

展示手法の共同研究では、視覚障害者を対象としたユニバーサル・ミュージアム研究や、被災文化財の保存と活用に関する研究を展開しました。特に後者では、東日本大震災時に被災した民俗文化財の救出、一時保管、応急措置、保存修復の方法を確立したほか、可搬型展示システムを開発して被災地で巡回展示を行いました。

5-6-A：共同研究の主な成果（各3件まで）

通番	種別区分等	研究課題	研究期間（年度）	共同研究者数	共同研究の主な成果
1	共同研究（一般）	国籍とパスポートの人類学	19～22	26	陳天璽・近藤敦・小森宏美・佐々木てる、2012年、『越境とアイデンティフィケーション』、新曜社、476頁
2		地域SNS：ソーシャル・ネットワーク・サービスを活用した新しい地域コミュニティの構築に関する研究	19～22	11	杉本星子（編）、2012年、『情報化時代のローカル・コミュニティ—ICTを活用した地域ネットワークの構築（国立民族学博物館調査報告106）』、国立民族学博物館、247頁

通 番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
3	共同研究（一般）	キリスト教文明とナショナリズム—人類学的研究	19～22	23	杉本良男（編）、2014年、『キリスト教文明とナショナリズム—人類学的比較研究（国立民族学博物館論集2）』、風響社、388頁
4		民俗資料保存論の構築と素材に応じた保存処理法の開発	19～22	14	日高真吾、2015年、『災害と文化財—ある文化財科学者の視点から』、千里文化財団、248頁
5		日本人類学史の研究	19～22	16	山路勝彦（編著）、2011年、『日本の人類学—植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史』、関西学院大学出版会、774頁
6		博物館におけるアイヌ民族とその文化の展示のあり方の再検討	19～22	11	
7		カナダにおける先住民芸術の歴史的展開と知的所有権問題—国立民族学博物館所蔵の北西海岸インディアンとイヌイットの版画の整理と分析を通して	19～22	14	齋藤玲子（編）、2015年、『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題—国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとらえて（国立民族学博物館研究報告131）』、国立民族学博物館、344頁
8		「政治的アイデンティティ」とは何か？—解放運動としての先住民運動	19～22	14	太田好信（編）、2012年、『政治的アイデンティティの人類学—21世紀の権力変容と民主化にむけて』、昭和堂、350頁
9		捕鯨文化に関する実践人類学的研究	20～22	22	岸上伸啓、2012年、『捕鯨の文化人類学』、成山堂書店、354頁
10		聖空間の経営人類学的研究	20～22	34	
11		オーストラリア多文化主義の過去・現在・未来—共生から競生へ	20～22	16	
12		人類の移動誌：進化的視点から	20～23	19	印東道子（編）、2013年、『人類の移動誌』、臨川書店、371頁
13		ポスト社会主義以後の社会変容—比較民族誌的研究	20～23	24	佐々木史郎・渡邊日日（編）、2016年、論集『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界—比較民族誌的研究』、風響社、285頁
14		マイノリティと音楽の複合的關係に関する人類学的研究	20～23	15	Terada, Yoshitaka, 2016 (with E. Cámara de Landa, M. Isolabella, L. D'Amico), <i>Ethnomusicology and Audiovisual Communication: Selected Papers from the MusiCam 2014 Symposium</i> , Valladolid: Universidad de Valladolid, 236p. Terada, Yoshitaka, 2016, <i>An Audiovisual Exploration of Philippine Music: The Historical Contribution of Robert Garfias</i> (Senri Ethnological Reports 133), Osaka: National Museum of Ethnology, 124p. 寺田吉孝、2016年、『音楽からインド社会を知る—弟子と調査者のほざま』、臨川書店、215頁
15		平和・紛争・暴力に関する人類学的研究の可能性	20～23	17	小田博志・関雄二（編）、2014年、『平和の人類学』、法律文化社、218頁
16		中国における社会と文化の再構築—グローカリゼーションの視点から	20～23	20	韓敏（編）、2015年、『中国社会における文化変容の諸相—グローカリゼーションの視点から（国立民族学博物館論集3）』、風響社、381頁

通 番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
17	共同研究 (一般)	ウェルビーイング（福祉）の思想とライフデザイン	20～23	20	Nanami Suzuki (eds.). 2012, <i>The Anabaptist Idea and the Way of Practicing Care: Reconsidering the Meaning of Life in the 21st Century</i> (Senri Ethnological Studies 79), National Museum of Ethnology 鈴木七美（編）、2012 年、『「障害のない社会」にむけて—ウェルビーイングへの問いとノーマライゼーションの実践、（国立民族学博物館調査報告 102）』、国立民族学博物館、113 頁 Suzuki, Nanami (ed.), 2013, <i>The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together</i> (Senri Ethnological Studies 80), National Museum of Ethnology, 174p.
18		フェアトレードの思想と実践	20～23	17	
19		民族学博物館における表現創出を活用した異文化理解プログラムの開発～多元的な場での“気づきの深化”のデザイン化～	20～23	18	表現ワークショップ「影で出会う、影でつながる～ワヤン・クリ～」(2010 年 3 月 21-22 日、於：国立民族学博物館) 表現ワークショップ「思いと出会う、願いでつながる～インド刺繍～」(2011 年 6 月 5 日、於：国立民族学博物館) 西洋子、2012 年、「表現するからだ：共創の原初、未来への跳躍」、『計測と制御（計測自動制御学会）』51（11）、pp. 1072-1075
20		リスクと不確実性、および未来についての人類学的研究	20～23	14	東賢太朗・市野澤潤平・木村周平・飯田卓、2014 年、『リスクの人類学—不確実な世界を生きる』、世界思想社、346 頁
21		生の複雑性をめぐる人類学的研究：「第四世界」の新たな記述にむけて	20～23	14	小田亮、2009 年、「『二重社会』という視点とネオリベリズム：生存のための日常的実践『文化人類学』74 巻 2 号、pp. 272-292 小田亮、2009 年、「共同体と代替可能性について：社会の二層性についての試論」『日本常民文化紀要』第 27 輯、pp. 1-42 小田亮（編）、2010 年、『グローカリゼーションと共同性（グローバル研究叢書 1）』、成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、278 頁
22		ジェンダー視点による「仕事」の文化人類学的研究	20～23	15	中谷文美・宇田川妙子（編）、2016 年、『仕事の人類学—労働中心主義の向こうへ』、世界思想社、307 頁
23		民俗行事における造り物の多様性	20～23	19	笹原亮二・福原敏男（編）、2014 年、『造り物の文化史—歴史・民俗・多様性』、勉誠出版、462 頁
24		リプロダクションと家族のオルタナティブデザイン—文化と歴史の視点から	20～23	11	編集部（編）、2009 年、『アジアの出産』（アジア遊学 119 号）、勉誠出版、224 頁 松岡悦子・小浜正子（編）、2011 年、『世界の出産』、勉誠出版、334 頁 小浜正子・松岡悦子（編）、2014 年、『アジアの出産と家族計画』、勉誠出版、288 頁
25		朝鮮半島北部地域の民俗文化に関する基礎的研究	21～24	14	川上新二、2015 年、「朝鮮半島北東部・在家僧の村で行われた祖先祭祀について—北朝鮮で刊行された報告書を基にして—」、『宗教学論集』34 輯、pp. 69-81
26		言語の系統関係を探る—その方法論と歴史学研究における意味—	21～24	18	菊澤律子、2012 年、「標準語化と言語の消滅—地域言語の特徴とその歴史言語学的研究における価値—」、飯田卓（編）『マダガスカル地域文化の動態（国立民族学博物館調査報告 103）』、国立民族学博物館、pp. 75-99

通 番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
27	共同研究（一般）	オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究	21～24	14	丹羽典生・石森大知（編）、2013年、『現代オセアニアの〈紛争〉—脱植民地期以降のフィールドから』、昭和堂、247頁 丹羽典生（編）、2016年、『〈紛争〉の比較民族誌—グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』、春風社、368頁
28		サファリングとケアの人類学的研究	21～24	15	浮ヶ谷幸代（編著）、2014年、『苦悩することの希望—専門家のサファリングの人類学』、協同医書出版社、284頁 浮ヶ谷幸代（編）、2015年、『苦悩とケアの人類学—サファリングは創造性の源泉になりうるか？』、世界思想社、334頁
29		プラント・マテリアルをめぐる価値づけと関係性	21～24	17	落合雪野・白川千尋（編）、2014年、『ものとくらしの植物誌—東南アジア大陸部から』、臨川書店、334頁
30		アジア・アフリカ地域社会における〈デモクラシー〉の人類学—参加・運動・ガバナンス	21～24	14	真崎克彦、2013年、「〈対話〉論的シティズンシップ」をブータン村落で考える：民主的な〈対話〉の実現に向けて」、『国際開発研究』22（1）、pp. 55-66
31		映像の共有人類学—映像をわちあうための方法と理論—	21～24	12	村尾静二・箭内匡・久保正敏（編）、2014年、『映像人類学（シネ・アンソロポロジー）—人類学の新たな実践へ』、せりか書房、310頁
32		中国における民族文化の資源化とポリティクス—南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究	21～24	20	塚田誠之（編）、2016年、『民族文化資源とポリティクス—中国南部地域の分析から』、風響社、499頁
33		日本におけるネイティブ人類学／民俗学の成立と文化運動：1930年代から1960年代まで	22～24	13	
34		驚異譚にみる文化交流の諸相—中東・ヨーロッパを中心に—	22～25	16	山中由里子（編）、2015年、『〈驚異〉の文化史—中東とヨーロッパを中心に』、名古屋大学出版会、462頁
35		人類学における家族研究の新たな可能性	22～25	14	信田敏宏・小池誠（編）、2013年、『生をつなぐ家—親族研究の新たな地平』、風響社、338頁
36		日本の移民コミュニティと移民言語	22～25	19	多言語化現象研究会（編）（庄司博史他）、2013年、『多言語社会日本—その現状と課題』、三元社、293頁 庄司博史、2011年、「日本の多言語化と移民言語—複言語主義とのかかわりを視点に置いて」、 <i>Revue Japonaise de Didactique du Français</i> vol.6-1（日本フランス語教育学会）、pp. 160-165 庄司博史、2010、「資産としての母語教育の展開と可能性—その理念とのかかわりについて」、『ことばと社会（三元社）』12号、pp. 7-48
37		手織機と織物の通文化的研究	22～25	12	吉本忍（編著）、柳悦州作図、2013年、『世界の織機と織物』、国立民族学博物館、205頁
38		非境界型世界の研究—中東的な人間関係のしくみ	22～25	16	堀内正樹・西尾哲夫（編）、2015年、『〈断〉と〈続〉の中東—非境界の世界を泳ぐ』、悠書館、419頁
39		日本の「近代化」をアジア・アフリカ諸社会との比較で再検討する	22～25	17	

通番	種別区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
40	共同研究 (一般)	海外における人類学的 日本研究の総合的分析	22～25	16	桑山敬己(編著)、2016年、『日本はどのように語られたか— 海外の文化人類学的・民俗学的日本研究』、昭和堂、437頁
41		梅棹忠夫モンゴル研究 資料の学術的利用	23～25	7	小長谷有紀・堀田あゆみ(編著)、2013年、『梅棹忠夫のモン ゴル調査スケッチ原画集(国立民族学博物館調査報告111)』、 国立民族学博物館、301頁 小長谷有紀(編)、2014年、『梅棹忠夫のモンゴル調査ローマ 字カード集(国立民族学博物館調査報告122)』、国立民族学 博物館、397頁 娜仁格日勒(編著)、2015年、『梅棹忠夫の内モンゴル調査を 検証する(国立民族学博物館調査報告130)』、国立民族学博 物館、172頁
42		実践と感情—開発人類 学の新展開	23～25	17	関根久雄、2015年、『実践と感情：開発人類学の新展開』、春 風社、375頁
43		パレスチナ・ナショナ リズムとシオニズムの 交差点	23～26	15	菅瀬晶子、2012年、『豊穡と共生への祈り—パレスチナ・イ スラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬(民族紛争の背景 に関する地政学的研究 vol.19)』、大阪大学世界言語研究セン ター、73頁
44		人の移動と身分証明の 人類学	23～26	28	陳天璽・大西広之・森宏美・佐々木てる(共編著)、2016年、 『パスポート学』、北海道大学出版会、272頁
45		NGO 活動の現場に関 する人類学的研究—グ ローバル支援の時代に おける新たな関係性へ の視座	23～26	16	信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子(編著)、2017年、『グロー バル支援の人類学—変貌する NGO・市民活動の現場から』、 昭和堂、365頁
46		物質性の人類学：物 性・感覚性・存在論を 焦点として	23～26	13	古谷嘉章・関雄二・佐々木重洋(編著)、2017年、『「物質性」 の人類学：世界は物質の流れの中にある』、同成社、244頁
47		ストリート・ウィズダム とローカリティの創出に 関する人類学的研究	23～26	21	関根康正・鈴木晋介(編)、2017年、『南アジア系移民社会の 周辺化された人々：下からの創発的生活実践』、明石書店、 232頁
48		ネパールにおける「包 摂」をめぐる言説と社 会動態に関する比較民 族誌的研究	23～26	21	名和克郎(編)、2017年、『体制転換期ネパールにおける「包 摂」の諸相—言説政治・社会実践・生活世界』、三元社、592 頁
49		グローバリゼーション の中で変容する南アジ ア芸能の人類学的研究	23～26	14	
50		現代の保健・医療・福 祉の現場における「子 どものいのち」	23～26	12	道信良子(編)、2015年、『いのちはどう生まれ、育つのか— 医療、福祉、文化と子ども』、岩波書店・岩波ジュニア新書、 172頁
51		音盤を通してみる声の 近代—台湾・上海・日 本で発売されたレコー ドの比較研究を中心に	23～26	13	
52		災害復興における在来 知—無形文化の再生と 記憶の継承	24～26	16	橋本裕之・林勲男(編)、2016年、『災害文化の継承と創造』、 臨川書店、315頁
53		熱帯の「狩猟採集民」 に関する環境史的研究 —アジア・アフリカ・ 南アメリカの比較から	24～26	25	池谷和信(編)、2017年、『狩猟採集民からみた地球環境史— 自然・隣人・文明との共生』、東京大学出版会、320頁

通番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
54	共同研究 (一般)	贈与論再考—「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究	24～26	21	岸上伸啓（編著）、2016年、『贈与論再考—人間はなぜ他者に与えるのか』、臨川書店、314頁
55		肉食行為の研究	24～26	17	
56		触文化に関する人類学的研究—博物館を活用した“手学問”理論の構築	24～26	15	嶺重慎・広瀬浩二郎（編）、2014年、『知のバリアフリー—「障害」で学びを拡げる』、京都大学学術出版会、268頁 広瀬浩二郎、2015年、『身体でみる異文化—目に見えないアメリカを描く』、臨川書店、198頁 広瀬浩二郎、2016年、『ひとが優しい博物館—ユニバーサル・ミュージアムの新展開』青弓社、312頁
57		明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動—国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヴフ資料の再検討	24～27	12	
58		アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究—資源利用と物質文化の時空間比較	24～27	16	小野林太郎、2017年、『海の人類史—東南アジア・オセアニア海域の考古学（環太平洋文明叢書）』、雄山閣、224頁
59		「統制」と公共性の人類学的研究—ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ	24～27	14	
60		エージェンシーの定立と作用—コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望	25～28	13	
61		宗教人類学の再創造—滲出する宗教性と現代世界	25～28	16	
62		映像民族誌のナラティブの革新	25～27	11	川瀬慈、2015年、『特集企画《人類学と映像実践の新たな時代に向けて》』、『文化人類学』80巻1号、日本文化人類学会、pp. 6-19
63		聖地の政治経済学—ユーラシア地域大国における比較研究	25～28	11	
64		米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究	25～28	13	
65		表象のポリティックス—グローバル世界における先住民／少数者を焦点に	25～28	21	
66		東南アジアのポピュラーカルチャーアイデンティティ、国家、グローバル化	25～28	11	

通 番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
67	共同研究（一般）	近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開	25～28	15	
68		生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究	26～28	13	
69		現代「手芸」文化に関する研究	26～29	17	
70		近世カトリックの世界宣教と文化順応	26～29	13	
71		家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究—保育と介護の制度化／脱制度化を中心に	26～29	18	
72		政治的分類—被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する	26～29	16	
73		呪術的实践＝知の現代的位相—他の諸実践＝知との関係性に着目して	26～29	15	
74		資源化される「歴史」—中国南部諸民族の分析から	26～29	17	
75		モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究—国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に	26～29	14	
76		チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究	27～30	15	
77		グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	27～30	12	
78		驚異と怪異—想像界の比較研究	27～30	17	
79		応援の人類学—政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌	27～30	19	
80		考古学の民族誌—考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究	27～30	18	
81		宇宙開発に関する文化人類学からの接近	27～30	11	
82		放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究	27～30	13	

通番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
83	共同研究 (一般)	医療者向け医療人類学 教育の検討—保健医療 福祉専門職との協働	27～30	15	
84		個—世界論—中東から 広がる移動と遭遇のダイ ナミズム	27～30	13	
85		確率的事象と不確実性 の人類学—「リスク社会」 化に抗する世界像の描出	27～30	13	
86	共同研究 (若手)	映像資料を活用したイス ラームの多様性に関する 地域間比較研究	22～24	15	
87		交錯する態度への民族誌 的接近—連辞符人類学 の再考、そしてその先へ	22～24	7	
88		内陸アジアの宗教復興— 体制移行と越境を経験 した多文化社会における 宗教実践の展開	22～24	9	藤本透子（編）、2015年、『現代アジアの宗教—社会主義を経た地域を読む』、春風社、473頁
89		帰還移民の比較民族誌 的研究—帰還・故郷を めぐる概念と生活世界	23～25	9	
90		現代消費文化に関する 人類学的研究—モノの 価値の変化にみるグロー バル化の多元性に着目 して	24～26	9	
91		ランドスケープの人類学 的研究—視覚化と身体 化の視点から	24～26	11	河合洋尚（編）、2016年、『景観人類学—身体・政治・マテリアリティ』、時潮社、362頁
92		「国家英雄」から見る インドネシアの地方と 民族の生成と再生	24～26	13	津田浩司、2016年、「インドネシアの国家英雄ジョン・リー—「華人」という「主体」の物語を問う」、津田浩司、櫻田涼子、伏木香織（編著）、『「華人」という描線—行為実践の場からの人類学的アプローチ』、風響社、pp. 275-372 東南アジア学会第95回研究大会パネルセッション「インドネシア「国家英雄」認定に見る国民統合、地方と民族の現在」（於：大阪大学、2016年6月5日） 山口裕子・金子正徳・津田浩司（共編著）、2017年、『「国家英雄」が映すインドネシア』、木犀社、333頁
93		宗教の開発実践と公共性 に関する人類学的研究	25～27	12	
94		再分配を通じた集団の 生成に関する比較民族 誌的研究—手続きと多 層性に注目して	25～27	11	浜田明範、2015年、「書き換えの干渉：文脈作成としての政策、適応、ミステリ」、『一橋社会科学』第7巻（別冊）、pp. 125-150

通番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
95	共同研究 (若手)	演じる人・モノ・身体— 芸能研究とマテリアリテ ィの人類学の交差点	26～28	12	吉田ゆか子、2016年、『バリ島仮面舞踊劇の人類学—一人とモノの織りなす芸能』、風響社、382頁 吉田ゆか子、2016年、「レプリカの天女様のゆくえ—バリ島天女の舞トペン・レゴンにおける仮面の複製」、『国立民族学博物館報告』41(1)、pp. 1-36
96		高等教育機関を対象に した博物館資料の活用 に関する研究	27～29	13	呉屋淳子、2014年、「박물관자료를 활용한 교육 활동’ 일본국립민족학박물관 사례를 중심으로 (博物館資料を活用した教育活動: 日本国立民族学博物館の事例を中心に)」、『子どもと博物館研究』第7号、国立民俗博物館、pp. 60-70 呉屋淳子、2014年、「『伝統と文化』の教授を巡る教育制度と学校の関係性—沖縄県立八重山高等学校の教育課程の事例から—」、『日本研究』第36輯、韓国・中央大学日本研究所、pp. 293-310
97	マテリアリティの人間学 機関研究・	モノの崇拜: 所有・収 集・表象研究の新展開	21～24	19	川口幸也他(編著)、2010年、『彫刻家エル・アナツイの 아프리카 (民博特別展図録)』、読売新聞社・美連協 Clifford, James, 2011, “Repatriation and the Second Life of Heritage: Return of the Masks in Kodiak, Alaska”, <i>Bulletin of the National Museum of Ethnology</i> 35(4), pp. 713-744 竹沢尚一郎(編著)、2015年、『ミュージアムと負の記憶—戦争・公害・疾病・災害: 人類の負の記憶をどう展示するか』、東信堂、276頁
98		布と人間の人類学的研 究	22～24	21	関本照夫、2012年、「今日のインドネシアバティック産業」、窪田幸子・松井健(編)『アジア工芸の〈現在〉—工芸と人類学の基礎研究』、東京大学東洋文化研究所、pp. 65-70 国際ワークショップ「捨てるもの、捨てられないもの—布の履歴からモノの消費を考える」(2012年2月7-8日、於: 民博第4セミナー室) 国際シンポジウム「布を使う人、布に包まれる身体(からだ)」(2013年2月23日、於: 民博第4セミナー室)
99		民族学資料の収集・保 存・情報化に関する実 践的研究: ロシア民族 学博物館との国際共同 研究	24～26	41	Shagkanova, Olga A. and Sasaki Shiro (eds) 2015, <i>The Cultural Heritage of Buryats, Evenks and Semeyskiye: Material and Religious Articles from the Collections of the Ethnographic Museum of Transbaikalian Peoples (The Republic of Buryatia, Russia)</i> (Senri Ethnological Reports 128), National Museum of Ethnology, 176p. Shagkanova Olga A., Sasaki Shiro (ed.), 2016, <i>Culture of the Peoples of Siberia and the Russian Far East in Museums of Russia and Japan Collection, Registration, Conservation, and Exhibition</i> (Senri Ethnological Reports 135), National Museum of Ethnology, 160p.
100		文化遺産の人類学—グ ローバル・システムに おけるコミュニティと マテリアリティ	25～27	30	Iida, Taku, 2013, “The House as a Cultural Symbol”, in National Museum of Ethnology (ed.), <i>Handicrafting the Intangible: Zafimaniry Heritage in Madagascar</i> , National Museum of Ethnology, pp. 48-55 飯田卓、2013年、「文化の象徴としての家」、国立民族学博物館(編)、『霧の森の叡智—マダガスカル、無形文化遺産のものづくり』、国立民族学博物館、pp. 48-55 河合洋尚・飯田卓(編)、2016年、『中国地域の文化遺産—人類学の視点から(国立民族学博物館調査報告136)』、国立民族学博物館、328頁

通番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
101	ア リ テ ィ の 人 間 学	手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生	25～27	27	みんなくセミナー「暮らしの中の言語学『ことばの機能障害と言語学』」(2013年12月1日、於：日本財団ホール) 中野聡子・菊澤律子・市田泰弘・飯泉菜穂子・岡森裕子・金澤貴之・原大介、2015年、「手話通訳における複合語の訳出：通訳スキルの違いにおける比較」、『通訳翻訳研究』(15)、pp. 17-34
102	機 関 研 究 ・ 包 摂 と 自 律 の 人 間 学	支援の人類学：グローバルな互惠性の構築に向けて	21～24	15	CHEN, Tien-shi, 2012, "Statelessness in Japan: Management and Challenges", <i>Journal of Population and Social Studies</i> 21 (1), pp. 70-81 鈴木紀・滝村卓司(編著)、2013年、『国際開発と協働—NGOの役割とジェンダーの視点(みんなく実践人類学シリーズ第8巻)』、明石書店、273頁 陳天璽(編)、2014年、『世界における無国籍者の人権と支援—日本の課題—国際研究集会記録(国立民族学博物館調査報告118)』、国立民族学博物館、229頁
103		近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ—スペイン領アメリカの集住政策の研究	23～25	14	安村直己、2014年、「スペイン帝国とネイション形成—植民地期メキシコ先住民の経験を中心に」、渡辺節夫(編)、『近代国家の形成とエスニシティ—比較史的研究』、勁草書房、pp. 267-298 Wilde, Guillermo, 2015, "The Sounds of Indigenous Ancestors: Music, Corporality and Memory in the Jesuit Missions of Colonial South America", in Patricia Zhall (ed.), <i>The Oxford Handbook of Music Censorship</i> , New York: Oxford University Press.
104		ケアと育みの人類学	23～25	28	Suzuki, Nanami (ed.), 2014 <i>The Anthropology of Care and Education for Life: Searching for Resilient Communities in Multicultural Aging Societies</i> (Senri Ethnological Studies 8), National Museum of Ethnology, 210p. Suzuki, Nanami (ed.), 2014 <i>Healing Alternatives: Care and Education as a Cultural Lifestyle</i> (Senri Ethnological Reports 120), National Museum of Ethnology, 147p.
105		中国における家族・民族・国家のディスコース	24～26	26	韓敏・末成道男(編)、2014年、『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態—東亜人類学者的理論探索(Senri Ethnological Studies 90)』、国立民族学博物館、278頁 韓敏(編著)、2015年、『近代社会における指導者崇拜の諸相(国立民族学博物館調査報告127)』、国立民族学博物館、125頁 韓敏(編著)、2015年、『中国社会における文化変容の諸相—グローバル化の視点から(国立民族学博物館論集3)』、風響社、381頁
106	フ ォ ー ラ ム 型 (開 発 プ ロ ジ ェ ク ト)	北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有	26～29	15	伊藤敦規、2015年、「国立民族学博物館における研究公演の再定義—『ホピの踊りと音楽』の記録とフォーラムとしてのミュージアムの視点からの考察」、『国立民族学博物館研究報告』39巻3号、pp. 397-458 伊藤敦規、2015年、「再会ツールとしての著作権—国立民族学博物館所蔵カナダ先住民版画資料の著作権処理を事例として」、齋藤玲子(編)、『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題—国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをととして(国立民族学博物館調査報告131)』、国立民族学博物館、pp. 211-227 伊藤敦規(編)、2016年、『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有—民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望(国立民族学博物館調査報告137)』、国立民族学博物館調査報告、136頁

通 番	種別 区分等	研究課題	研究期間 (年度)	共同 研究者数	共同研究の主な成果
107	開発型 プロジェクト （フォーラム型）	台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応	27～30	12	野林厚志、2015年、「「情報遺産」を博物館が構築する意義—「核としての周縁」からの発信」、『民博通信』第151号、pp.12-13
108	フォーラム型 （強化型プロジェクト）	「朝鮮半島の文化」に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築	26～27	9	特別展「韓日食博—わかちあい・おもてなしのかたち」（2015年8月27日-11月10日）
109		徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築	26～27	6	
110		民博所蔵「ジョージ・ブラウン・コレクション」の総合的データベースの構築	26～27	9	データベース「ジョージ・ブラウン・コレクション（ http://htq.minpaku.ac.jp/databases/GBC/index-jpn.html ）」
111		北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究—民博コレクションを中心に	27～29	4	

（年度は平成）

注：フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトは、国内外の研究機関や大学、博物館および現地社会と連携しながら国立民族学博物館および連携諸機関が所蔵する多様な文化資源に関する国際共同研究を推進し、その成果を個々の文化資源に関する基礎情報に加味して記録化するとともに、フォーラム型情報ミュージアム（多言語によるフォーラム機能をもつマルチメディア対応のデジタル・アーカイブズ）から発信するプロジェクトです。

6. 各機関の共同利用・共同研究窓口

6-1. 国立歴史民俗博物館

- 施設・実験機材の共同利用／共同研究一般／特別共同利用研究員
管理部研究協力課研究教育係

TEL (施設・実験機材の共同利用／共同研究一般): 043-486-6473

(特別共同利用研究員): 043-486-4361

FAX: 043-486-6494

E-mail: kenkyo@ml.rekihaku.ac.jp

URL (共同研究一般):

<https://www.rekihaku.ac.jp/research/list/joint/index.html>

URL (特別共同利用研究員):

https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/education/graduate_school/special_researcher/index.html

- 館蔵資料の特別利用

管理部博物館事業課資料係

TEL: 043-486-6481

FAX: 043-486-4210

E-mail: daityo@ml.rekihaku.ac.jp

URL: http://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/material/index.html

- 機関拠点型基幹研究プロジェクトについて

管理部研究協力課企画・渉外係

TEL: 043-486-4206

FAX: 043-486-6494

E-mail: kikaku@ml.rekihaku.ac.jp

URL: <http://www.metaresource.jp/>

- 図書の利用

管理部研究協力課図書係

TEL: 043-486-6491

FAX: 043-486-4080

E-mail: tosyosyo@ml.rekihaku.ac.jp

URL: <http://opac.rekihaku.ac.jp/opac/jsp/info/kenkyu.html>

6-2. 国文学研究資料館

- 館蔵資料の共同利用

○サービス一般、ILL (図書館協力)・郵送複写

管理部学術情報課情報サービス第1係

TEL: 050-5533-2926

FAX: 042-526-8607

E-mail: etsuran@nijl.ac.jp

○史料に関すること、翻刻掲載・撮影掲載の申請

管理部学術情報課情報サービス第2係

TEL: 050-5533-2927

FAX: 042-526-8607

E-mail: jouetu@nijl.ac.jp

※「利用案内、複写申込み」のお問い合わせの際には件名に「(問い合わせ) 情報サービス第1係宛」を、「翻刻掲載・撮影掲載の申請」に関するお問い合わせの際には件名に「(問い合わせ) 情報サービス第2係掲載担当宛」をご記入ください。ご協力お願いいたします。

6-3. 国立国語研究所

- 施設の共同利用／共同研究／館蔵資料の共同利用

代表

TEL: 042-540-4300

FAX: 042-540-4333

- 特別共同利用研究員

管理部研究推進課

TEL: 042-540-4374

FAX: 042-540-4334

URL: <http://www.ninjal.ac.jp/research/young-researchers/graduate/>

- 図書の利用

研究図書室

TEL: 042-540-4640

FAX: 042-540-4339

URL: <http://www.ninjal.ac.jp/info/aboutus/library/>

※メールでのお問い合わせはメールフォームを御利用ください。

URL: <https://www.ninjal.ac.jp/cgi-bin/form/contact/form.cgi>

※コーパス・データベースについては、各ウェブページ記載の連絡先にお問い合わせください。

6-4. 国際日本文化研究センター

- 共同研究／特別共同利用研究員

管理部研究協力課研究支援係

TEL: 075-335-2044

FAX: 075-335-2092

E-mail: kyoudou@nichibun.ac.jp

- 図書の利用
情報管理施設資料課資料利用係
TEL: 075-335-2066
FAX: 075-335-2093
E-mail: riyou@nichibun.ac.jp

6-5. 総合地球環境学研究所

- 実験施設の共同利用
研究基盤国際センター計測・分析部門
TEL: 075-707-2100
FAX: 075-707-2106
E-mail: doitai@chikyu.ac.jp
URL: <http://www.chikyu.ac.jp/laboratories/>
- 共同研究／特別共同利用研究員
管理部企画連携課研究企画係
TEL: 075-707-2100
FAX: 075-707-2106
E-mail: kenkyou@chikyu.ac.jp
URL: <http://www.chikyu.ac.jp/>
- 図書の利用
図書室
TEL: 075-707-2100
FAX: 075-707-2191
E-mail: tosho@chikyu.ac.jp
URL: <http://www.chikyu.ac.jp/activities/library/>

6-6. 国立民族学博物館

- 館蔵民族学資料の共同利用
民族学資料共同利用窓口
TEL: 06-6878-8213
FAX: 06-6878-8213
E-mail: kyodo-mado@idc.minpaku.ac.jp
URL: <http://www.minpaku.ac.jp/research/sharing/helpdesk>
- 共同研究
管理部研究協力課共同利用係
TEL: 06-6878-8364
FAX: 06-6878-8479

E-mail: kyodo@idc.minpaku.ac.jp

URL: <http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/iurp>

- 特別共同利用研究員

管理部研究協力課研究協力係

TEL: 06-6878-8236

FAX: 06-6878-8479

E-mail: souken@idc.minpaku.ac.jp

URL: <http://www.minpaku.ac.jp/research/education/utilization/sjrf>

- 図書の利用

図書室カウンター

TEL: 06-6878-8271

FAX: 06-6878-8249

E-mail: nme-lib@idc.minpaku.ac.jp

URL: <http://www.minpaku.ac.jp/research/sharing/library>

あとかき

一般に、共同利用や共同研究はいずれの学術分野においても世界的に実施されていますが、大学共同利用機関や共同利用・共同研究拠点が組織的に共同利用・共同研究を推進する制度は、我が国独自の優れたシステムであると言えます。こうした共同利用・共同研究体制は今後ますます重要になると考えられます。なぜなら、学術領域の先端において分野の融合が進んでいるように、現代社会の複雑な課題に挑戦するためには、研究者の能力を結集し、複数の領域にまたがる共同研究を推進することが求められているからです。とりわけ、人文系の場合は、全国の諸大学等研究機関に研究者が分散しているため、個々の研究者の力をまとめあげる上で、人文機構が果たすべき役割は大きいと認識しております。

現在、科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会において今後の共同利用・共同研究体制について抜本的な改革が論じられていることを受けて、人文機構を構成する各機関の共同利用性をより一層高めていくための第一歩として、これまで「研究活動現況調査」などに提出してきたデータを改めてとりまとめ、若干の解説を加えて『人間文化研究機構における共同利用・共同研究——ファクトブック（2010-2015 年度）——』として周知に努める次第です。

今後は人文機構各 6 機関において、それぞれの IR（Institutional Research）に基づき、共同利用ならびに共同研究の体制を常に見直しながら、大学等研究機関との協業を充実させ、機能強化に貢献していくこととなります。国内外の研究組織および研究者の皆さま方からの率直なご意見をお待ちしております。

人間文化研究機構

理 事 小長谷有紀